

テーマ別調査結果

- 1 . 人権全般に関わる市民意識

1)「日常生活や社会全般に関する見方や考え方」について(問1)

(1) 家庭における男女の役割分担

< 全体的な傾向 >

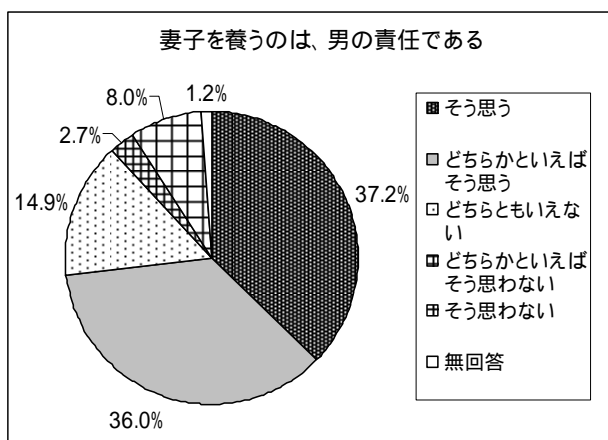
「妻子を養うのは、男の責任である」「女の子は女の子らしく、男の子は男の子らしく育てるべきだ」「子どもが3歳くらいまでは母親の手で育てるべきだ」については「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を選択した人(肯定派)が半数以上となっており、男女の家庭内での役割意識と「らしさ」の考え方が継承されている。(図表 - 1 - 1、 - 1 - 3、 - 1 - 5)

「女の子は女の子らしく、男の子は男の子らしく育てるべきだ」は、前回調査と比較して肯定派がやや増加している。(図表 - 1 - 4)

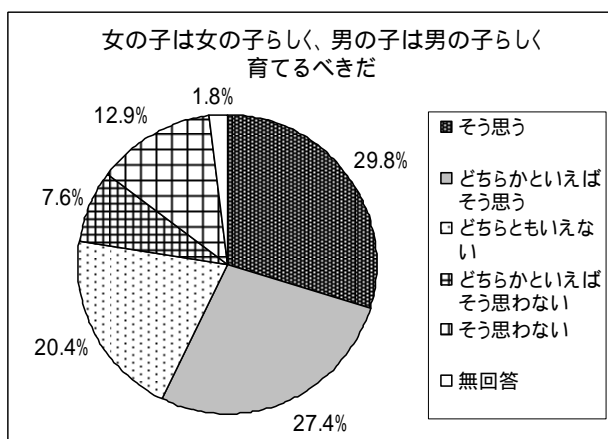
「子どもが3歳くらいまでは母親の手で育てるべきだ」については肯定派がやや減少している。(図表 - 1 - 6)

「夫を『主人』、妻を『家内』と呼ぶことについて違和感がある」については、「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」が半数以上となっている。(図表 - 1 - 2)

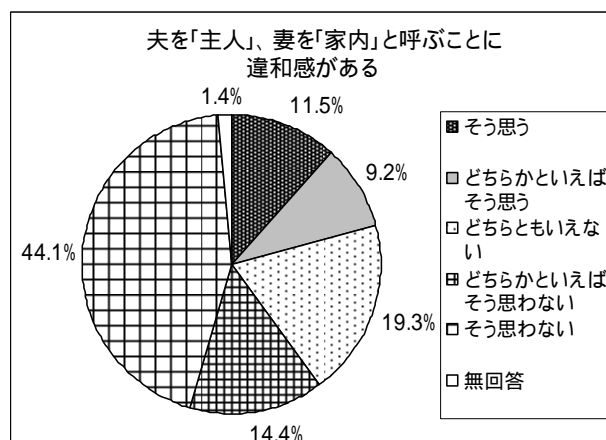
図表 - 1 - 1



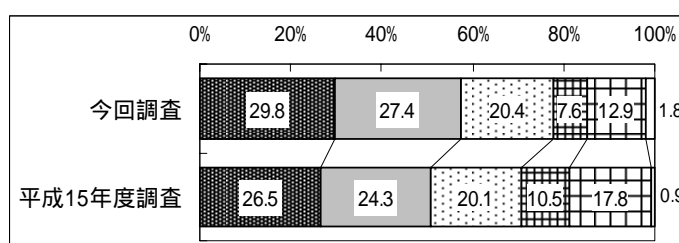
図表 - 1 - 3



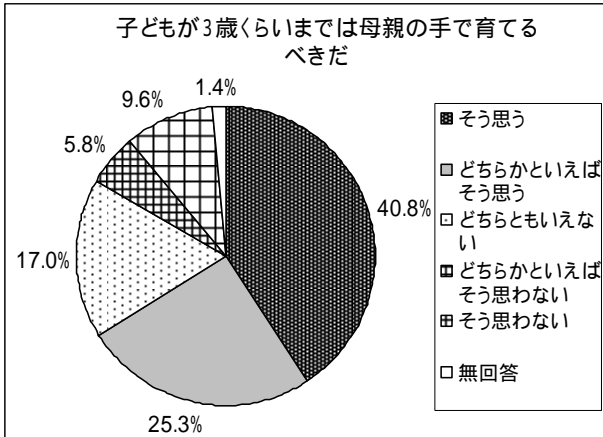
図表 - 1 - 2



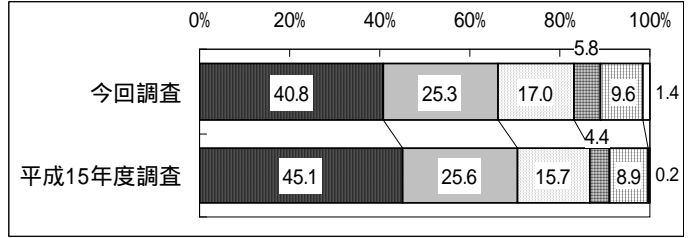
図表 - 1 - 4



図表 - 1 - 5



図表 - 1 - 6

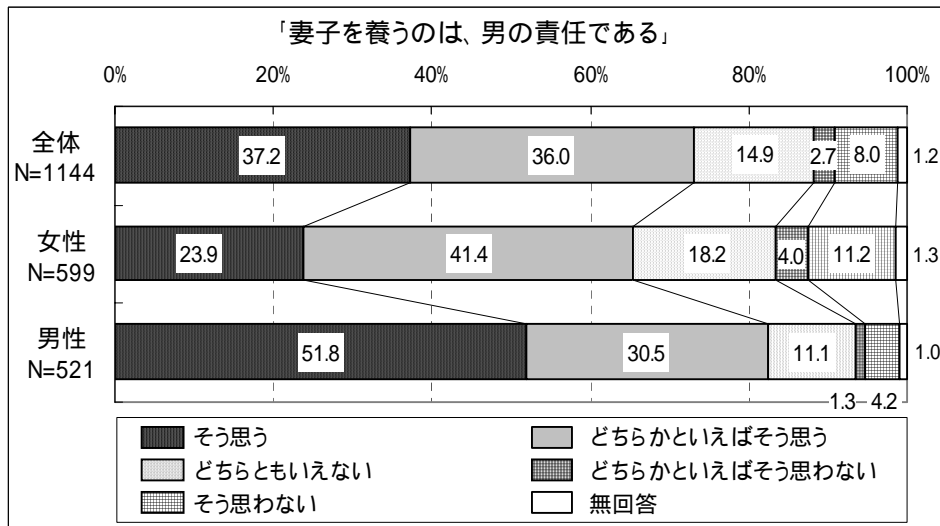


< 男女別・年代別 >

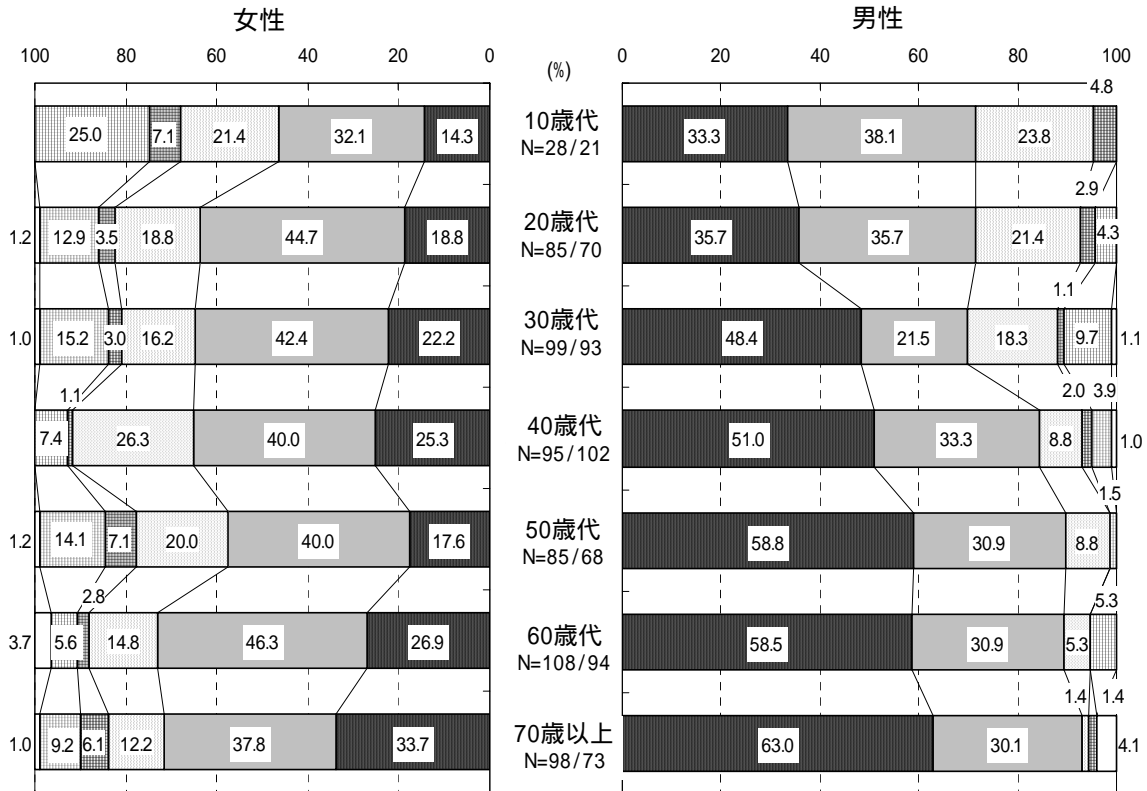
「妻子を養うのは、男の責任である」については、男性は51.8%が「そう思う」としており、「どちらかといえばそう思う」を含めると80%以上が「妻子を養うのは、男の責任である」と思っている。女性は「どちらかといえばそう思う」が41.4%と最も多く、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定している人が65.3%となっている。「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」と否定している人は15.2%である。(図表 - 1 - 7)

年代別にみると女性は10歳代で「そう思わない」が25.0%となっており、他の年代と比較して多い。男性は年代が上がるほど、「思う」「どちらかといえばそう思う」が大半となる。(図表 - 1 - 8)

図表 - 1 - 7



図表 - 1 - 8

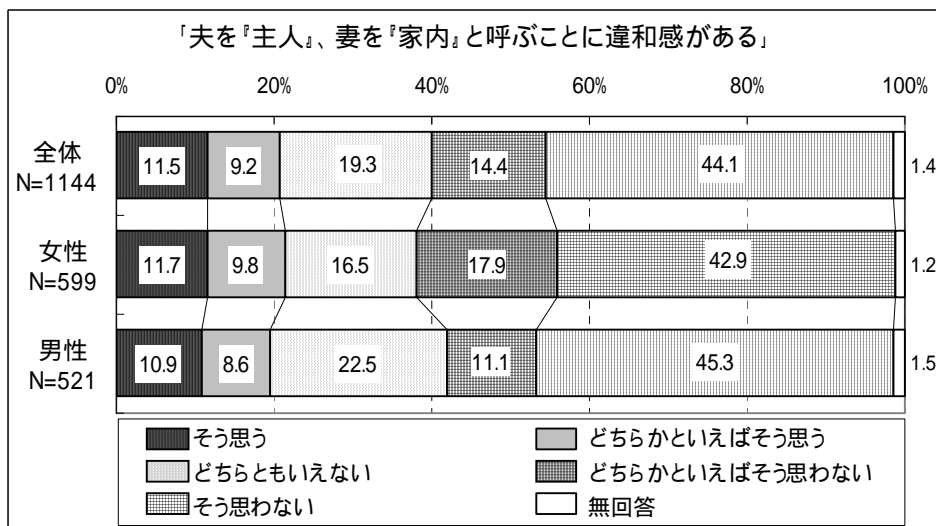


「夫を『主人』、妻を『家内』と呼ぶことに違和感がある」については、女性の42.9%、男性の45.3%が「そう思わない」としている。「どちらかといえばそう思わない」を含めて、違和感がない回答者が、男女ともに50%を超えている。(図表 - 1 - 9)

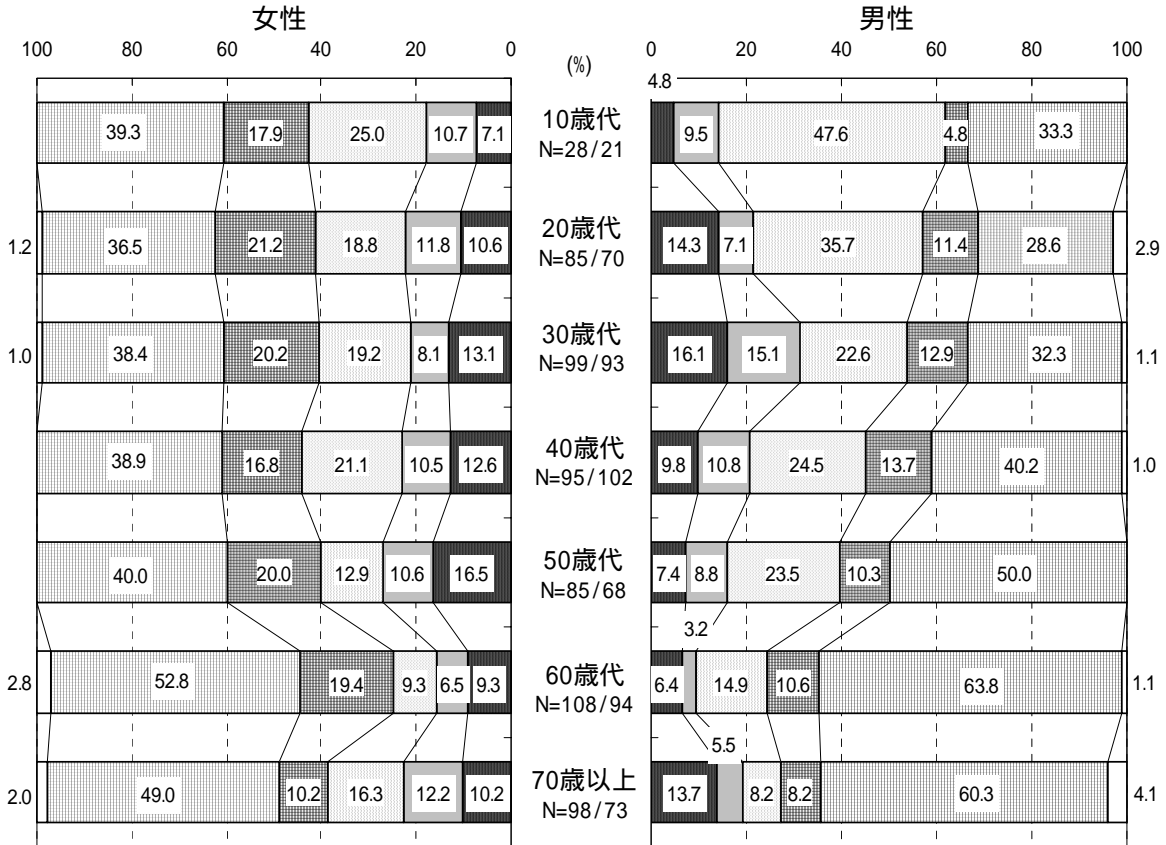
女性では60歳代で、男性では50歳代以上で「そう思わない」とする割合が50%を超えている。

女性は、60歳代を除いて、「そう思わない」割合に年代差はないが、男性は、年代があがるほど違和感がない人の割合が増える。男性の30歳代で「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と違和感がある人の割合が比較的高く、31.2%となっている。(図表 - 1 - 10)

図表 - 1 - 9



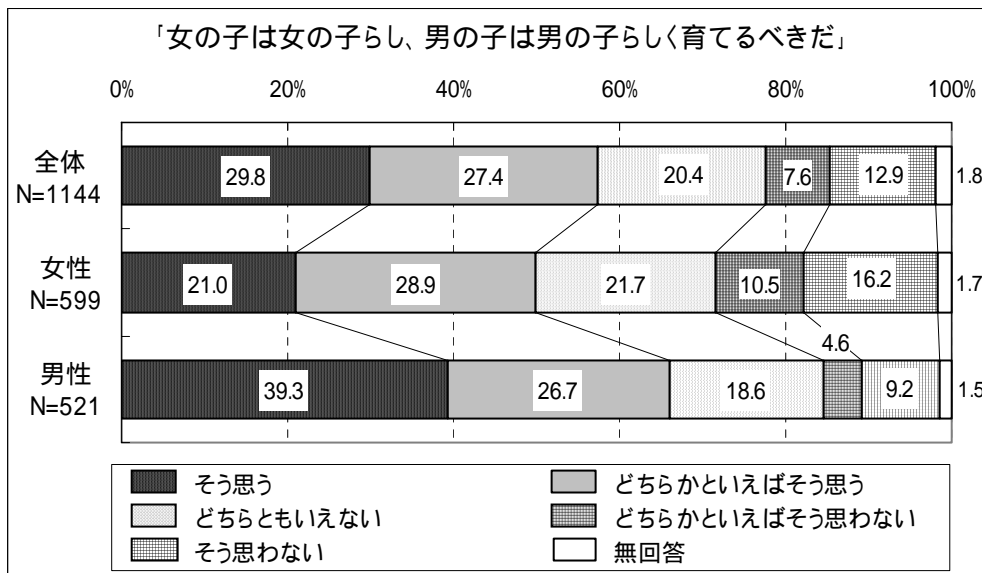
図表 - 1 - 10



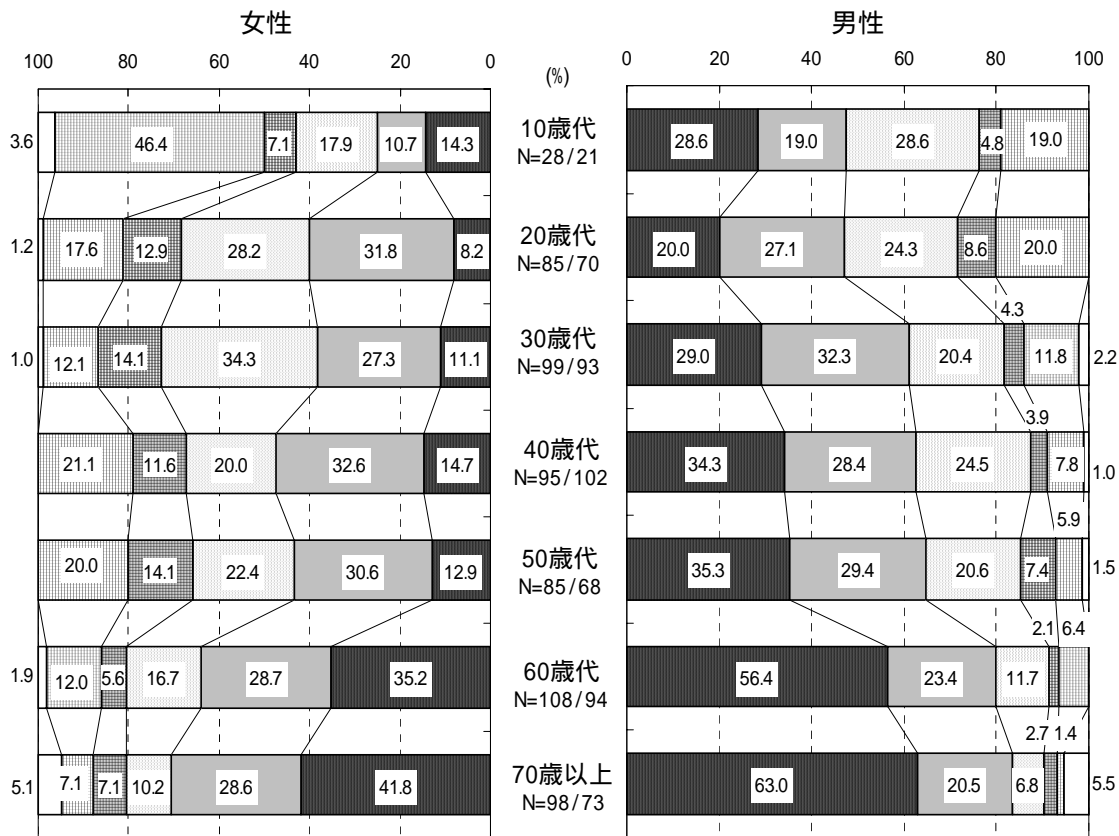
「女の子は女の子らしく、男の子は男の子らしく育てるべきだ」については、女性の 21.0%、男性の 39.3% が「そう思う」、女性の 28.9%、男性の 26.7% が「どちらかといえばそう思う」としている。女性に比べて男性の方が、「そう思う」とする割合が多い。(図表 - 1 - 11)

男女ともに、年代があがるほど「女の子は女の子らしく、男の子は男の子らしく育てるべきだ」という人の割合が多くなる。女性の 10 歳代では「そう思わない」の割合が 46.4% となっている。(図表 - 1 - 12)

図表 - 1 - 11



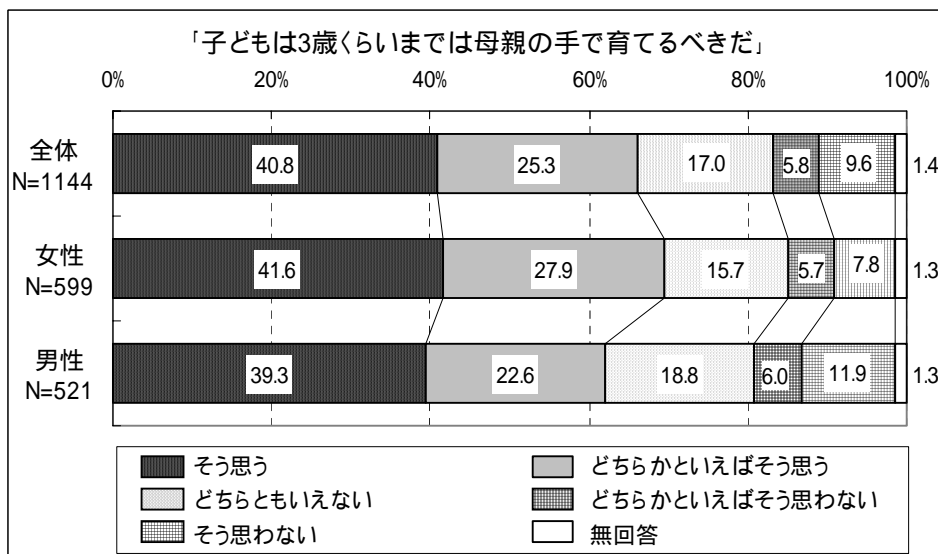
図表 - 1 - 12



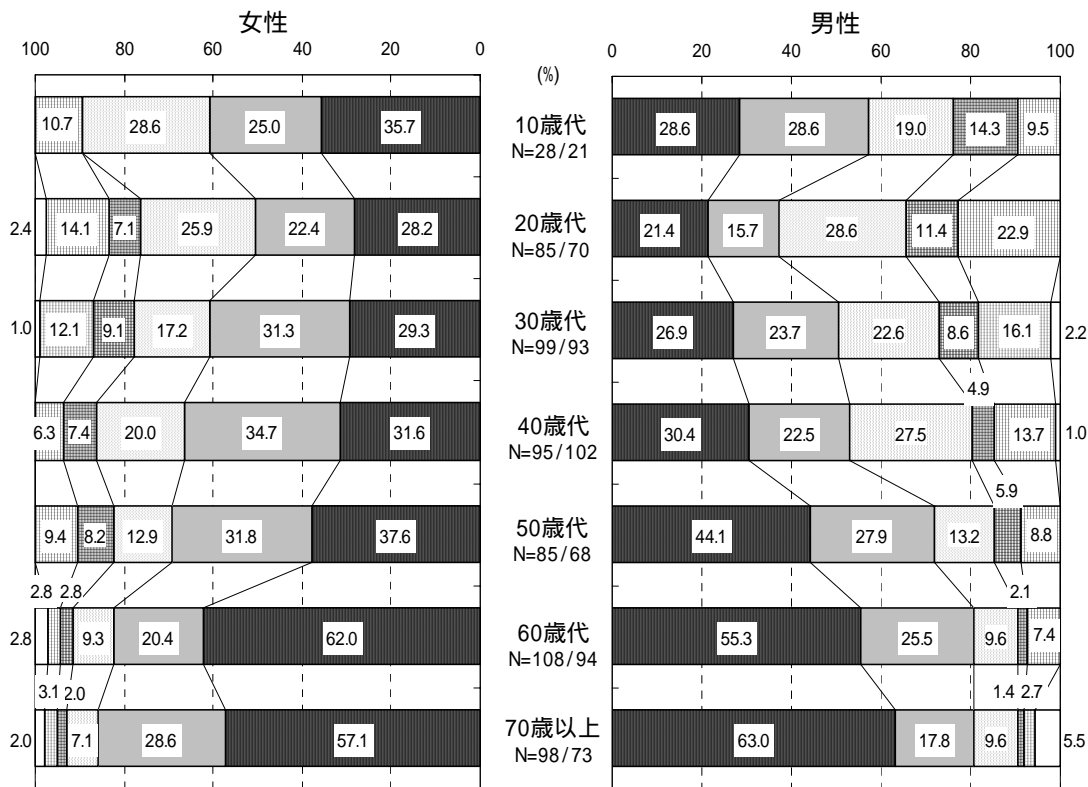
「子どもが3歳くらいまでは母親の手で育てるべきだ」について、女性の41.6%、男性の39.3%が「そう思う」、女性の27.9%、男性の22.6%が「どちらかといえばそう思う」としている。男性に比べて女性の方が、「子どもが3歳くらいまでは母親の手で育てるべきだ」とする人の割合がやや多い。(図表 - 1 - 13)

年代があがるほど、母親の手で育てるべきだとする人の割合も多くなるが、男女ともに20歳代で、他の年代に比べて母親の手で育てるべきだとする人の割合が少なく、そう思わない人の割合が多くなっている。(図表 - 1 - 14)

図表 - 1 - 13



図表 - 1 - 14



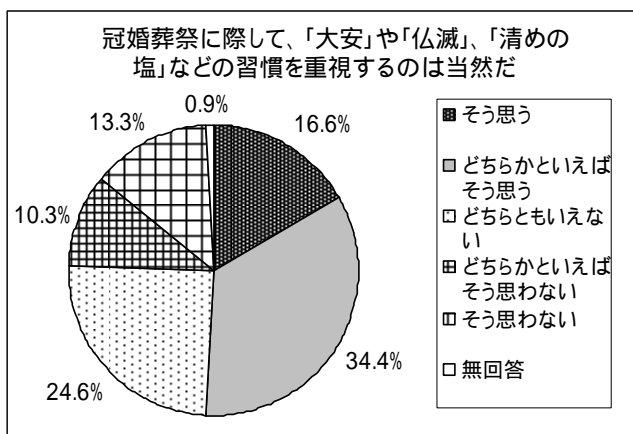
(2) 慣習や世間体について

< 全体的な傾向 >

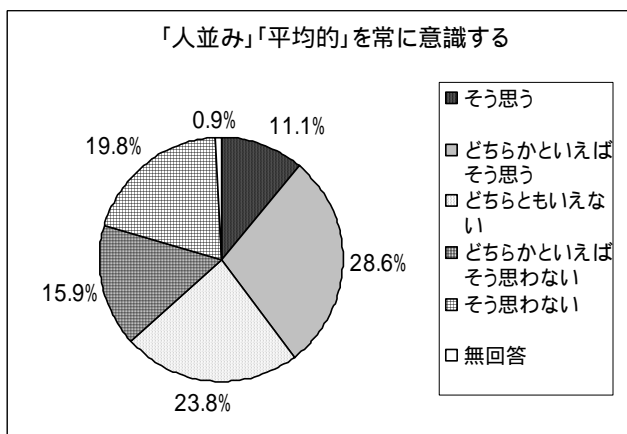
「冠婚葬祭に際して、『大安』や『仏滅』、『清めの塩』などの習慣を重視するのは当然だ」については、「どちらかといえばそう思う」が34.4%、「どちらともいえない」が24.6%であるが、「そう思う」も16.6%で、「冠婚葬祭に際して、『大安』や『仏滅』、『清めの塩』などの習慣を重視すること」に肯定的な人が半数となっている。(図表 - 1 - 15)

「『人並み』『平均的』を常に意識する」については、「どちらかといえばそう思う」が28.6%、「どちらともいえない」23.8%、「そう思わない」19.8%となっており、意識する人と意識しない人が同程度の割合となっている。(図表 - 1 - 16)

図表 - 1 - 15



図表 - 1 - 16

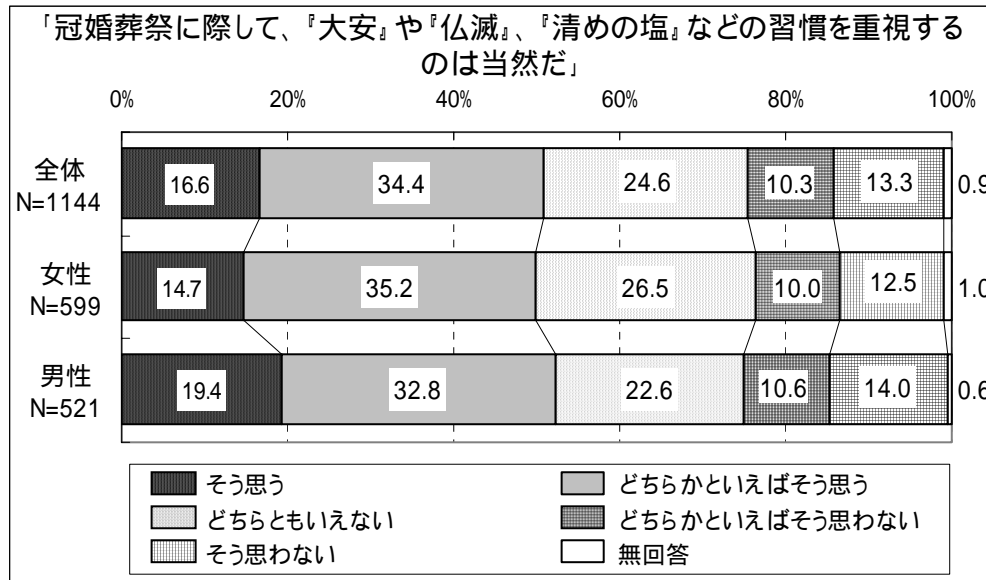


< 男女別・年代別 >

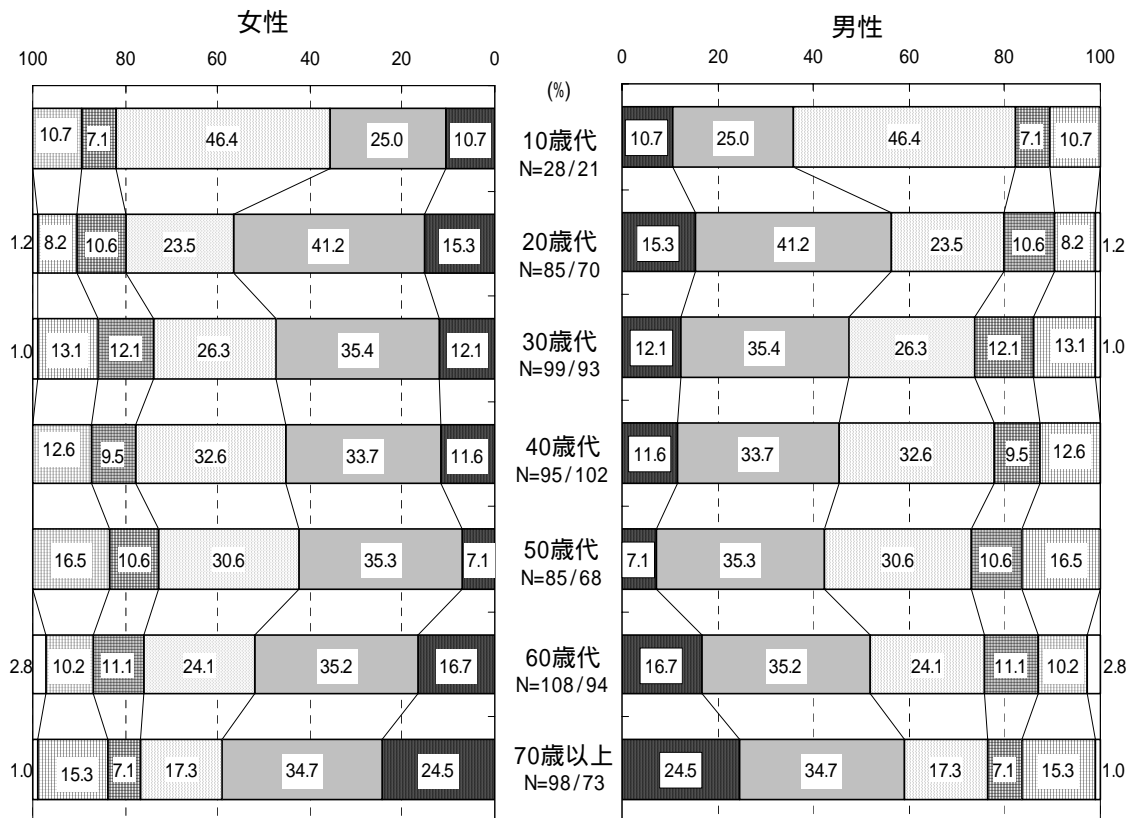
「冠婚葬祭に際して、『大安』や『仏滅』、『清めの塩』などの習慣を重視するのは当然だ」については、女性に比べて男性の方が、「そう思う」割合が多い。(図表 - 1 - 17)

20歳代で、「冠婚葬祭に際して、『大安』や『仏滅』、『清めの塩』などの習慣を重視するのは当然だ」とする人の割合が60歳以上の年代と同程度となっている。(図表 - 1 - 18)

図表 - 1 - 17



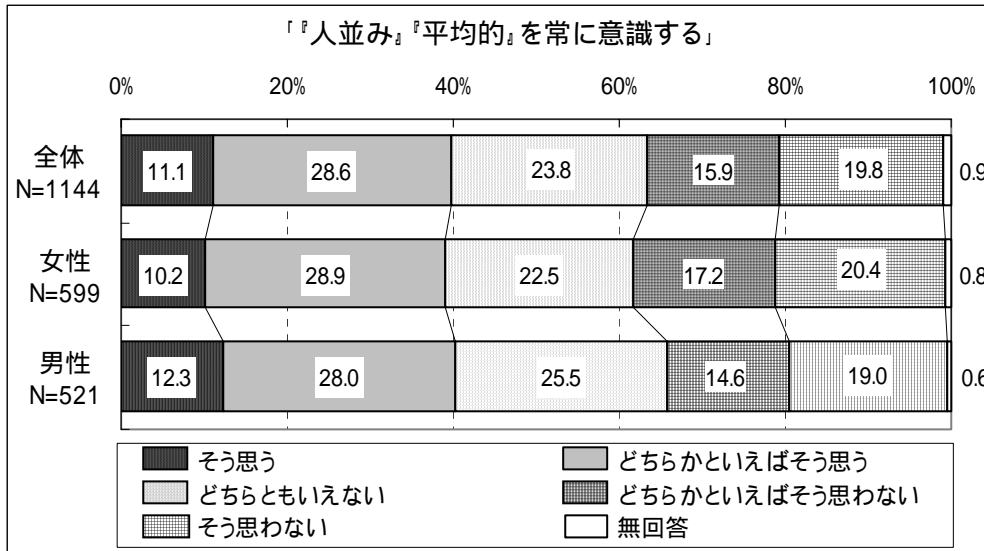
図表 - 1 - 18



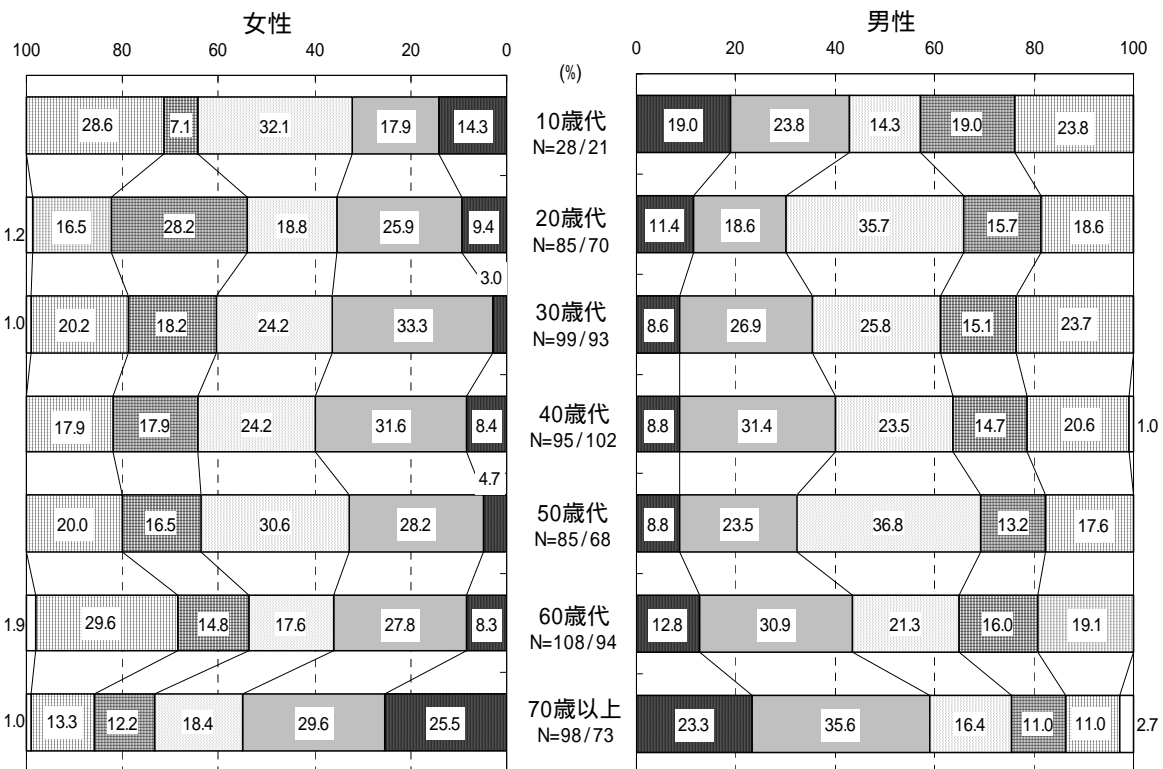
「『人並み』『平均的』を常に意識する」については、女性の 10.2%、男性の 12.3%が「そう思う」、女性の 28.9%、男性の 28.0%が「どちらかといえばそう思う」としている。(図表 - 1 - 19)

年代別では、年代ごとに傾向の違いがでている。70 歳以上と 10 歳代では、「そう思う」という割合が他の年代に比べて多い。一方で、女性では 10 歳代と 60 歳代が他の年代に比べて「そう思わない」が多い。(図表 - 1 - 20)

図表 - 1 - 19



図表 - 1 - 20



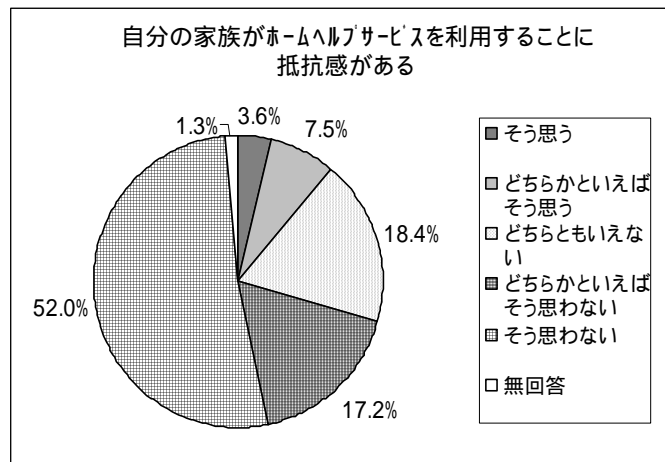
(3) 福祉サービスの利用について

< 全体的な傾向 >

「自分の家族がホームヘルプサービスを利用することに抵抗感がある」については、「そう思わない」が 52.0%で、「どちらかといえばそう思わない」も 17.2%となっており、「抵抗感がある」ことを否定している人が 70%弱となっている。(図表 - 1 - 21)

平成 15 年度調査では、「ホームヘルパー等利用時に世間体を気にする必要はない」という問いかけをしているが、「そう思う」は 81.3%、「どちらかといえばそう思う」は 13.3%と肯定した人が 94.6%にのぼった。このことと比べると、「世間体」ではなく、個人的に「抵抗感」がある人がいることがうかがえる。

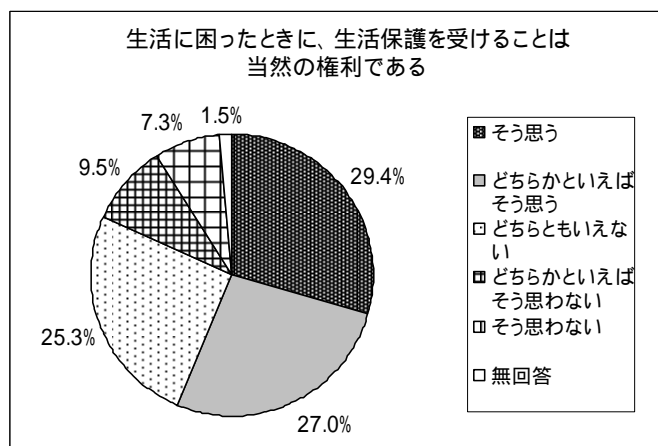
図表 - 1 - 21



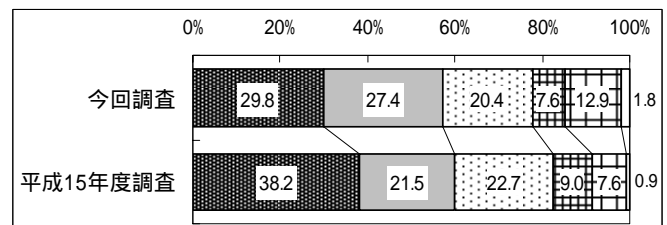
「生活に困ったときに、生活保護を受けることは、当然の権利である」については、「そう思う」が 29.4%、「どちらかといえばそう思う」が 27.0%となっており、当然の権利であると思う人が過半数である。「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」人はあわせて 16.8%である。(図表 - 1 - 22)

平成 15 年度調査では、「生活保護を受けることは、恥ずかしいことではない」という問いかけをしているが、「そう思う」は 38.2%、「どちらかといえばそう思う」は 21.5%となっており、今回調査は、これに比べると肯定している人の割合が減っている。「恥ずかしいこと」ではないが、「当然の権利である」とまでは考えていない人がいることがうかがえる。(図表 - 1 - 23)

図表 - 1 - 22



図表 - 1 - 23

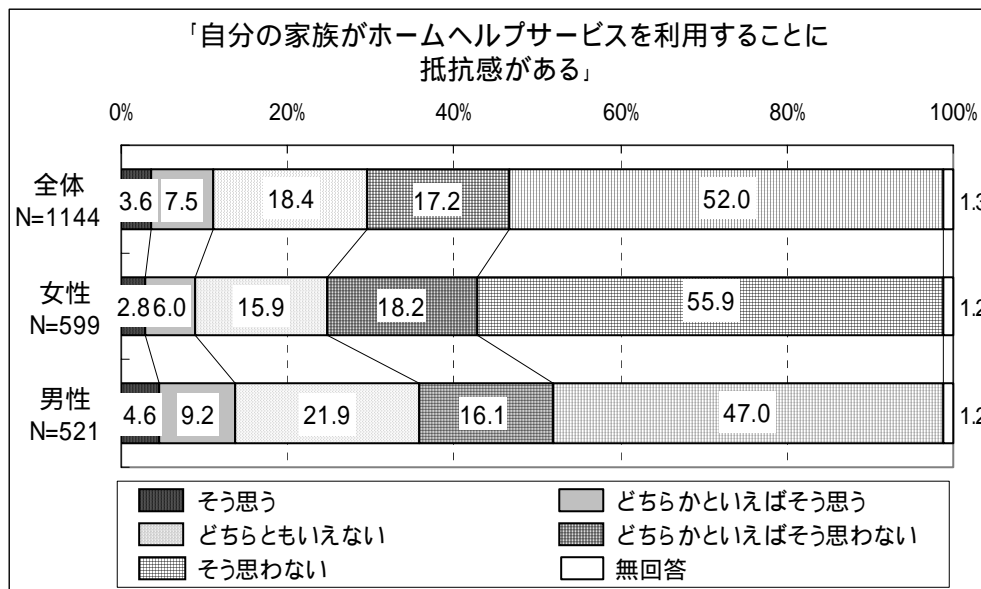


< 男女別・年代別 >

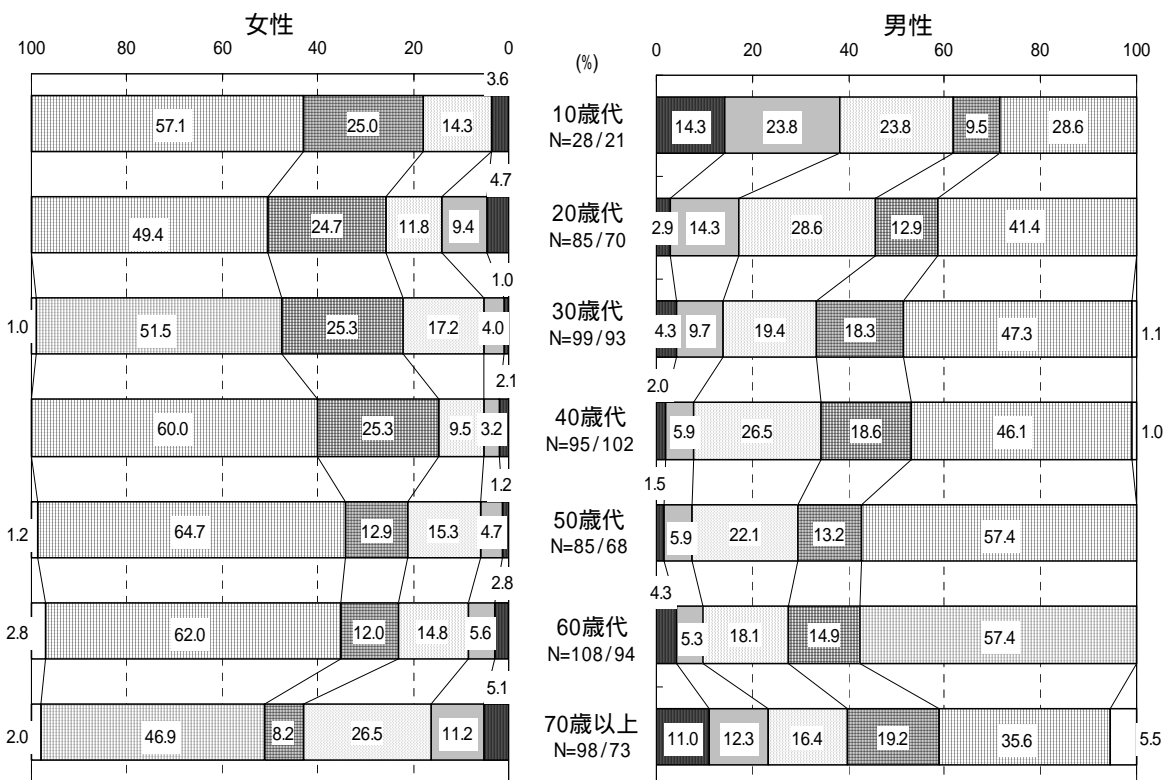
「自分の家族がホームヘルプサービスを利用することに抵抗感がある」については、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合わせた割合が、女性では8.8%、男性では13.8%と、女性より男性の方が抵抗感のある人がやや多い。(図表 - 1 - 24)

男性の10歳代と70歳代以上で抵抗感のある人が、他の世代よりやや多い。(図表 - 1 - 25)

図表 - 1 - 24



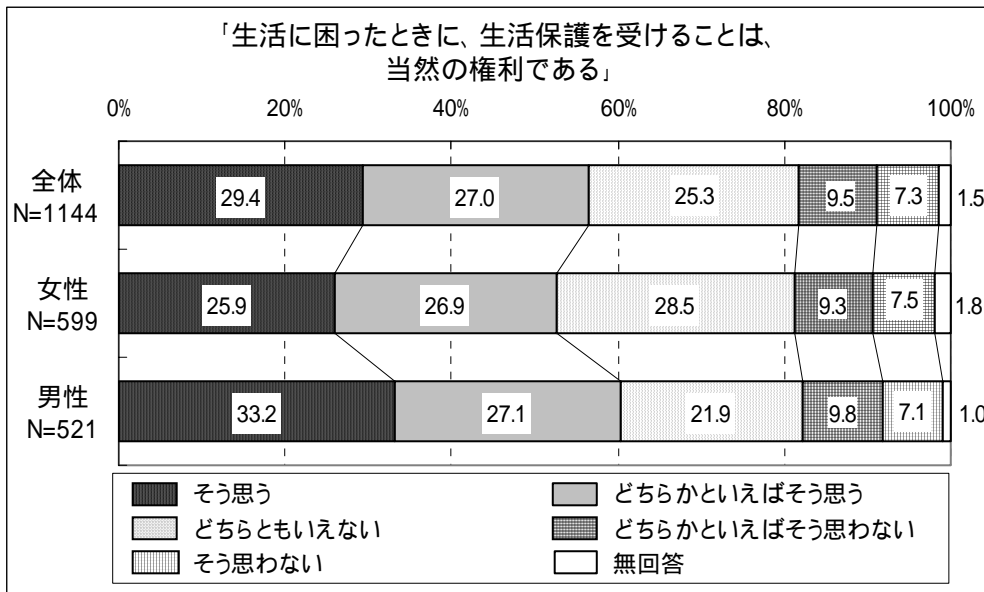
図表 - 1 - 25



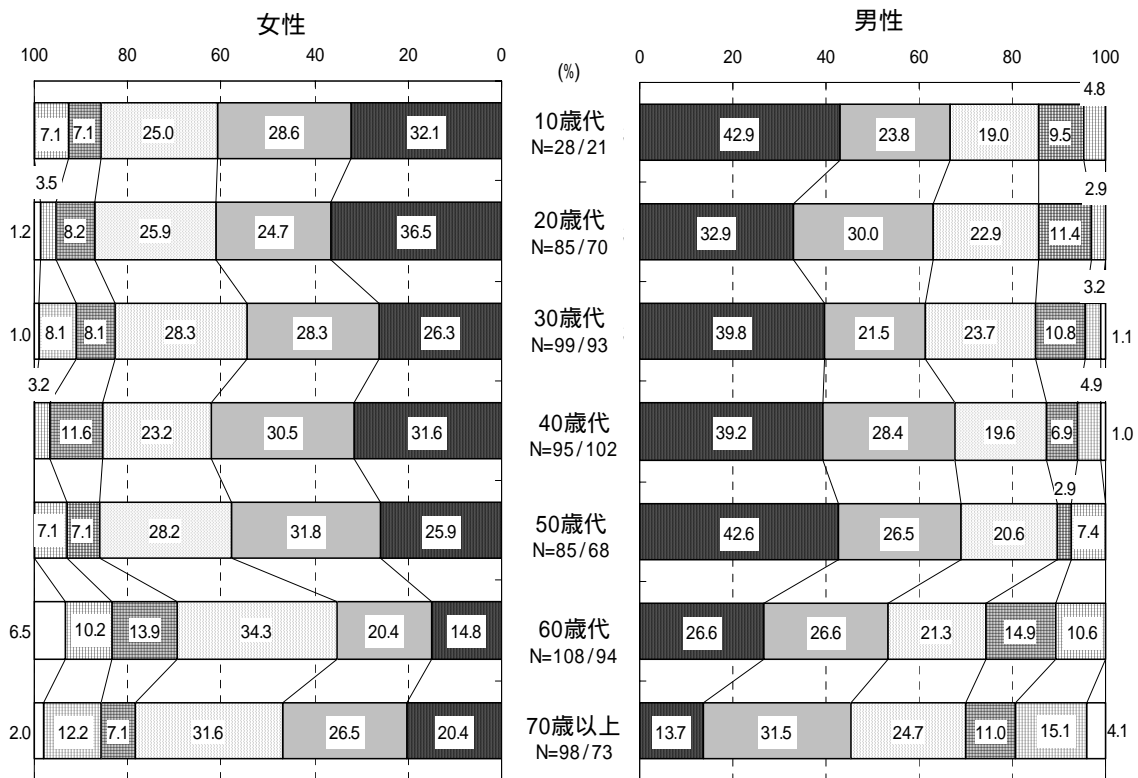
「生活に困ったときに、生活保護を受けることは、当然の権利である」については、女性の25.9%、男性の33.2%が「そう思う」、女性の26.9%、男性の27.1%が「どちらかといえばそう思う」、女性の28.5%、男性の21.9%が「どちらともいえない」としている。女性に比べて男性の方が、肯定する割合がやや多い。(図表 - 1 - 26)

60歳以上の世代で、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と当然の権利であると思う人の割合が他の年代より少ない。(図表 - 1 - 27)

図表 - 1 - 26



図表 - 1 - 27



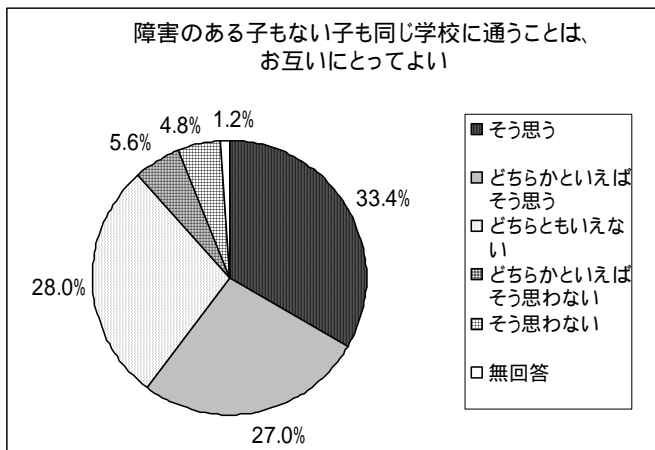
(4) 支援教育について

< 全体的な傾向 >

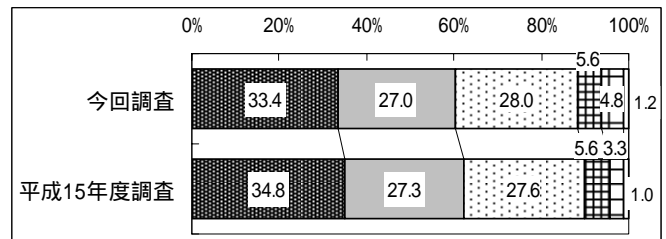
「障害のある子もいない子も同じ学校に通うことは、お互いにとってよい」については、「そう思う」が 33.4%、「どちらかといえばそう思う」が 27.0%となっており、肯定派が過半数である。「どちらともいえない」が 28.0%、「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」をあわせて 10.4%である。(図表 - 1 - 28)

前回調査は、「障害児も普通学校で教育を受ける権利がある」という設問であったが、ほぼ同じ傾向となっている。(図表 - 1 - 29)

図表 - 1 - 28



図表 - 1 - 29



< 男女別・年代別 >

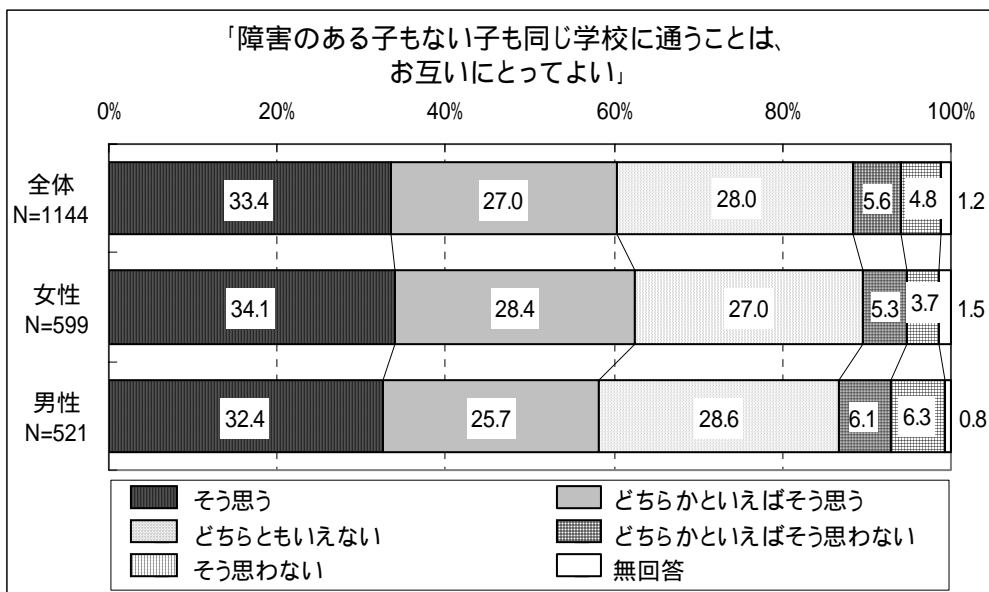
「障害のある子もいない子も同じ学校に通うことは、お互いにとってよい」という考え方について、女性の 34.1%、男性の 32.4%が「そう思う」、女性の 28.4%、男性の 25.7%が「どちらかといえばそう思う」、女性の 27.0%、男性の 28.6%が「どちらともいえない」としている。(図表 - 1 - 30)

年代別では、30歳代と60歳代は男女ともに他の世代に比べると肯定派がやや少ない。女性の20歳代と男性の10歳代で、「そう思う」が比較的多くなっている。(図表 - 1 - 31)

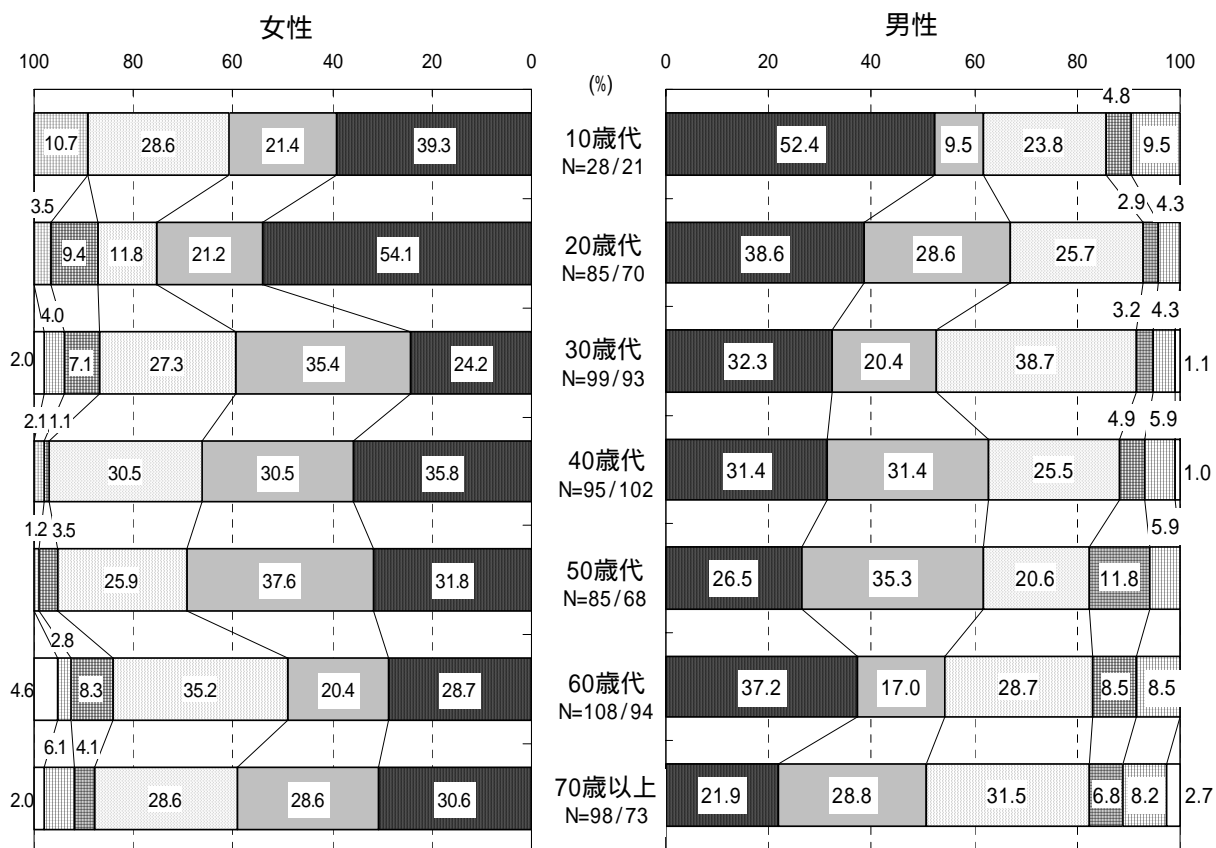
< 同居している子どもの有無別 >

「未成年の子どもと同居」している人は、障害のある子もいない子も同じ学校に通うことは、お互いにとってよいと思う(「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を選択した人)としている人が、女性で 68.3%、男性で 60.7%となっており、「成人の子どもと同居」している人、あるいは「子どもと同居していない」人に比べると多い。(図表 - 1 - 32)

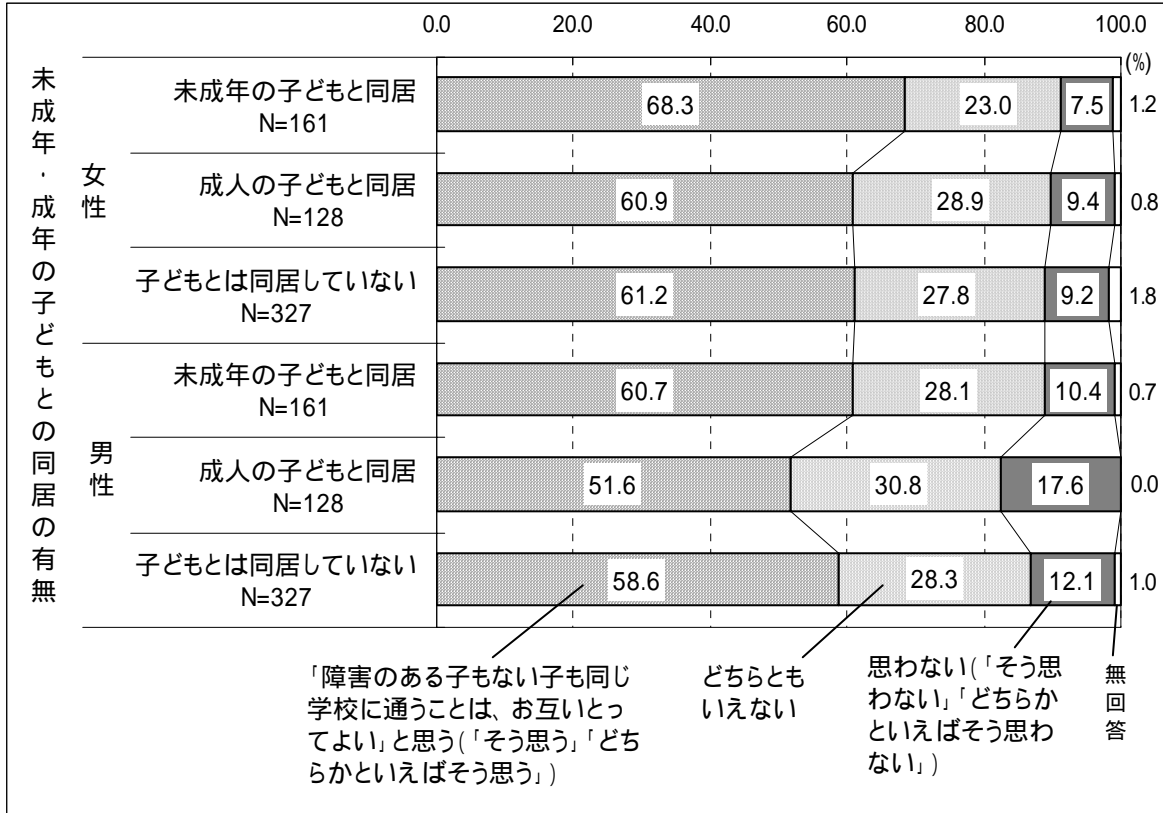
図表 - 1 - 30



図表 - 1 - 31



図表 - 1 - 32



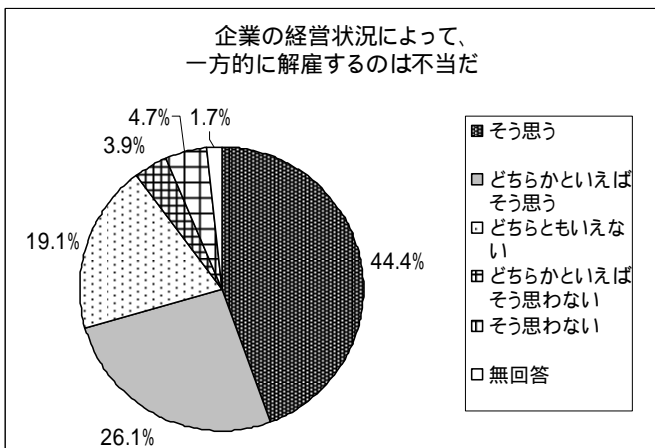
(5) 雇用・労働について

< 全体的な傾向 >

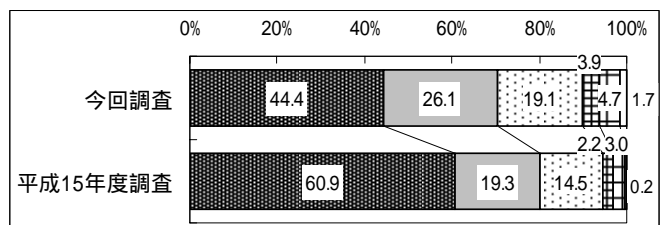
「企業の経営状況によって、一方的に解雇するのは不当だ」については、「そう思う」が 44.4%、「どちらかといえばそう思う」が 26.1%と不当だとする意見が多い。(図表 - 1 - 33)

平成 15 年度調査では「企業の都合で一方的に解雇するのは不当だ」という設問への肯定派が 80.2%となっていたことに比べると、不当だとする人の割合が減っている。「どちらともいえない」が 14.5%から 19.1%とやや増えている。(図表 - 1 - 34)

図表 - 1 - 33

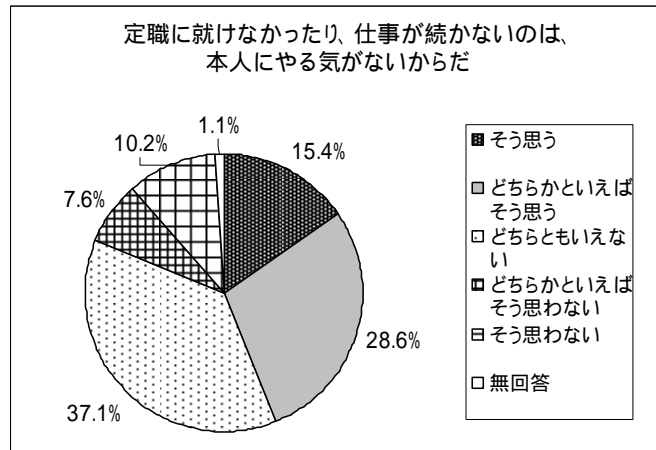


図表 - 1 - 34



「定職に就けなかったり、仕事に就かないのは本人にやる気がないからだ」については、「どちらともいえない」も 37.1%となっており、「どちらかといえばそう思う」が 28.6%、「そう思う」が 15.4%と、「本人のやる気がないからだ」ということを肯定する人が 44.0%となっている。(図表 - 1 - 35)

図表 - 1 - 35

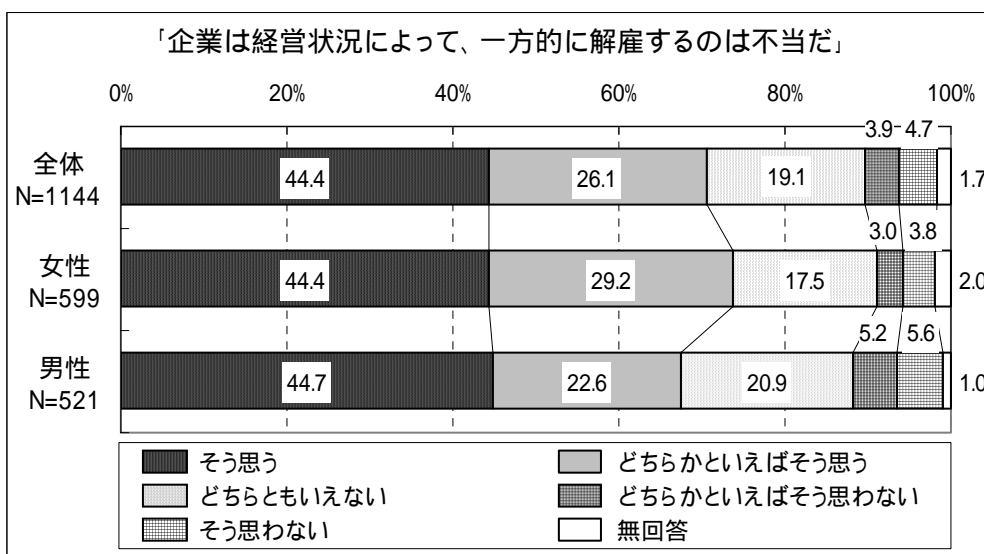


< 男女別・年代別 >

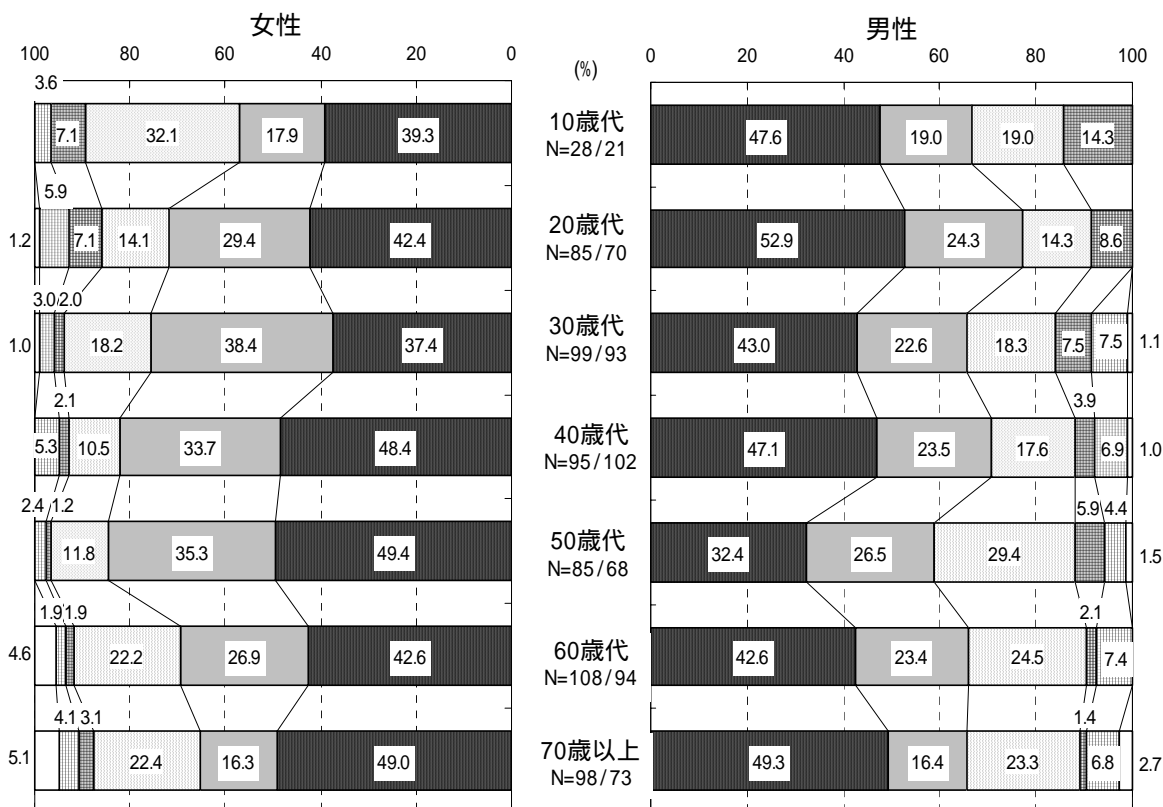
「企業の経営状況によって、一方的に解雇するのは不当だ」という考え方について、女性の 44.4%、男性の 44.7%が「そう思う」、女性の 29.2%、男性の 22.8%が「どちらかといえばそう思う」としている。(図表 - 1 - 36)

女性の 40 歳代・50 歳代では、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の割合が 80%を超えている。男性では 20 歳代で 80%近くとなっている。(図表 - 1 - 37)

図表 - 1 - 36



図表 - 1 - 37

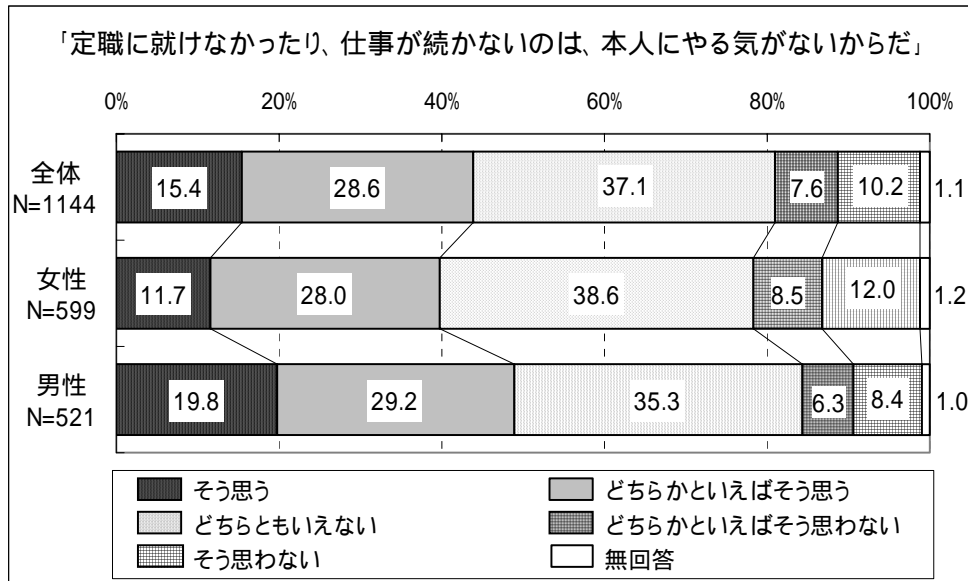


「定職に就けなかったり、仕事が続かないのは、本人にやる気がないからだ」について、女性の38.6%、男性の35.3%が「どちらともいえない」としている。「そう思う」は、女性で11.7%、男性で19.8%、「どちらかといえばそう思う」は、女性で28.0%、男性で29.2%となっている。(図表 - 1 - 38)

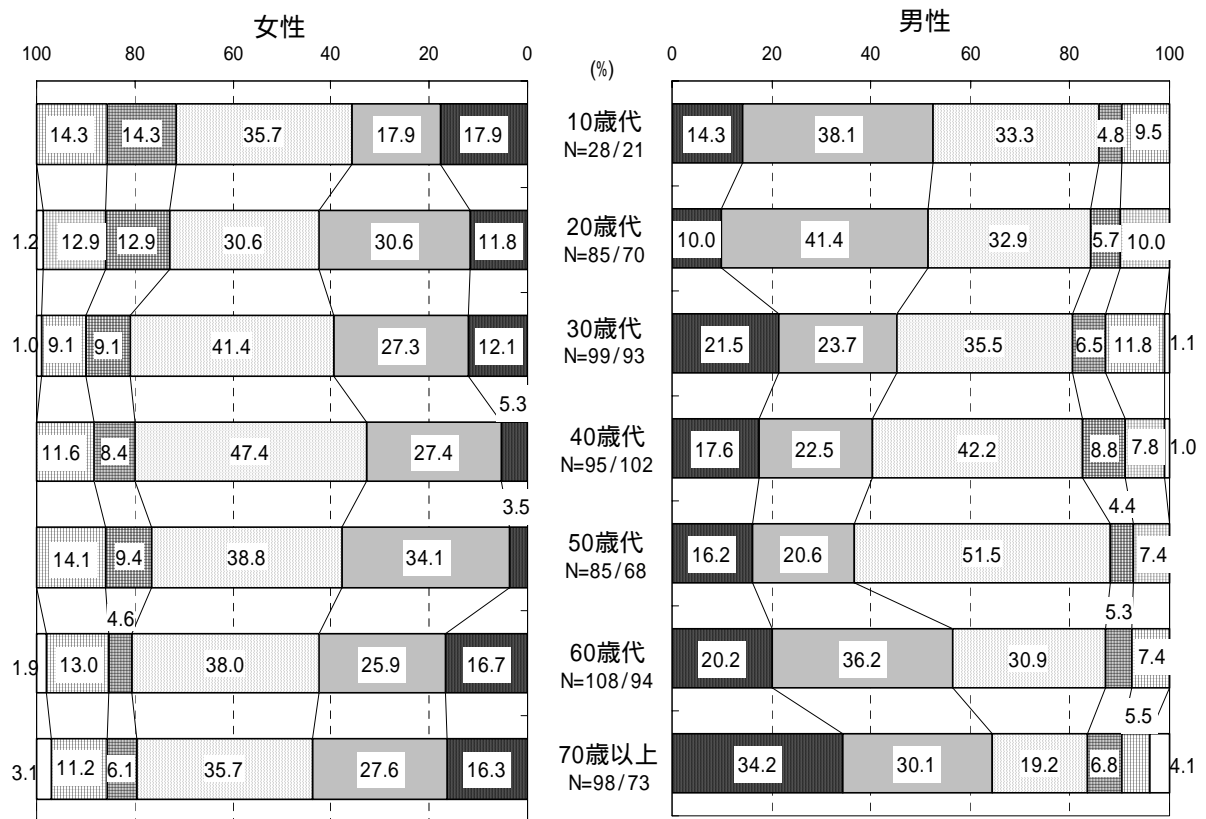
女性の40歳代・50歳代で「そう思う」が他の年代と比較して少ない。男性の70歳以上では「そう思う」が他の年代と比較して多くなっている。(図表 - 1 - 39)

男性については、10歳代、20歳代と60歳以上の世代の「定職に就けなかったり、仕事が続かないのは、本人にやる気がないからだ」とする人の割合が過半数となっている。(図表 - 1 - 39)

図表 - 1 - 38



図表 - 1 - 39



(6) 体罰・暴力について

< 全体的な傾向 >

「親が子どもを叩くのは、しつけだから、まわりがとやかく言うことではない」については、「どちらともいえない」の割合が 37.9%と最も多い。「そう思う」「どちらかといえばそう思う」があわせて 28.2%、「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」が 32.5%となっている。(図表 - 1 - 40)

平成 15 年度調査では、「親が子どもを叩いてしつけることはいけないことである」という問いかけをしているが、「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」とする人が 41.9%であった。

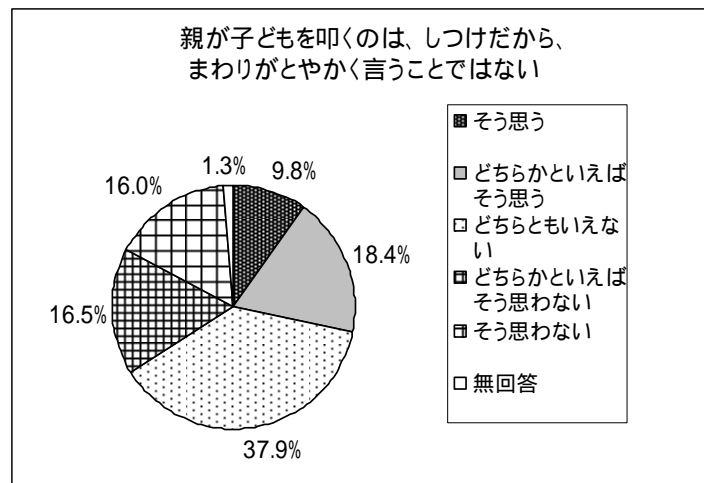
「教師の体罰は教育上やむをえないこともある」については、「そう思う」が 26.6%、「どちらかといえばそう思う」が 35.1%とやむを得ないと思う人が過半数となっている。思わない人(「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」)は 16.2%である。(図表 - 1 - 41)

平成 15 年度調査では、「教師の体罰はいけないことである」という設問となっているが、体罰を否定する割合は 41.1%、容認する割合は 26.3%、「どちらともいえない」が 31.5%であった。(図表 - 1 - 42)

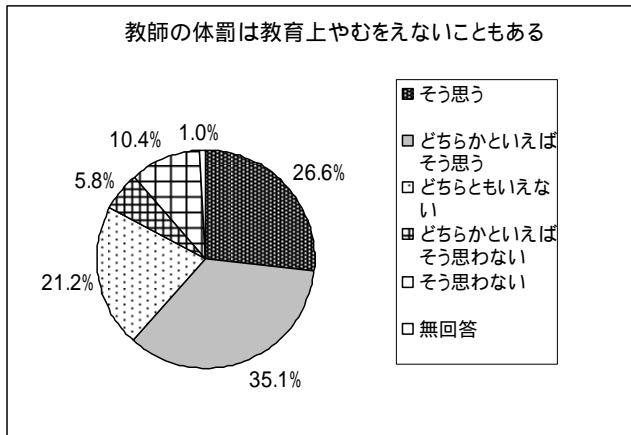
「いじめを受けたり、仲間はずれにされるのは、本人にも問題があるからだ」については、「どちらともいえない」が 39.5%で最も多い。「そう思う」「どちらかといえばそう思う」人は 28.7%、「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」人が 30.8%となっている。(図表 - 1 - 43)

「テレビやゲームに登場するヒーローの暴力を認めることは危険な風潮だ」については、「そう思う」が 34.4%、「どちらかといえばそう思う」が 21.9%で、過半数が危険な風潮であるとしているが、「どちらともいえない」も 23.1%となっている。(図表 - 1 - 44)

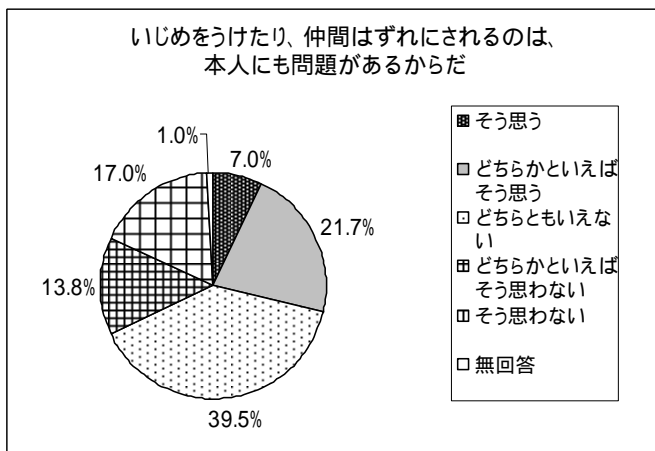
図表 - 1 - 40



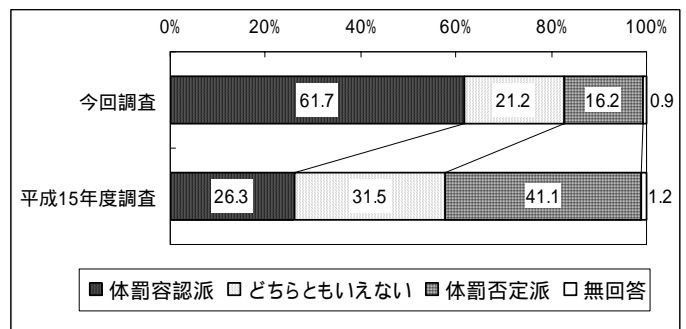
図表 - 1 - 42



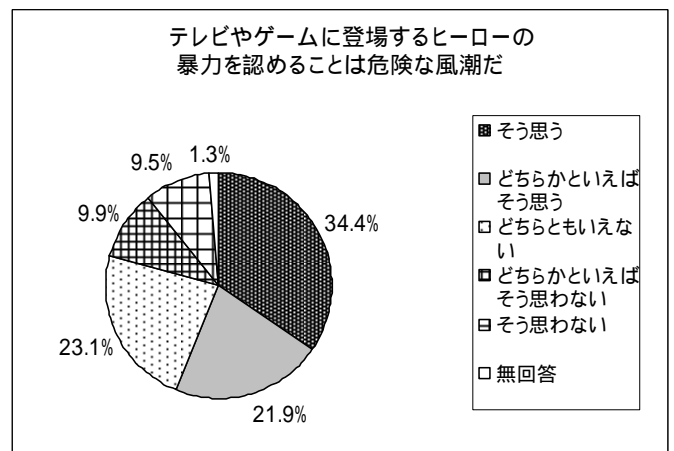
図表 - 1 - 43



図表 - 1 - 43



図表 - 1 - 44

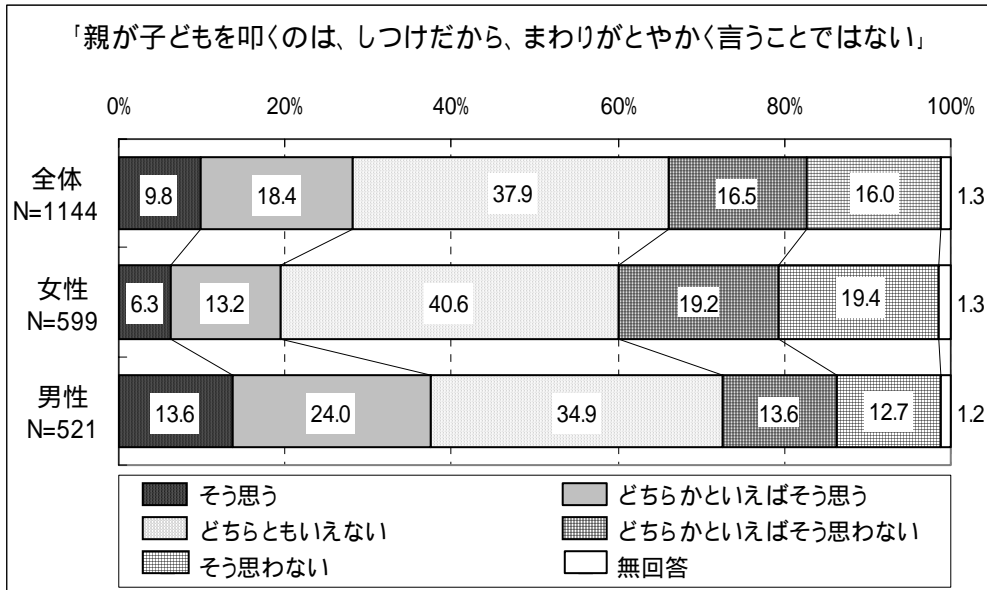


< 男女別・年代別 >

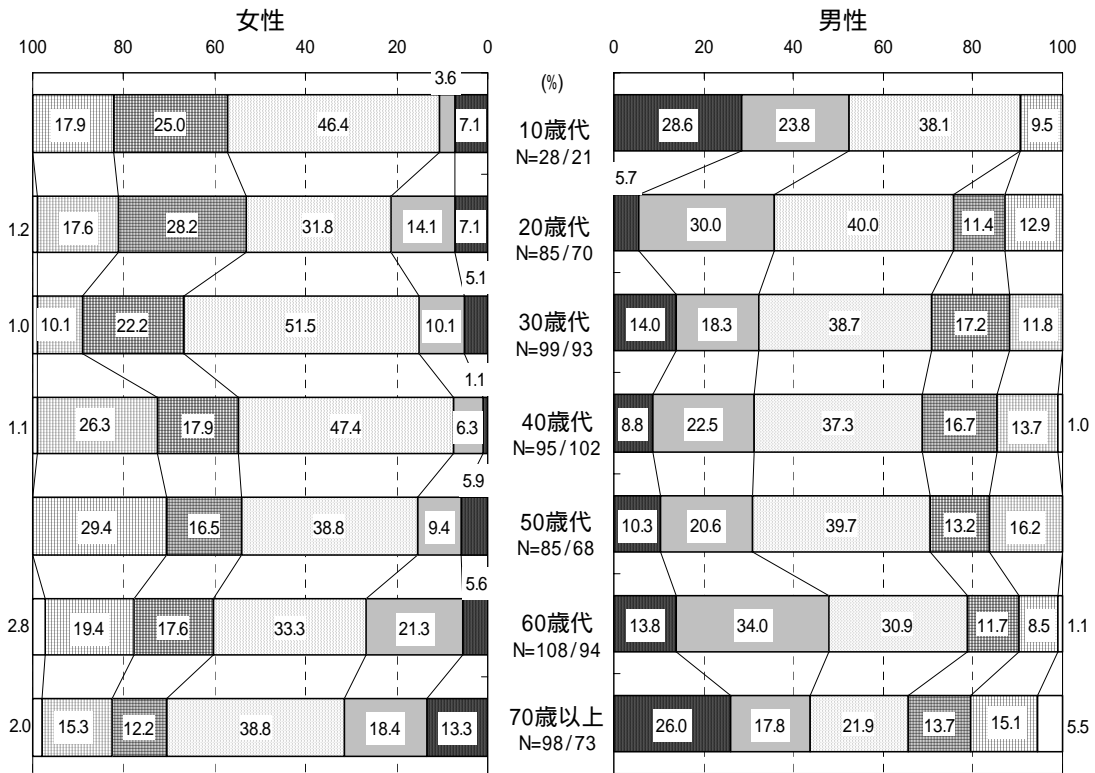
「親が子どもを叩くのは、しつけだから、まわりがとやかく言うことではない」という考え方について、女性の40.6%、男性の34.9%が「どちらともいえない」としている。(図表 - 1 - 45)

女性では、「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」が38.6%となっているが、男性では「そう思う」「どちらかといえばそう思う」が37.6%となっている。男性の10歳代と70歳代で「そう思う」という割合が他の世代と比較して多い。(図表 - 1 - 46)

図表 - 1 - 45



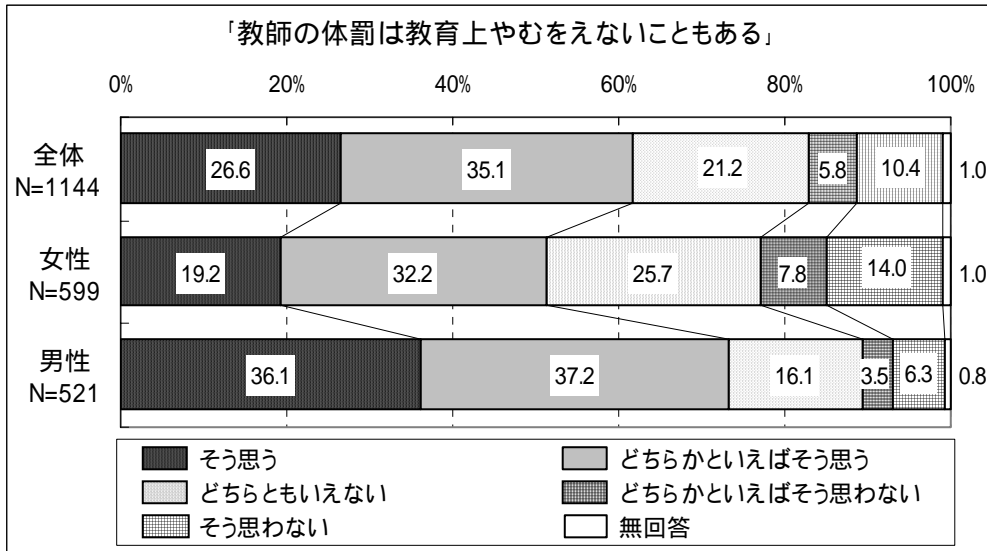
図表 - 1 - 46



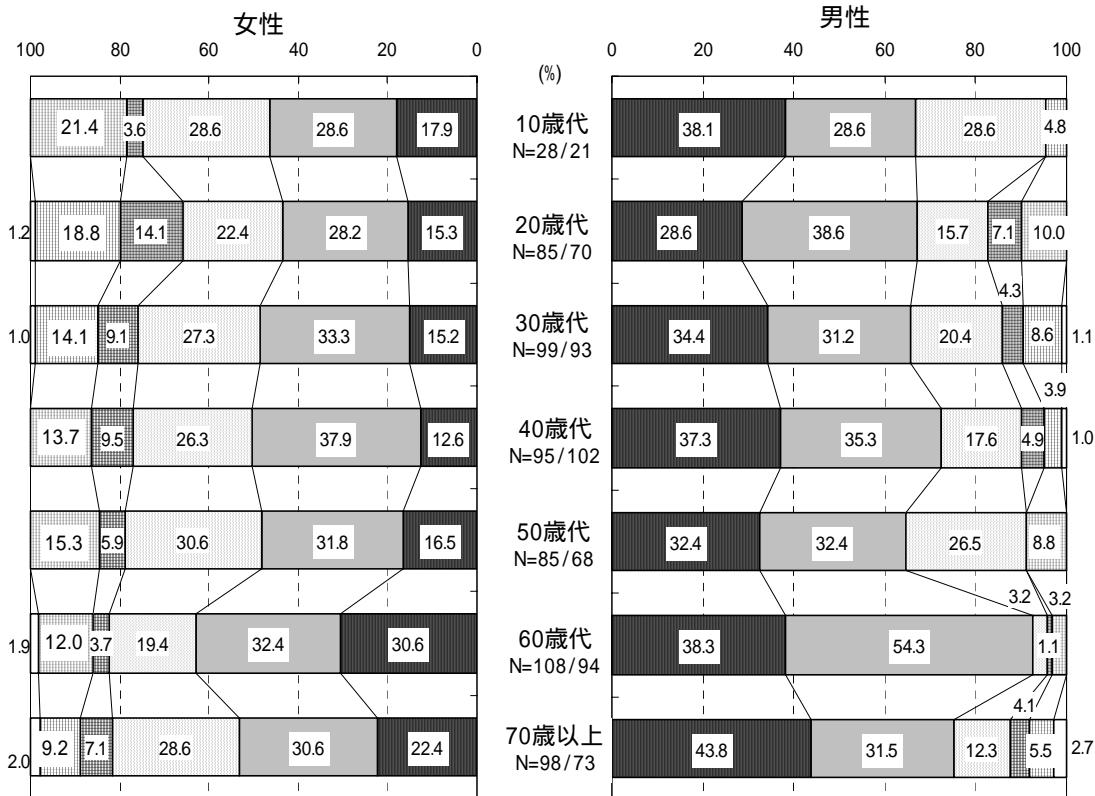
「教師の体罰は教育上やむをえないこともある」について、女性の32.2%、男性の37.2%が「どちらかといえばそう思う」としている。女性では、25.7%が「どちらともいえない」としているが、男性では36.1%が「そう思う」としており、男性の方が教師の体罰を容認する割合が多い。(図表 - 1 - 47)

年代別にみると、男女ともに60歳代で容認派が他の年代に比べて多くなっている。(図表 - 1 - 48)

図表 - 1 - 47



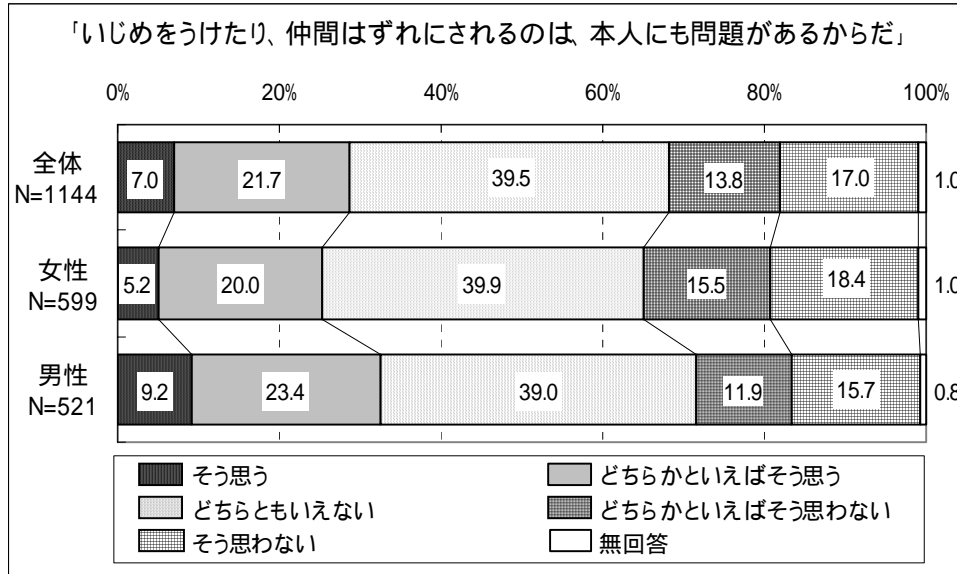
図表 - 1 - 48



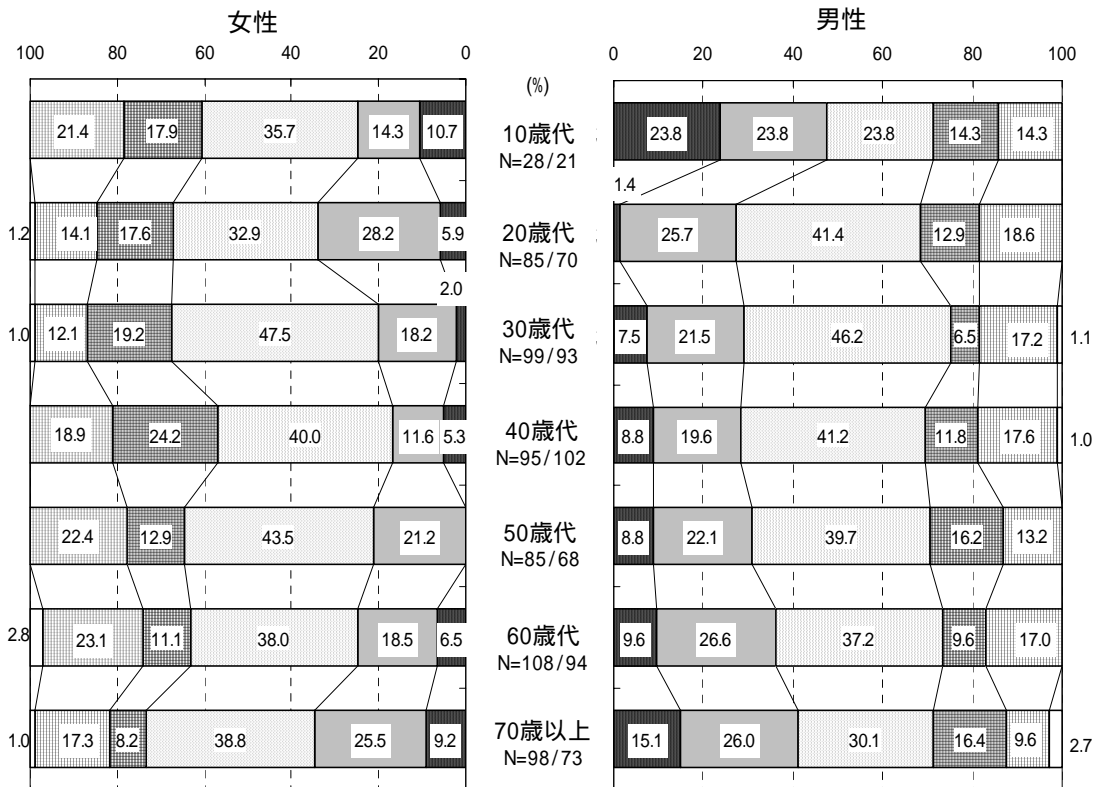
「いじめを受けたり、仲間はずれにされるのは、本人にも問題があるからだ」については、女性の39.9%、男性の39.0%が「どちらともいえない」としている。女性では、18.4%が「そう思わない」、15.5%が「どちらかといえばそう思わない」としているが、男性の9.2%が「そう思う」、23.4%が「どちらかといえばそう思う」としている。(図表 - 1 - 49)

年代別では、女性の20歳代と70歳以上で、他の年代に比べて、「どちらかといえばそう思う」が多い。男性の10歳代と70歳以上で、「そう思う」が多くなっており、本人にも問題があるとの見方が他の年代に比べて多い。(図表 - 1 - 50)

図表 - 1 - 49



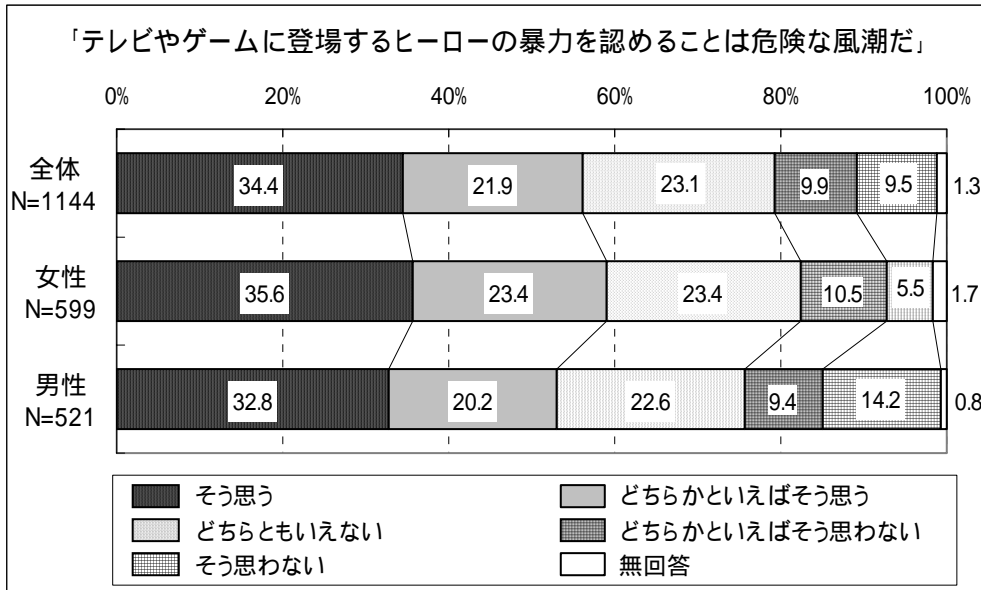
図表 - 1 - 50



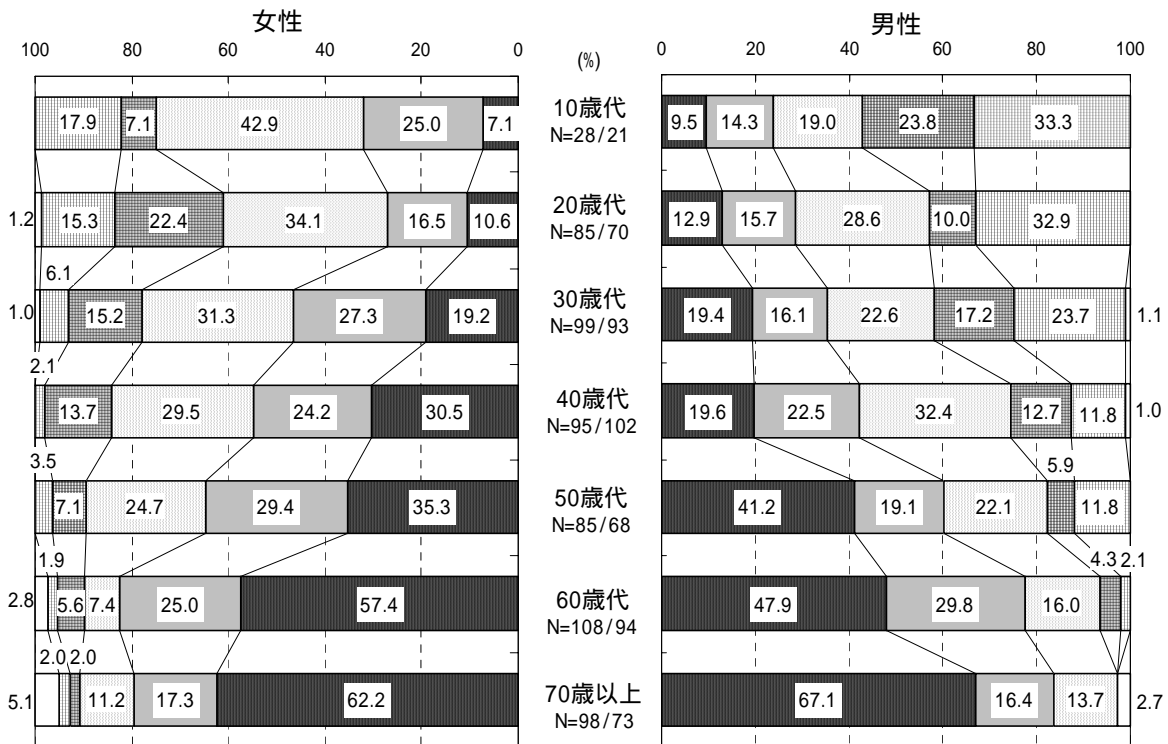
「テレビやゲームに登場するヒーローの暴力を認めることは危険な風潮だ」について、男女ともに50%以上が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」としている。女性に比べて男性の方が、「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」の割合が多い。(図表 - 1 - 51)

男女ともに年齢があがるほど「そう思う」とする割合が増え、「そう思わない」とする割合が減る。(図表 - 1 - 52)

図表 - 1 - 51



図表 - 1 - 52



<同居している子どもの有無別>

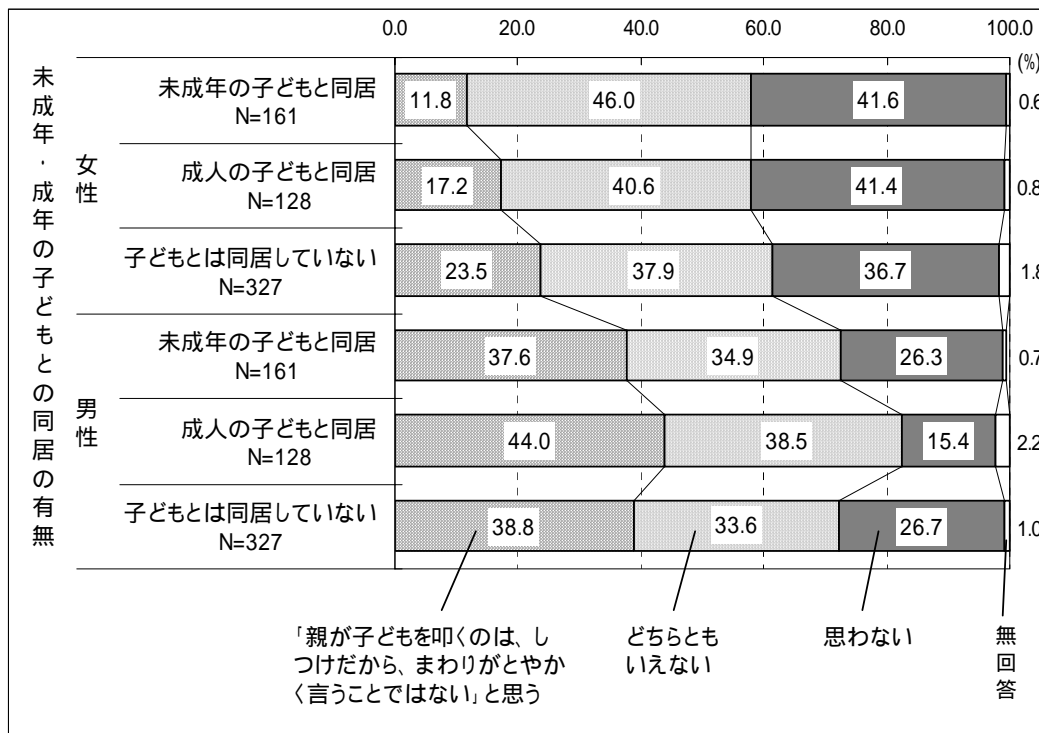
「未成年の子どもと同居」している女性は、「親が子どもを叩くのは、しつげだから、まわりがとやかく言うことではない」と「思わない」人（「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」を選択した人）が41.6%、「どちらともいえない」人が46.0%となっている。（図表 - 1 - 53）

「未成年の子どもと同居」している人は、「教師の体罰は教育上やむをえないこともある」と「思う」人（「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を選択した人）は女性で48.4%、男性で66.7%となっており、「成年の子どもと同居」あるいは「子どもとは同居していない」より、やむをえない

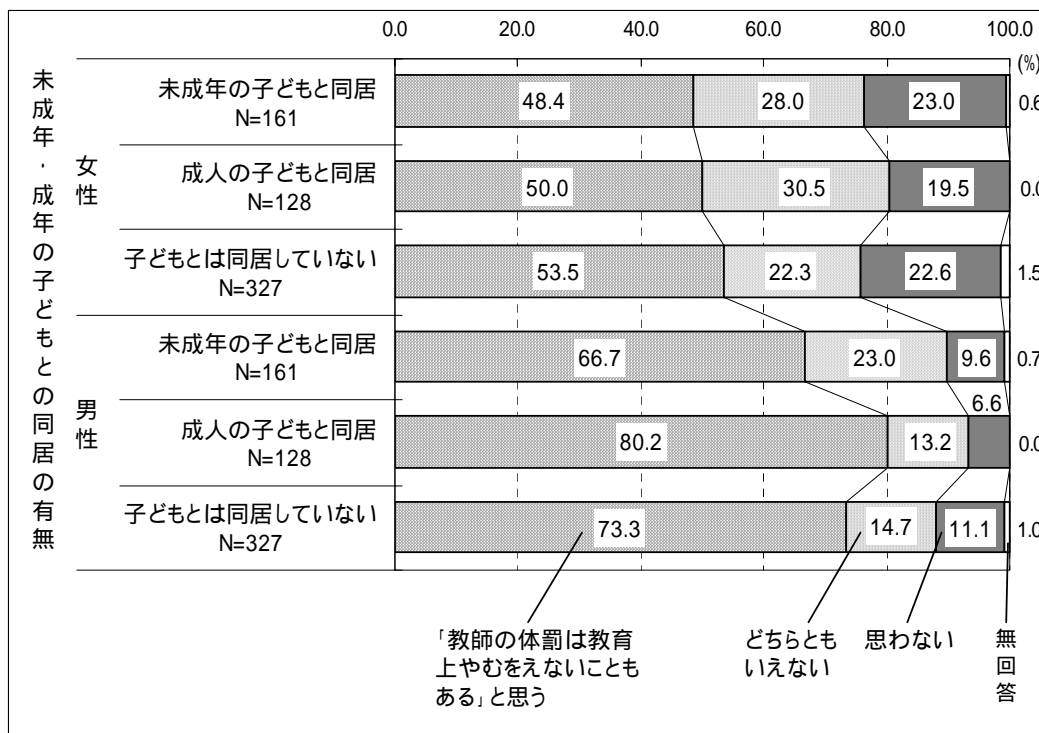
こともあると思う割合が少ない。(図表 - 1 - 54)

「未成年の子どもと同居」している人は、「いじめを受けたり、仲間はずれにされるのは、本人にも問題があるからだ」と「思わない」人が、女性18.6%、男性25.9%で、「成年の子どもと同居」あるいは「子どもとは同居していない」より少ない。一方、「どちらともいえない」が、女性46.0%、男性43.7%となっており、他の2つより多い。(図表 - 1 - 55)

図表 - 1 - 53 「親が子どもを叩くのは、しつげだから、まわりがとやかく言うことではない」

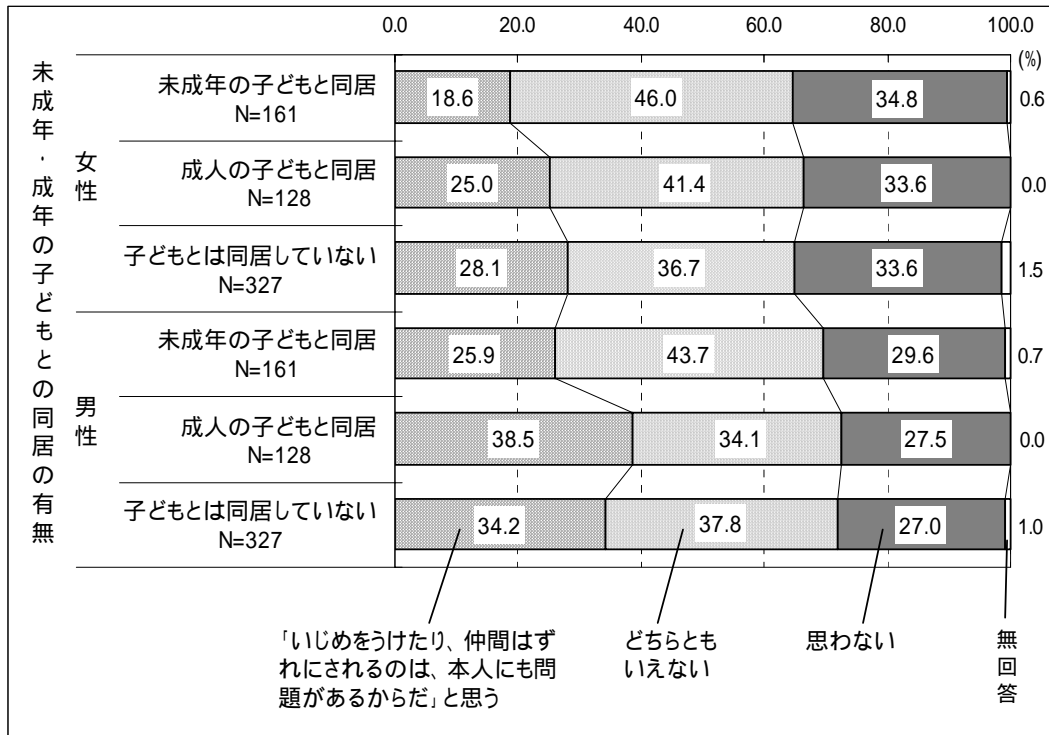


図表 - 1 - 54 「教師の体罰は教育上やむをえないこともある」



図表 - 1 - 55

「いじめを受けたり、仲間はずれにされるのは、本人にも問題があるからだ」

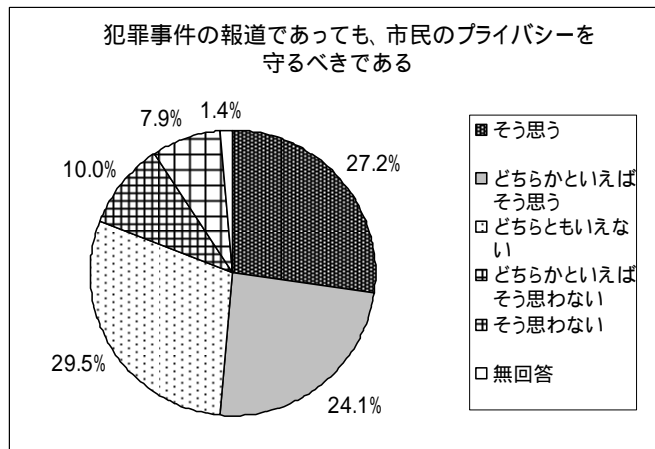


(7) プライバシーについて

< 全体的な傾向 >

「犯罪事件の報道であっても、市民のプライバシーを守るべきである」については、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」とするプライバシー保護派が半数となっている。「どちらともいえない」が 29.5%である。(図表 - 1 - 56)

図表 - 1 - 56

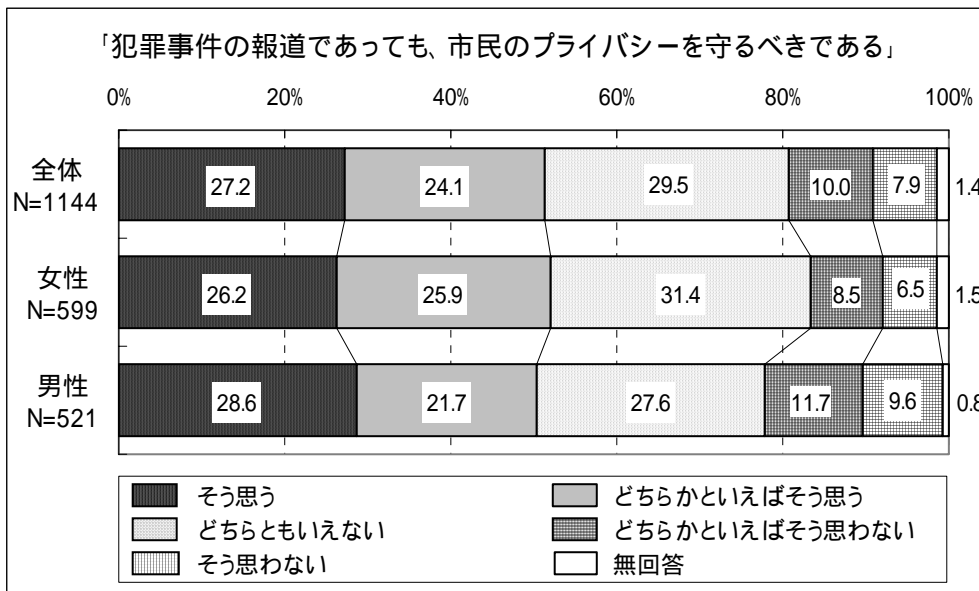


< 男女別・年代別 >

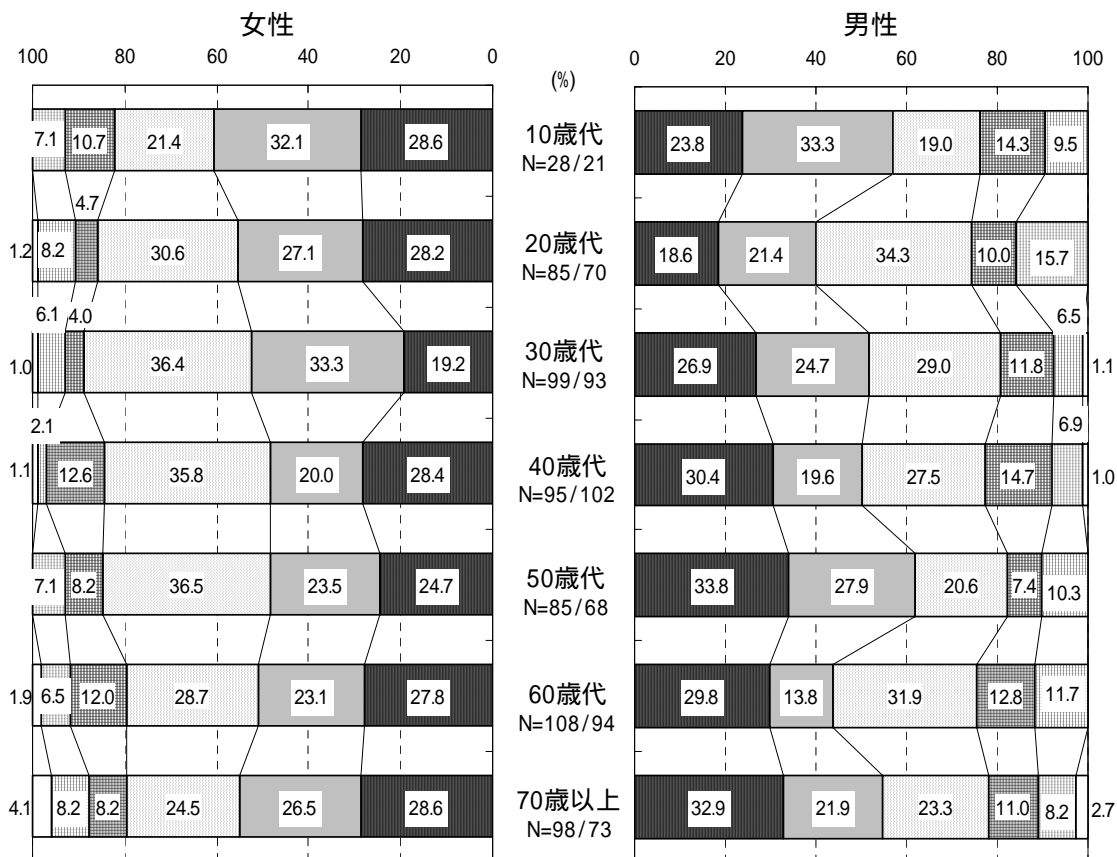
「犯罪事件の報道であっても、市民のプライバシーを守るべきである」という考え方について、男女ともに50%以上が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」としているが、女性の31.4%が「どちらともいえない」としている。(図表 - 1 - 57)

年代別にみると10歳代の男女、50歳代男性でプライバシー保護派の割合が60%前後となっており、他の年代よりやや多い。(図表 - 1 - 58)

図表 - 1 - 57



図表 - 1 - 58



2)「人権」に対する意識(問2・3)

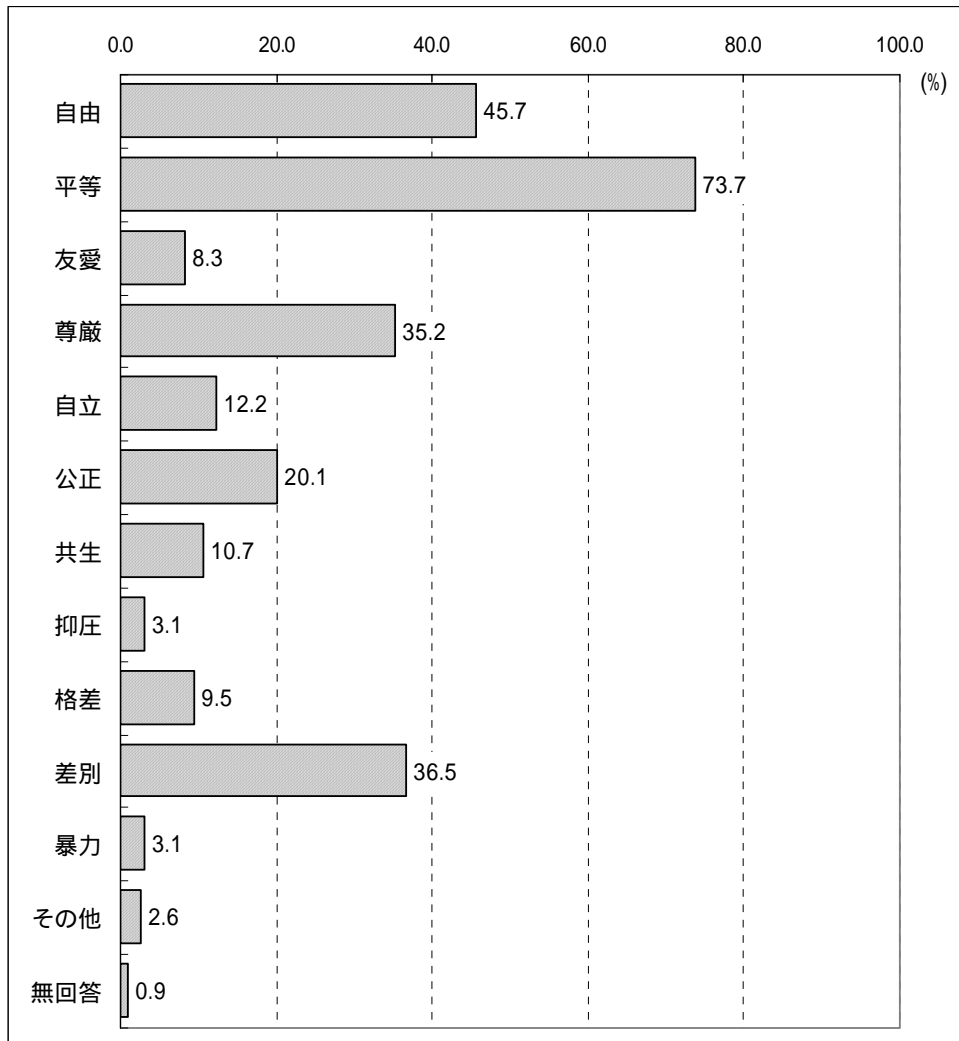
(1)「人権」から連想する言葉(問2)

< 全体的な傾向 >

「人権」から連想する言葉としては、「平等」が最も多く、次いで「自由」、「差別」、「尊厳」となっている。(図表 - 1 - 59)

図表 - 1 - 59

(MA)



3つの選択肢の組み合わせでは、「自由・平等・友愛・尊厳・自立・公正・共生」の中から3つを選択した人が57.0%となっており、「抑圧・格差・差別・暴力」の中から3つを選択した人は4.4%にとどまる。37.8%はいずれからも選択をした人である。(図表 - 1 - 60)

「自由・平等・友愛・尊厳・自立・公正・共生」の肯定的な言葉の中から3つを選択した人は、57.0%であった。「抑圧・格差・差別・暴力」の否定的な言葉の中から3つを選択した人は、4.4%で、両方から選択している人が37.8%となっている。(図表 - 1 - 60)

上位2項目である「平等・自由」と、3位の「差別」、あるいは4位の「尊厳」を選択した人は、

それぞれ 8.9%、8.3%となっている。(図表 - 1 - 60)

図表 - 1 - 60

A群「自由・平等・友愛・尊厳・自立・公正・共生」から3つ選択した人		B群「抑圧・格差・差別・暴力」から3つ選択した人		C群「A・B双方」から3つを選択している人	
57.0%		4.4%		37.8%	
「自由・平等・差別」を選択した人	「自由・平等・尊厳」を選択した人	「平等・差別・尊厳」を選択した人	「自由・平等・尊厳」のいずれも選択していない人		
8.9%	8.3%	5.5%	7.4%		

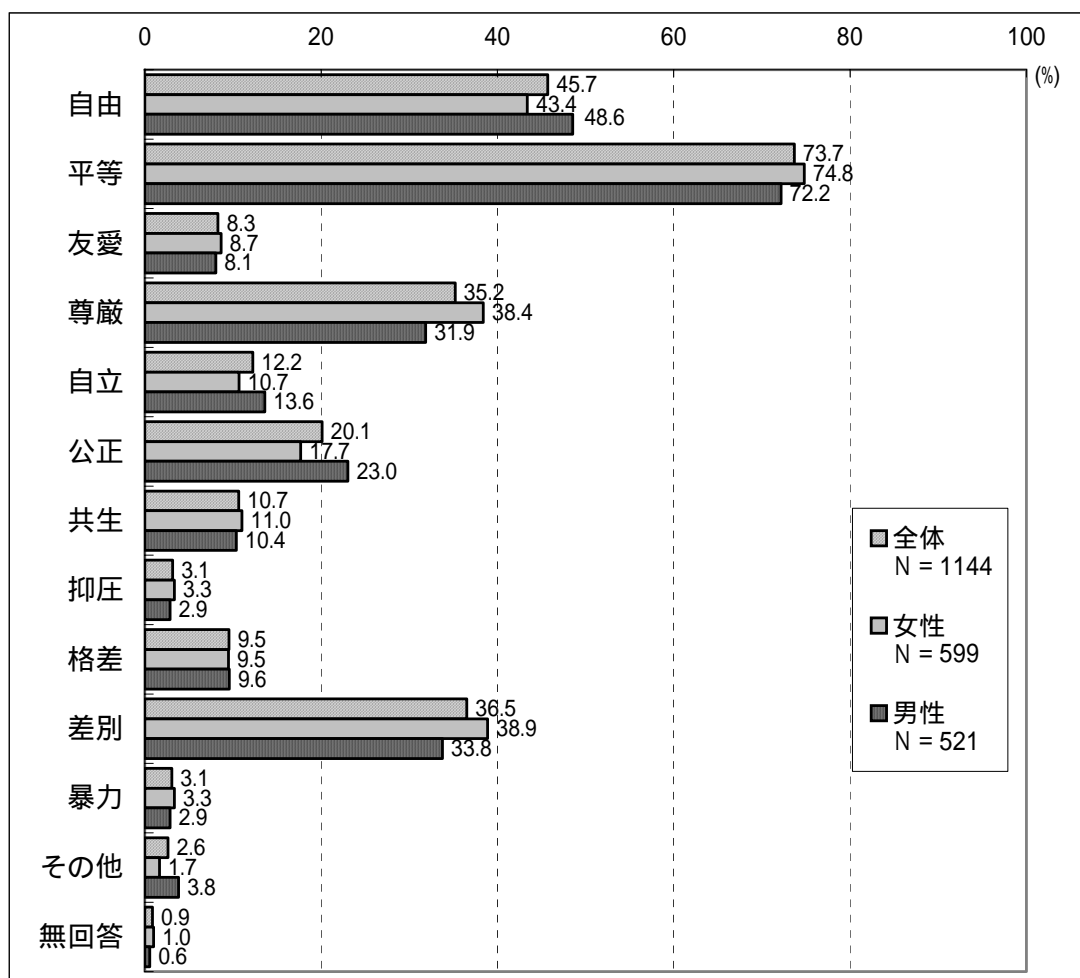
< 男女別・年代別 >

男女別にみると、上位の「平等」「尊厳」「差別」は女性の割合の方がやや多く、「自由」「公正」については、男性の割合の方がやや多い。(図表 - 1 - 61)

年代別にみると、女性では10歳代から40歳代で「尊厳」が上位3つまでに選択されている。男性の10歳代では「自立」、20歳代、40歳代では「尊厳」が上位3つまでに選択されている。(図表 - 1 - 62、63)

男女ともに50歳代以上で「差別」が3位となっているが、男性では30歳代も「差別」が3位となっている。(図表 - 1 - 62)

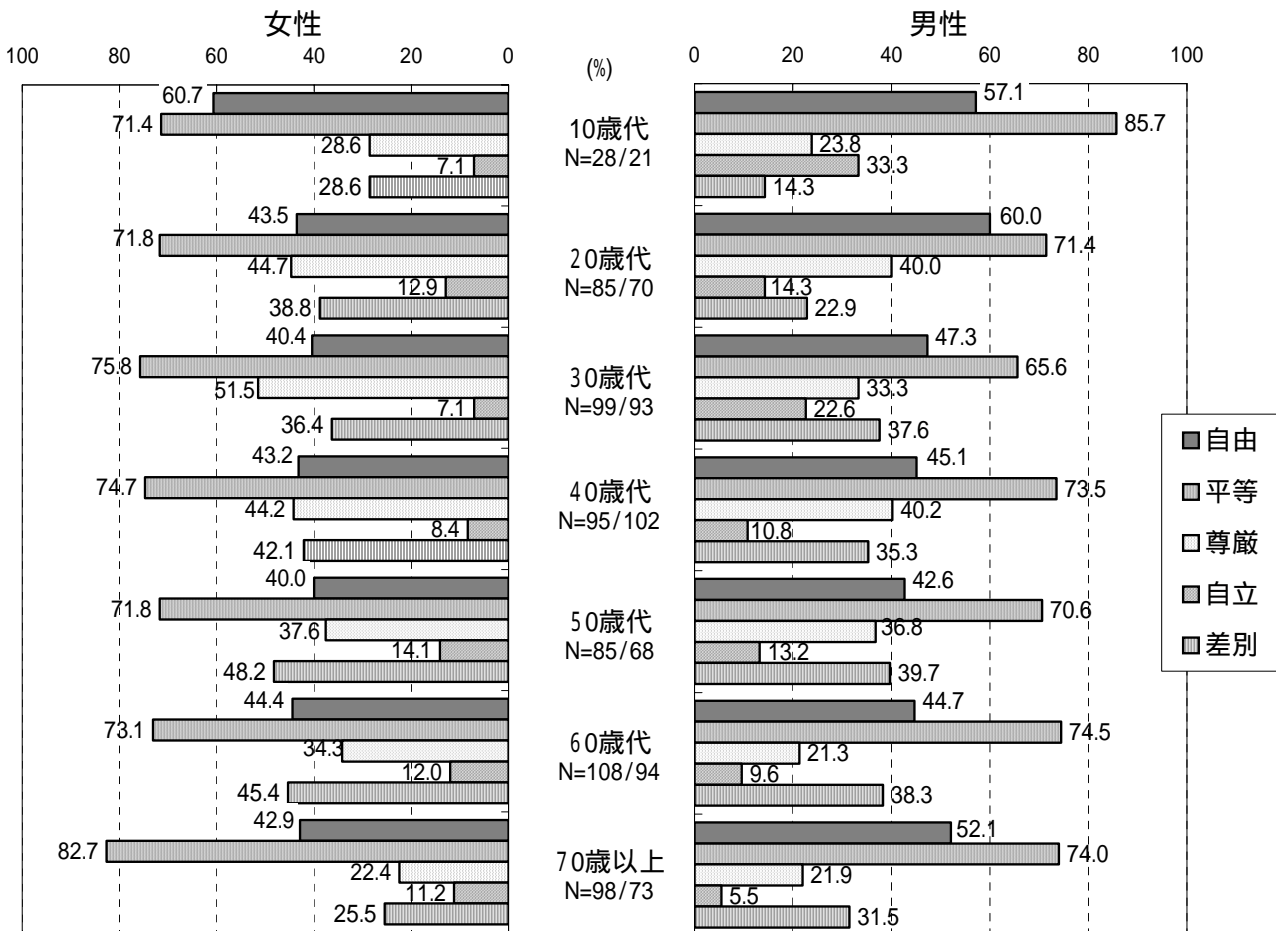
図表 - 1 - 61



図表 - 1 - 62

	女性			男性		
	1位	2位	3位	1位	2位	3位
10歳代 N = 28/21	平等 71.4%	自由 60.7%	尊厳、差別 28.6%	平等 85.7%	自由 57.1%	自立 33.3%
20歳代 N = 85/70	平等 71.8%	尊厳 44.7%	自由 43.5%	平等 71.4%	自由 60.0%	尊厳 40.0%
30歳代 N = 99/93	平等 75.8%	尊厳 51.5%	自由 40.4%	平等 65.6%	自由 47.3%	差別 37.6%
40歳代 N = 95/102	平等 74.7%	自由 43.2%	尊厳 44.2%	平等 73.5%	自由 45.1%	尊厳 40.2%
50歳代 N = 85/68	平等 71.8%	差別 48.2%	自由 40.0%	平等 70.6%	自由 42.6%	差別 39.7%
60歳代 N = 108/94	平等 73.1%	差別 45.4%	自由 44.4%	平等 74.5%	自由 44.7%	差別 38.3%
70歳以上 N = 98/73	平等 82.7%	自由 42.9%	差別 25.5%	平等 74.0%	自由 52.1%	差別 31.5%

図表 - 1 - 63 「自立」「公正」「共生」「格差」における男女別年齢別割合

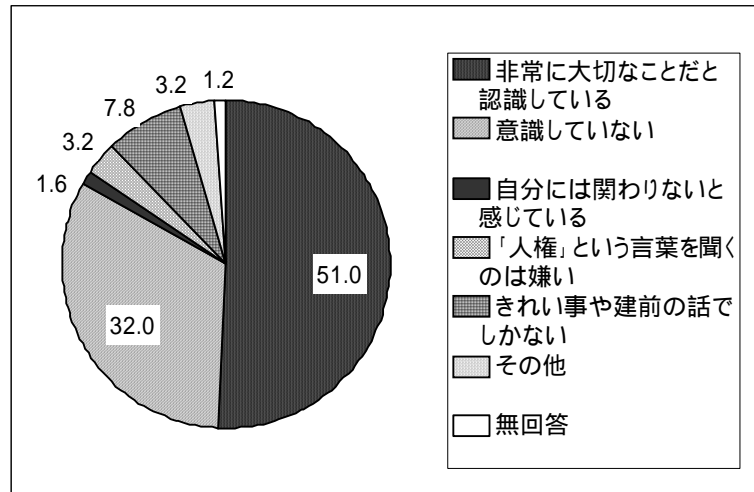


(2)「人権」についてのふだんの意識(問3)

< 全体的な傾向 >

ふだん「人権」についてどのように意識しているかについては、51.0%が「非常に大切なことだと認識している」としている。一方で「意識していない」が32.0%である。「自分には関わりのないことだと感じている」は1.6%であるが、「人権という言葉聞くのは嫌いである」が3.2%、「きれい事や建前の話でしかない」が7.8%となっている。(図表 - 1 - 64)

図表 - 1 - 64

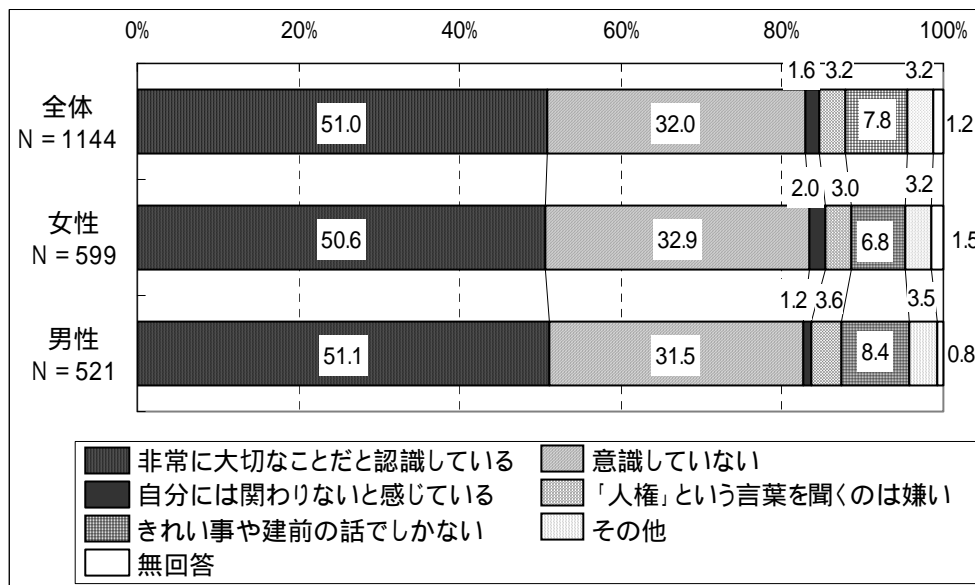


< 男女別・年代別 >

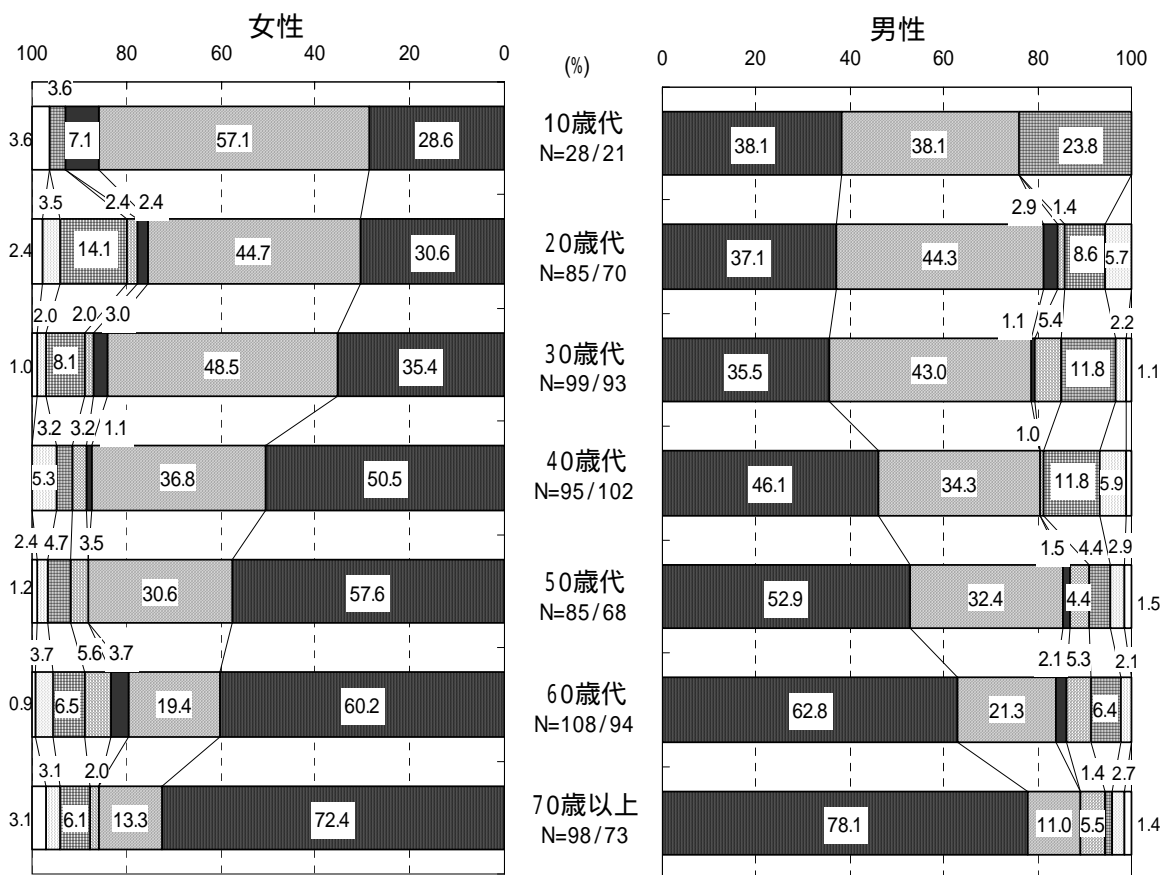
それぞれの設問を選択した割合について、男女で差はほとんどない。(図表 - 1 - 65)

年代別では、年齢があがるほど、「非常に大切なことだと認識している」とする割合が増加し、「意識していない」の割合が減少する。(図表 - 1 - 66)

図表 - 1 - 65



図表 - 1 - 66



3) 憲法で保障されている権利の認知と学習について(問4～7)

(1) 憲法で保障されている権利の認知状況(問4)

< 全体的な傾向 >

憲法で保障されている次の権利について、3段階で認知度をたずねた。

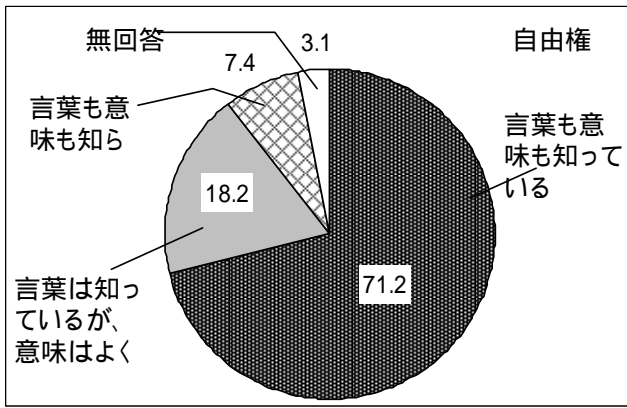
「平等権」「教育権」については「言葉も意味も知っている」が81.7%、80.2%と80%を越えている。(図表 - 1 - 68、70)

「自由権」は71.2%、「生存権」は69.2%、「勤労権」は73.2%、「参政権」は77.8%、「労働基本権」は62.9%となっており、半数以上の人々が「言葉も意味も知っている」としている。(図表 - 1 - 67、69、71～73、)

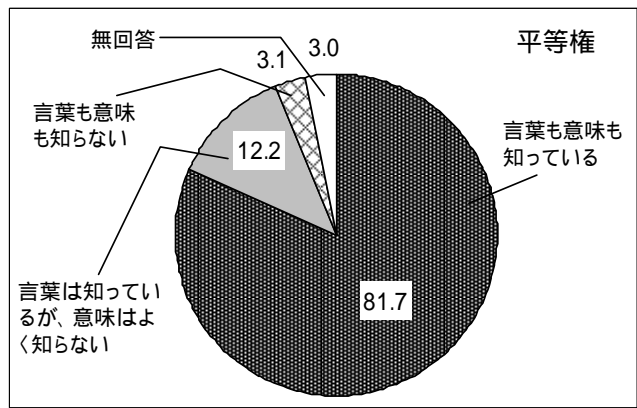
「幸福追求権」については、「言葉も意味も知っている」が38.1%、「言葉は知っているが、意味はよく知らない」が22.8%、「言葉も意味も知らない」が35.1%となっている。(図表 - 1 - 74)

「労働基本権」「幸福追求権」の認知度が他と比較して低いのは、学校で教える機会がないことが遠因していると思われる。

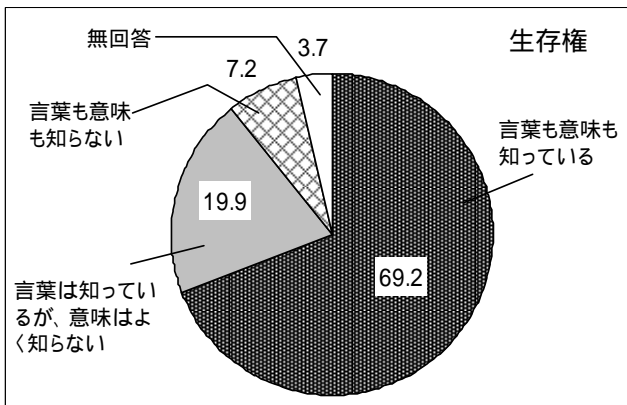
図表 - 1 - 67



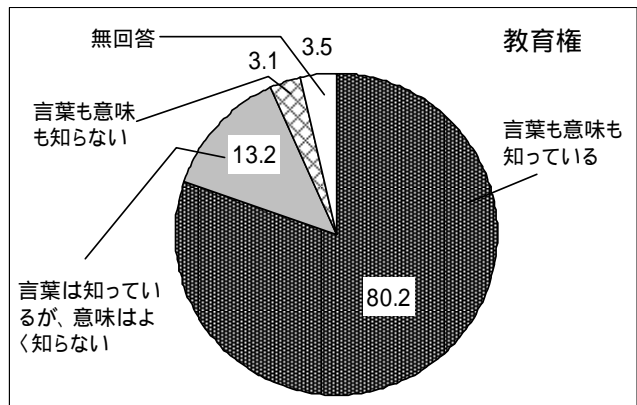
図表 - 1 - 68



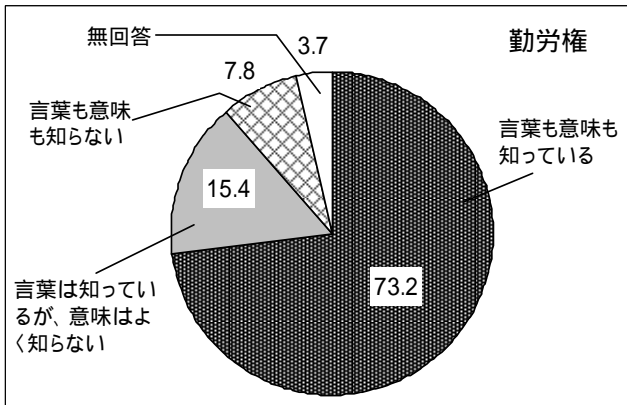
図表 - 1 - 69



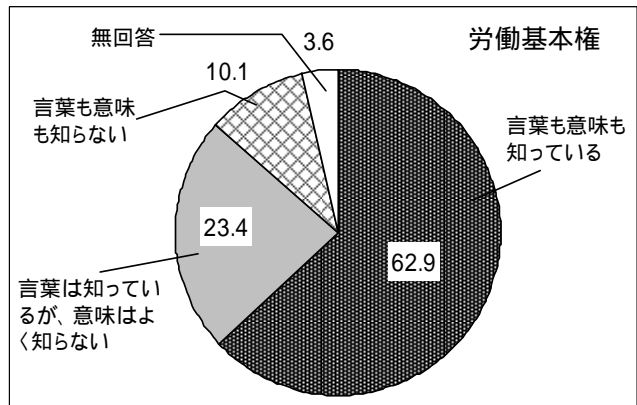
図表 - 1 - 70



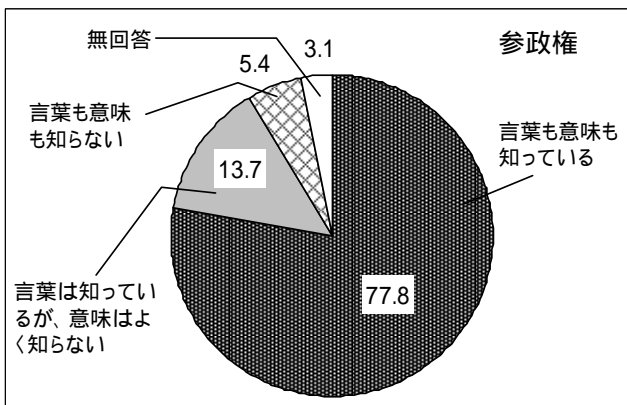
図表 - 1 - 71



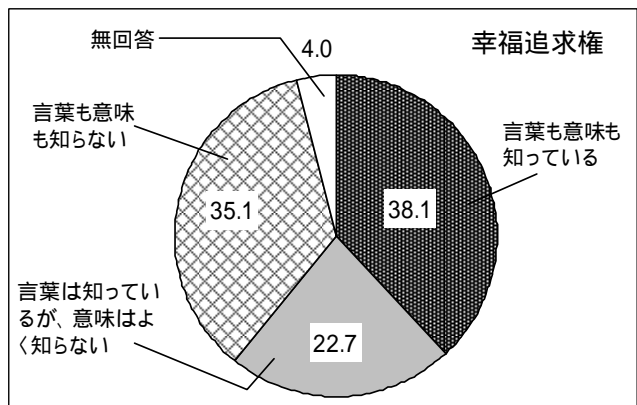
図表 - 1 - 72



図表 - 1 - 73



図表 - 1 - 74



< 男女別・年代別 >

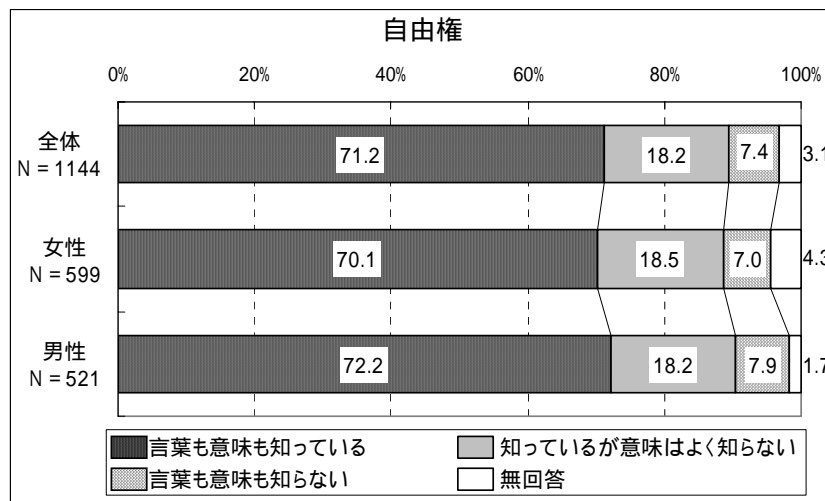
「自由権」「平等権」「生存権」「教育権」については、男女でほぼ同じ傾向となっている。(図表 - 1 - 75、77、79、81)

「勤労権」「労働基本権」「参政権」「幸福追求権」について、女性の方が男性に比べて「言葉も意味も知っている」の割合がやや少なくなっている。(図表 - 1 - 83、85、87、89)

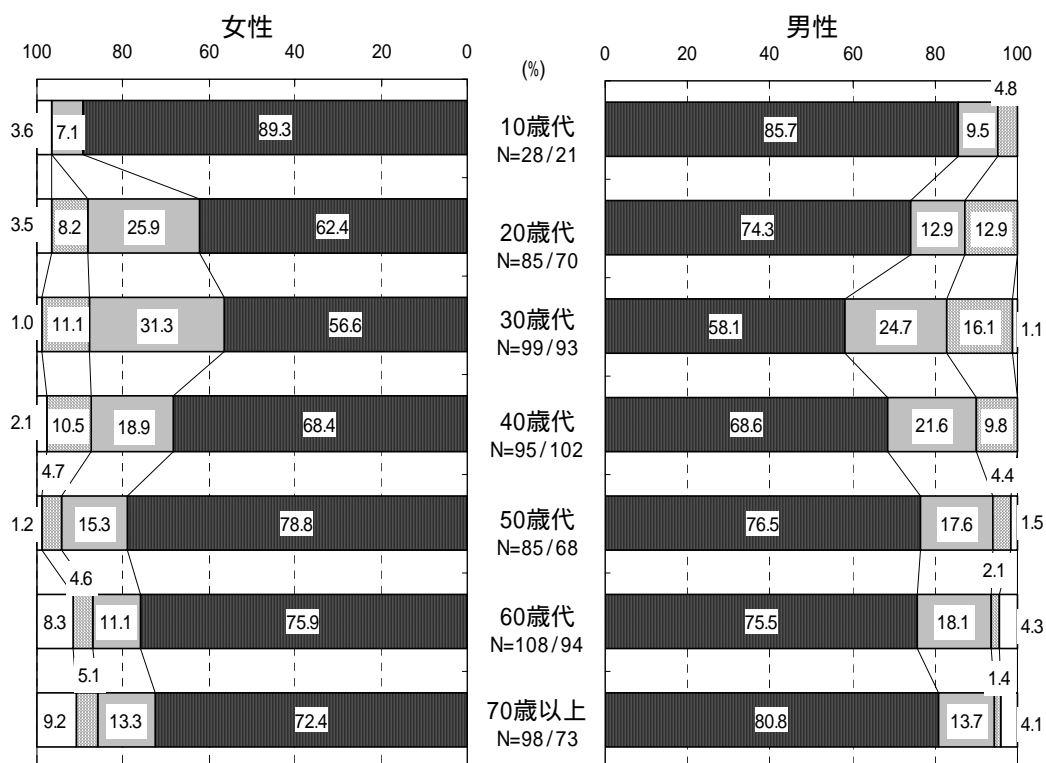
「勤労権」「労働基本権」は、10歳代より20歳代から40歳代で「言葉も意味も知っている」人の割合が少ない傾向が見受けられる。社会的には働き盛りの世代であるが、労働観、労働と対価という考え方が薄れていることがうかがえる。(図表 - 1 - 84、86)

「参政権」「幸福追求権」についても20歳代から40歳代で「言葉も意味も知っている」人の割合が少ない傾向が見受けられる。(図表 - 1 - 88、90)

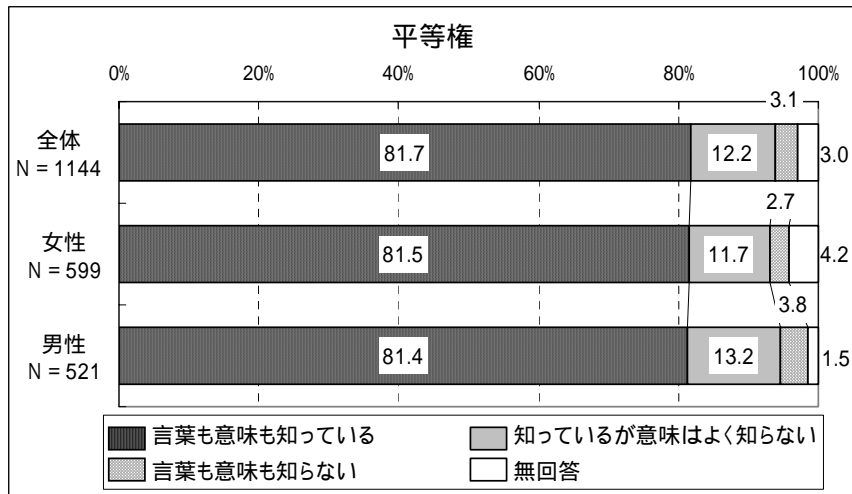
図表 - 1 - 75



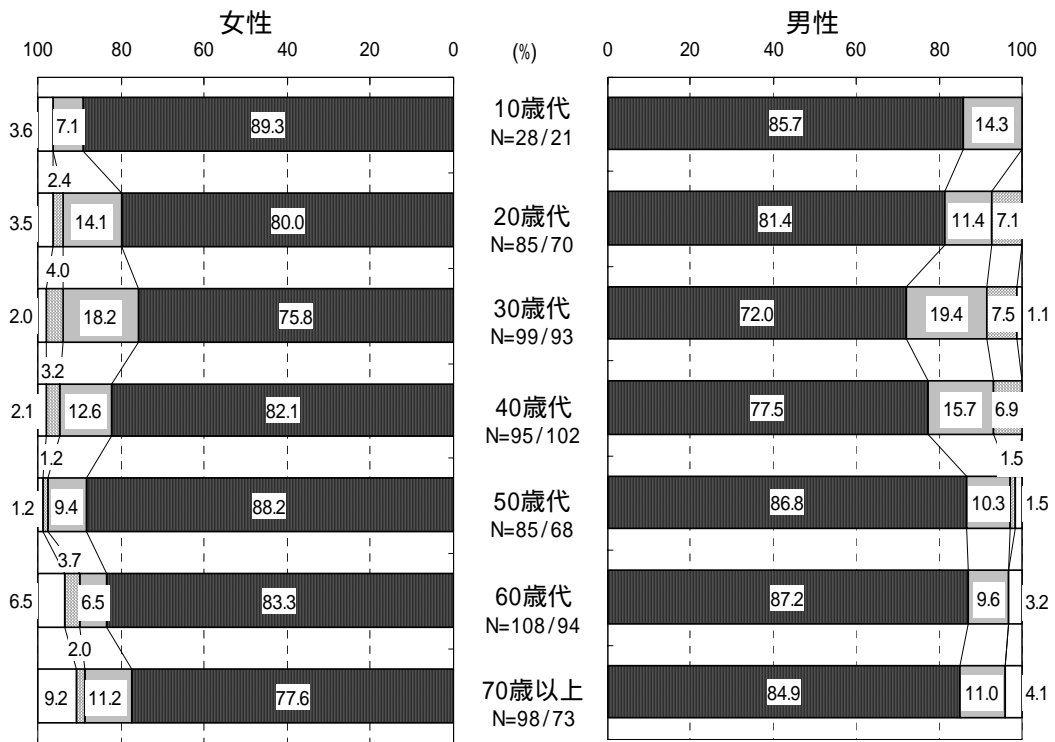
図表 - 1 - 76



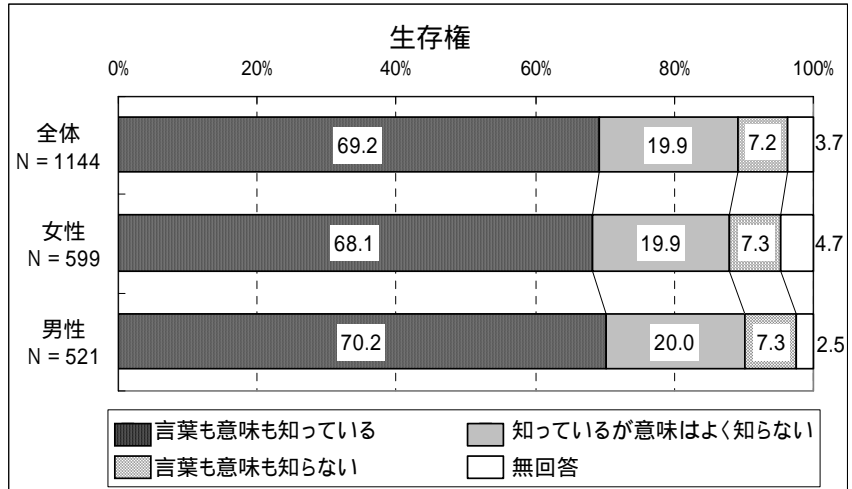
図表 - 1 - 77



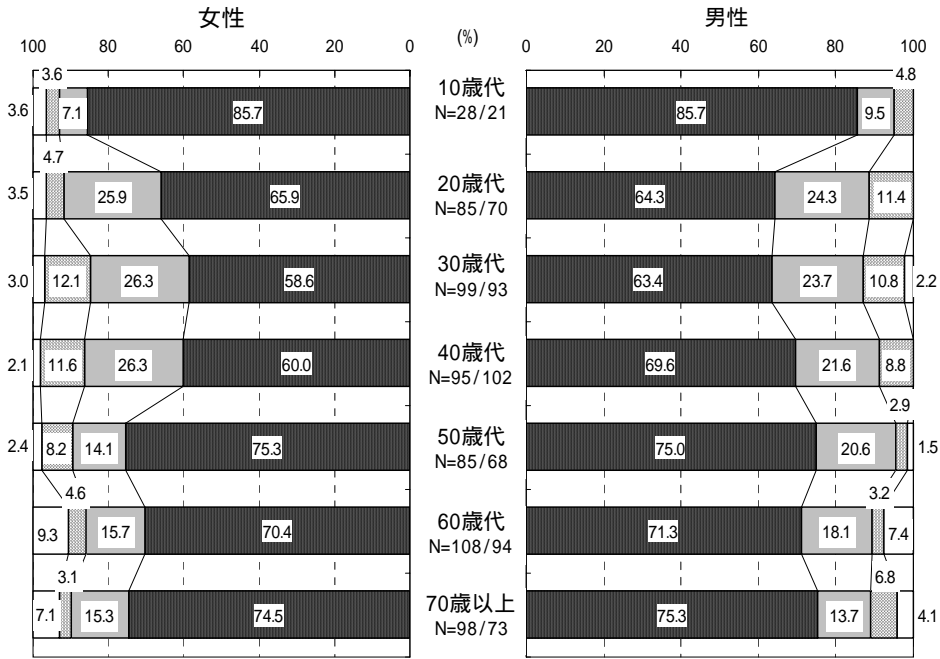
図表 - 1 - 78



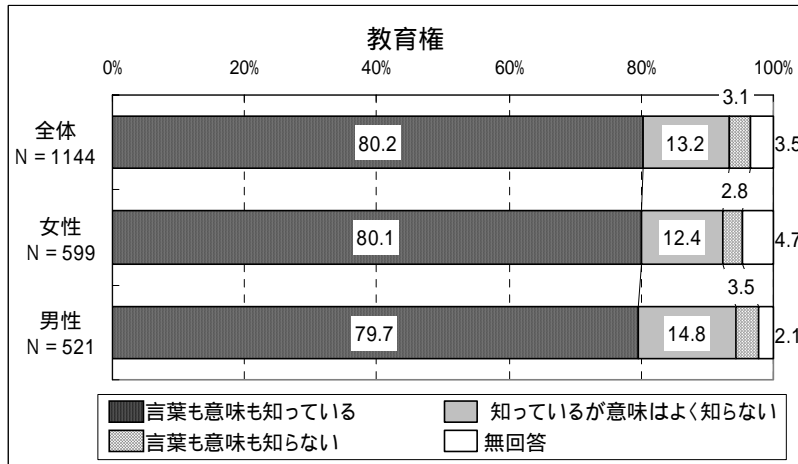
図表 - 1 - 79



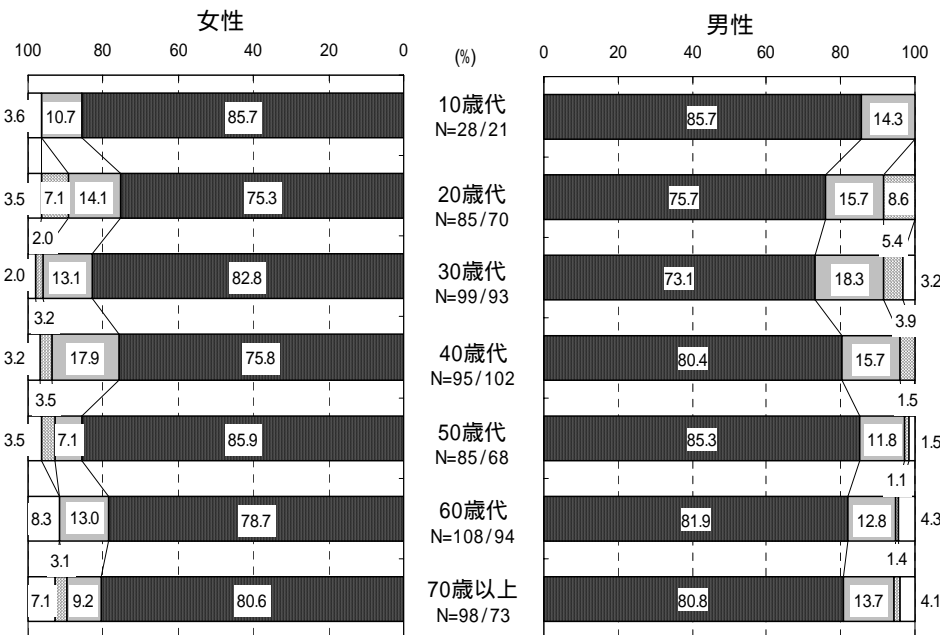
図表 - 1 - 80



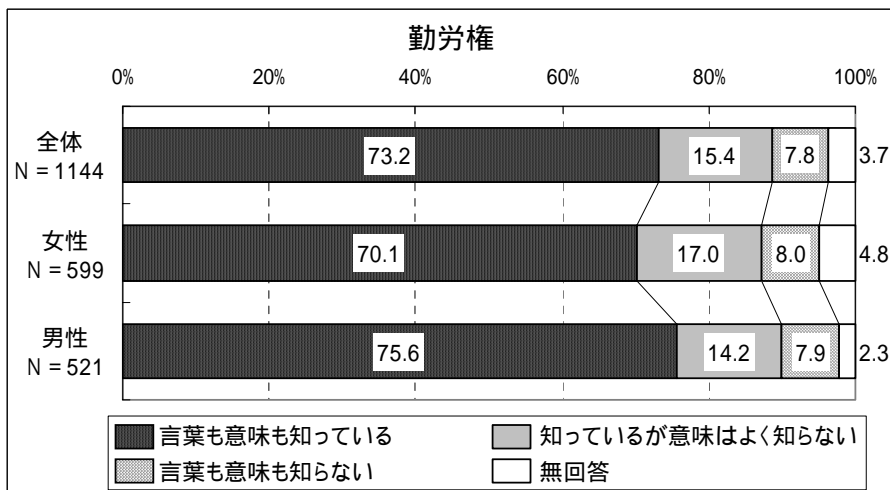
図表 - 1 - 81



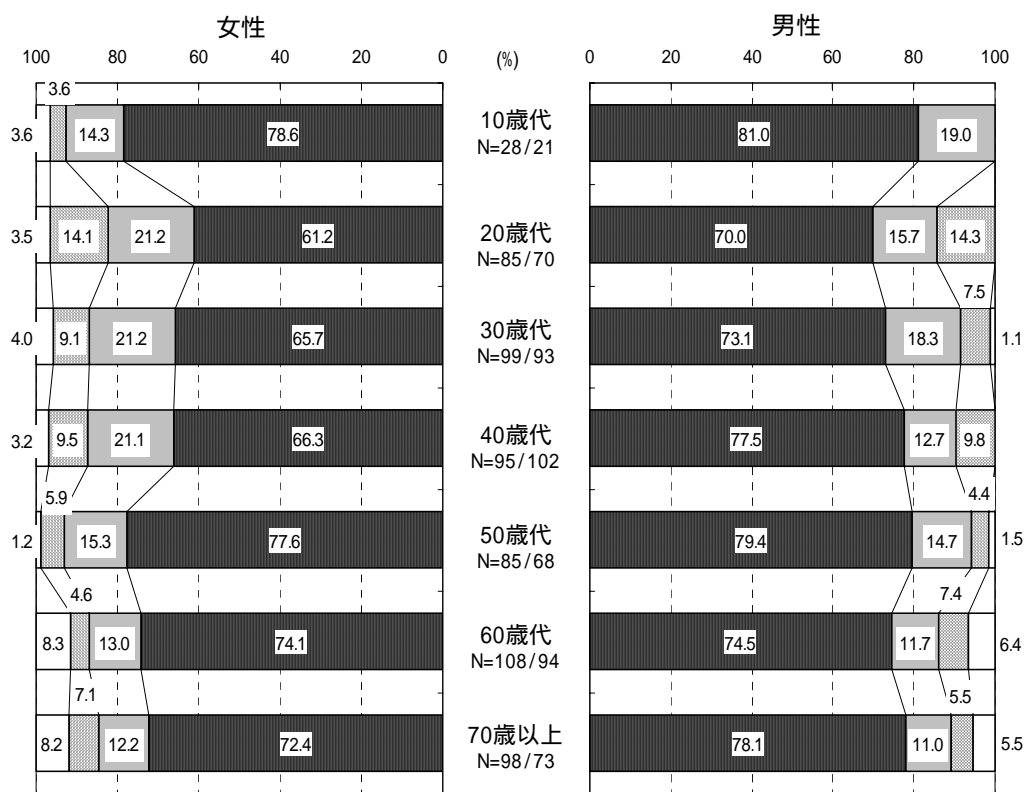
図表 - 1 - 82



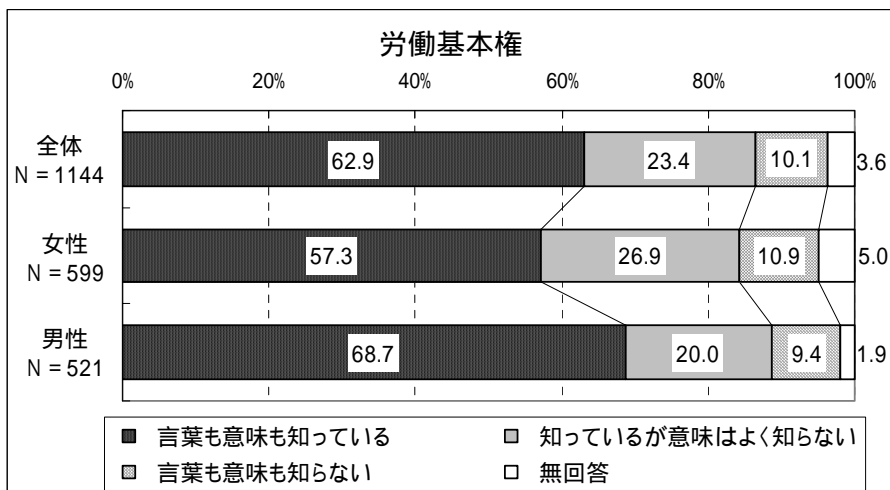
図表 - 1 - 83



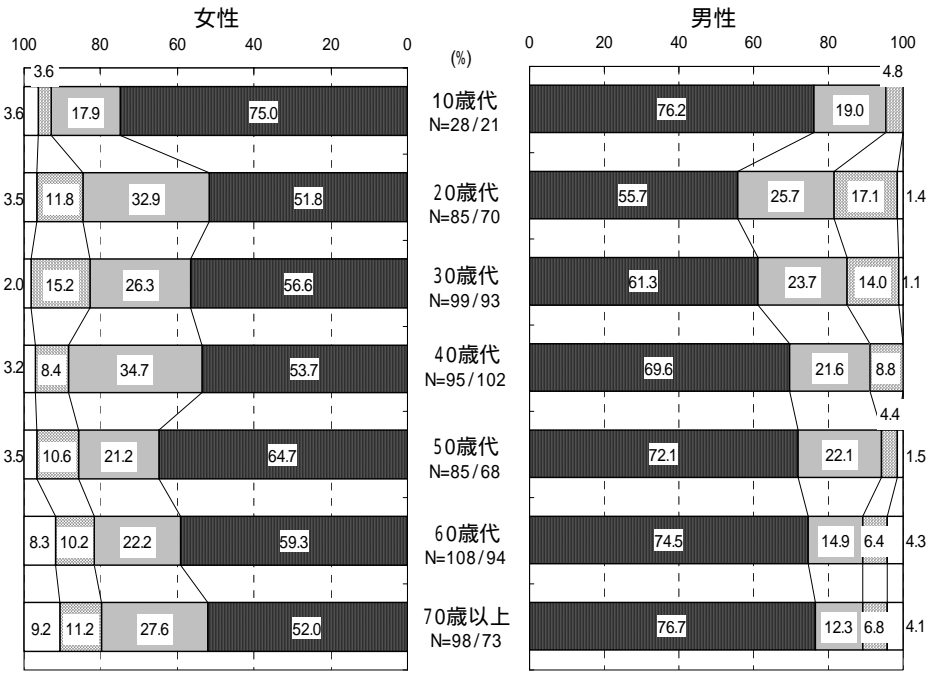
図表 - 1 - 84



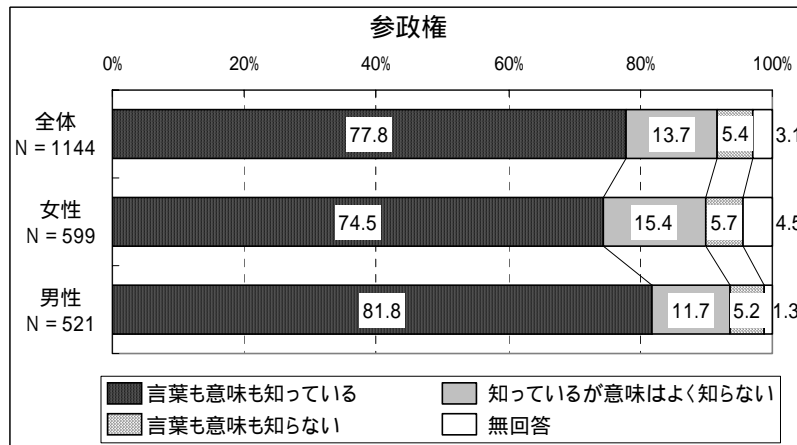
図表 - 1 - 85



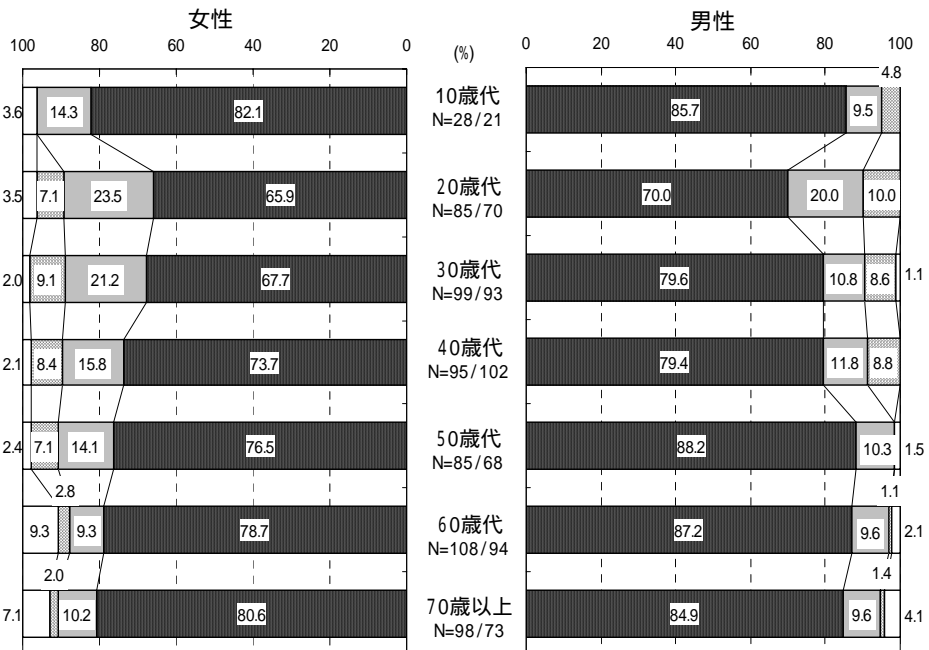
図表 - 1 - 86



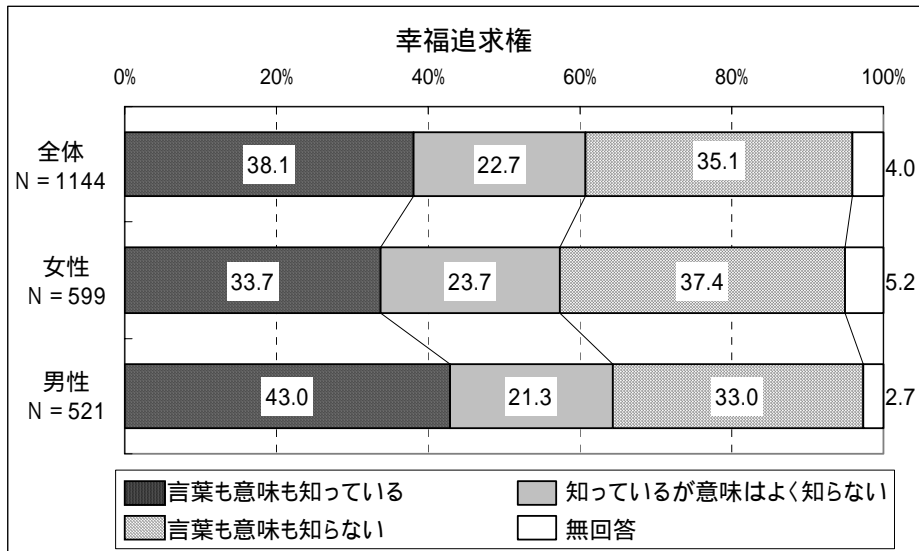
図表 - 1 - 87



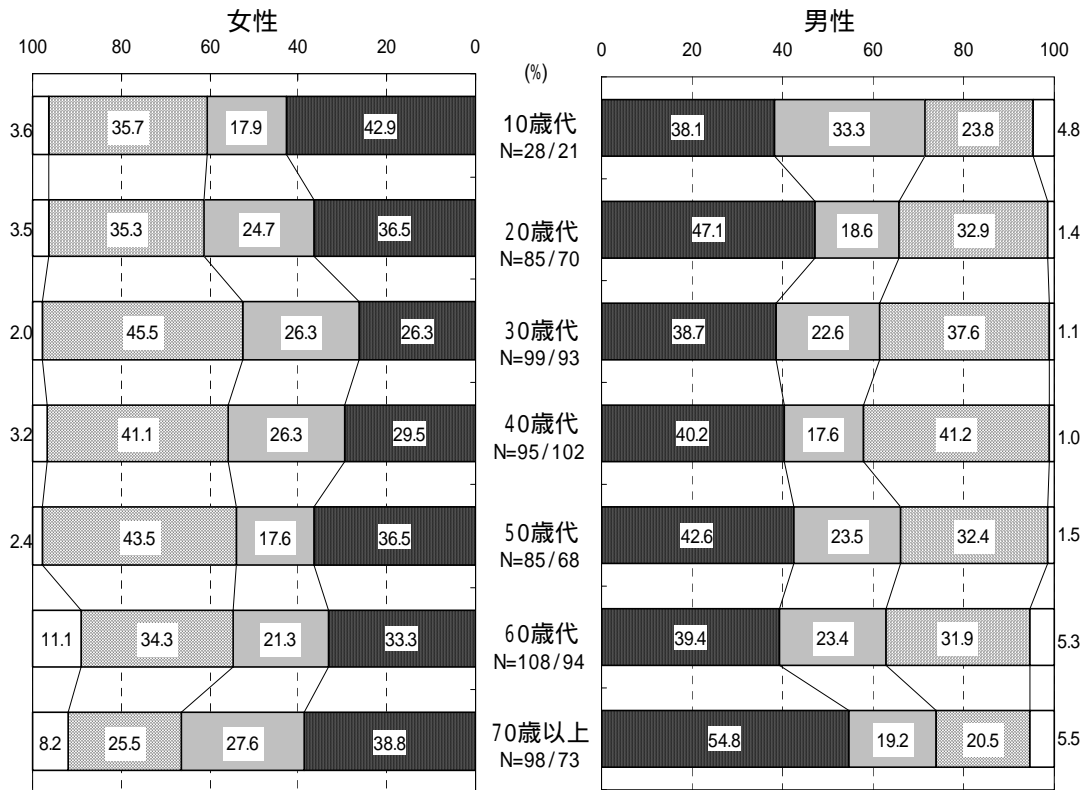
図表 - 1 - 88



図表 - 1 - 89



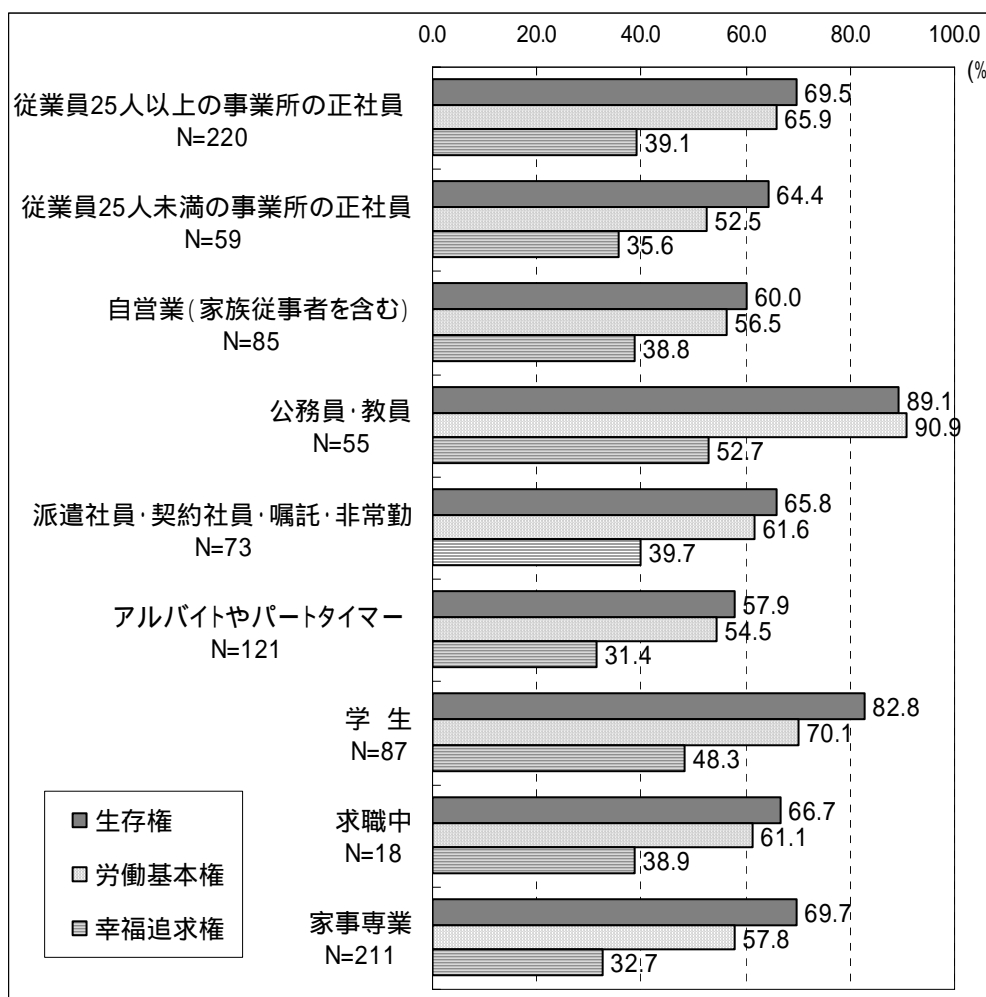
図表 - 1 - 90



< 職業別 >

憲法に保障されている権利の認知については、職業別にみると、「公務員・教員」「学生」は他の職業に比べるといずれの権利についても「言葉も意味も知っている」とする人の割合が多い。「言葉も意味も知っている」の割合が比較的少ない「生存権」「労働基本権」「幸福追求権」でも同様である。なお、「幸福追求権」については、憲法に関する基礎知識が業務で必要とされる「公務員・教員」でも52.7%にとどまっている。(図表 - 1 - 91)

図表 - 1 - 91



(2) 憲法で保障されている権利について主に学んだところ(問5)

< 全体的な傾向 >

「学校の授業で」学んだという回答が最も多く、70.4%である。次いで「テレビやラジオ、新聞などで」が42.5%となっている。(図表 - 1 - 92)

< 男女別・年代別 >

「学校の授業で」「テレビやラジオ、新聞などで」「家族から」「国・府・市などの広報誌や冊子などで」については、男女差はほとんどない。男性では「職場で」が24.6%となっている。(図表 - 1 - 93)

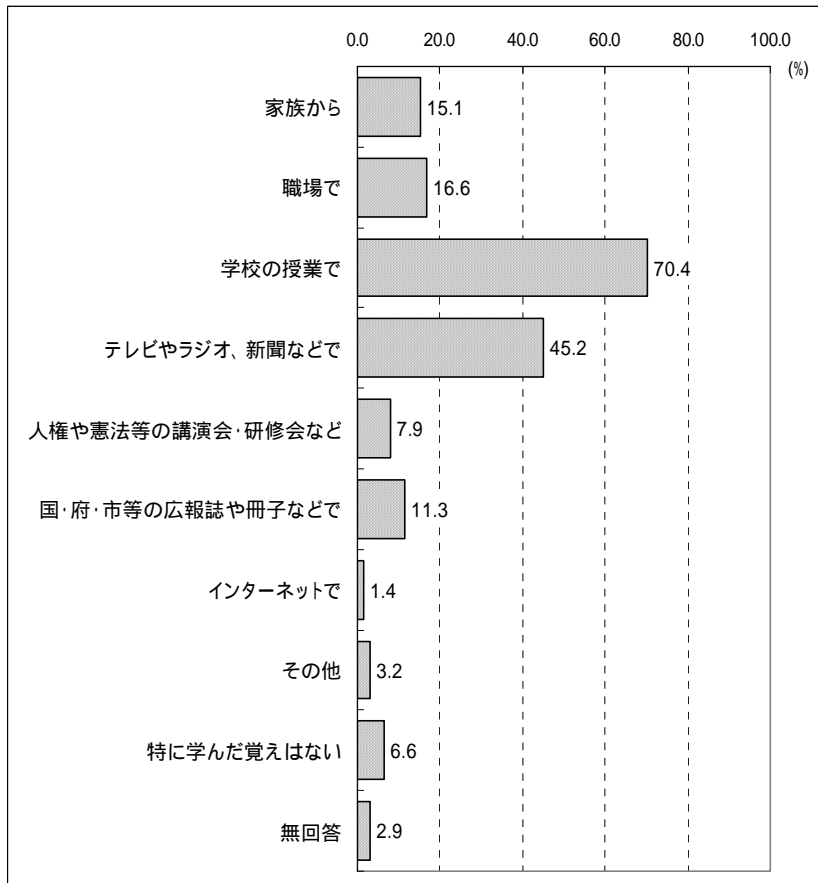
「学校の授業で」では、年齢が上るほどその割合が少なくなる。(図表 - 1 - 94)

「家族から」では、10歳代、70歳以上の女性が他と比較して多い割合となっている。(図表 - 1 - 95)

「テレビやラジオ、新聞などで」では、50歳以上の年代では50%を超えている。(図表 - 1 - 96)

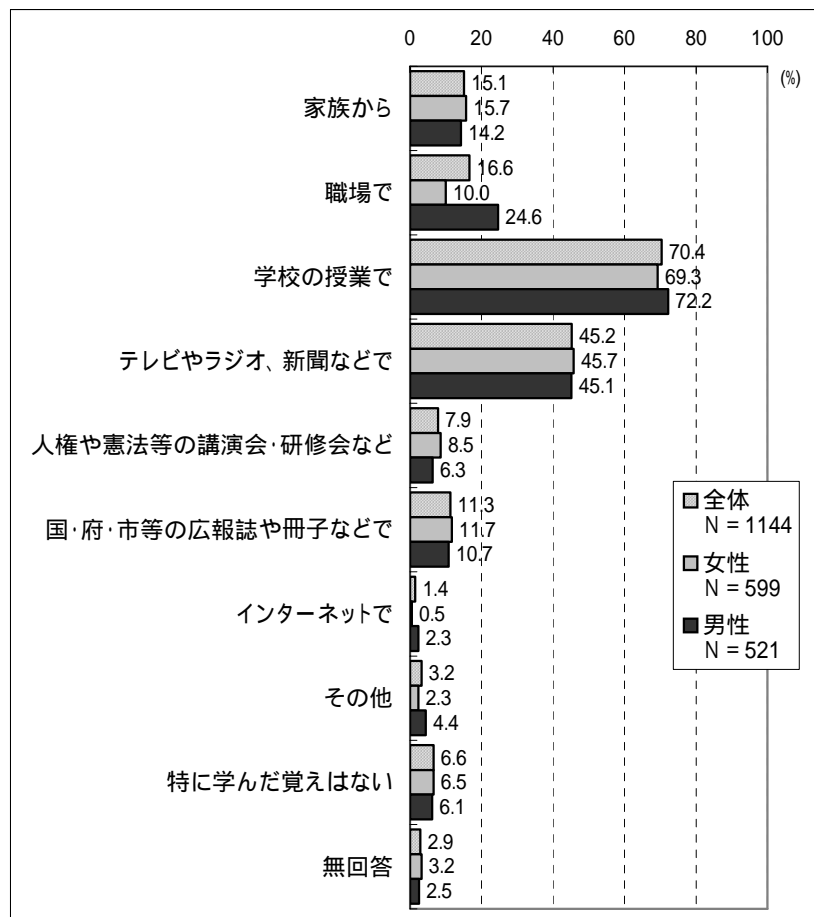
図表 - 1 - 92

(MA)

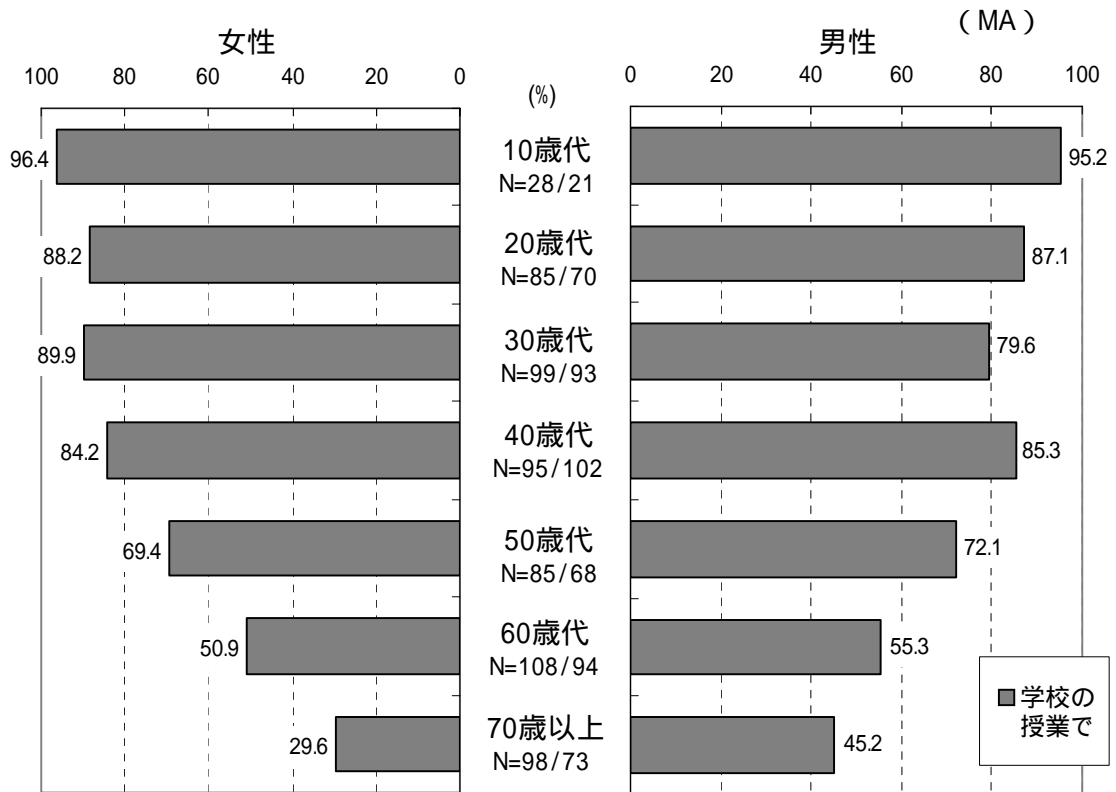


図表 - 1 - 93

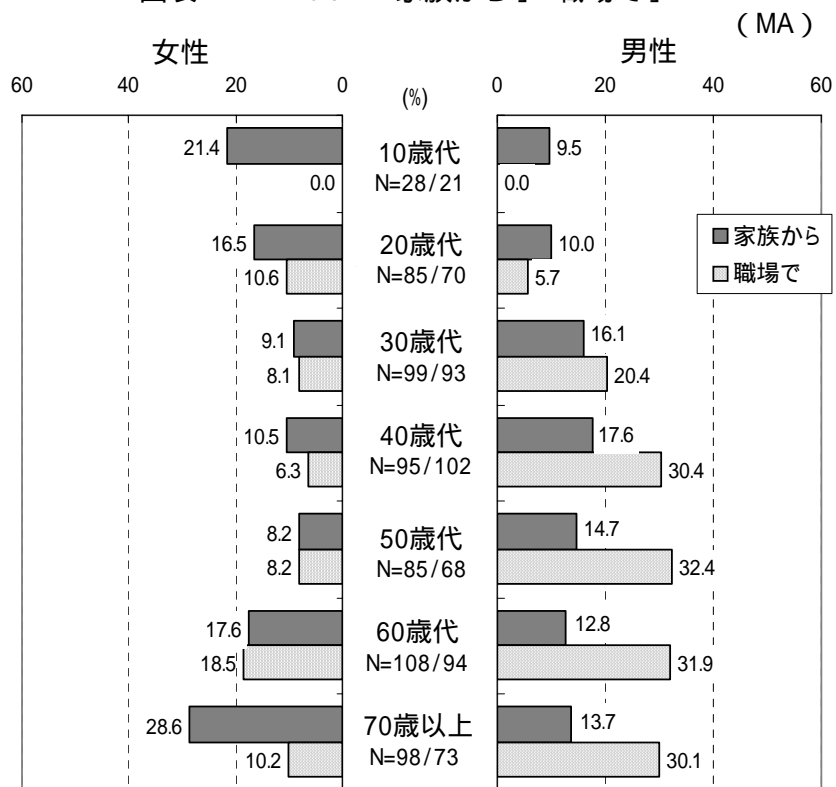
(MA)



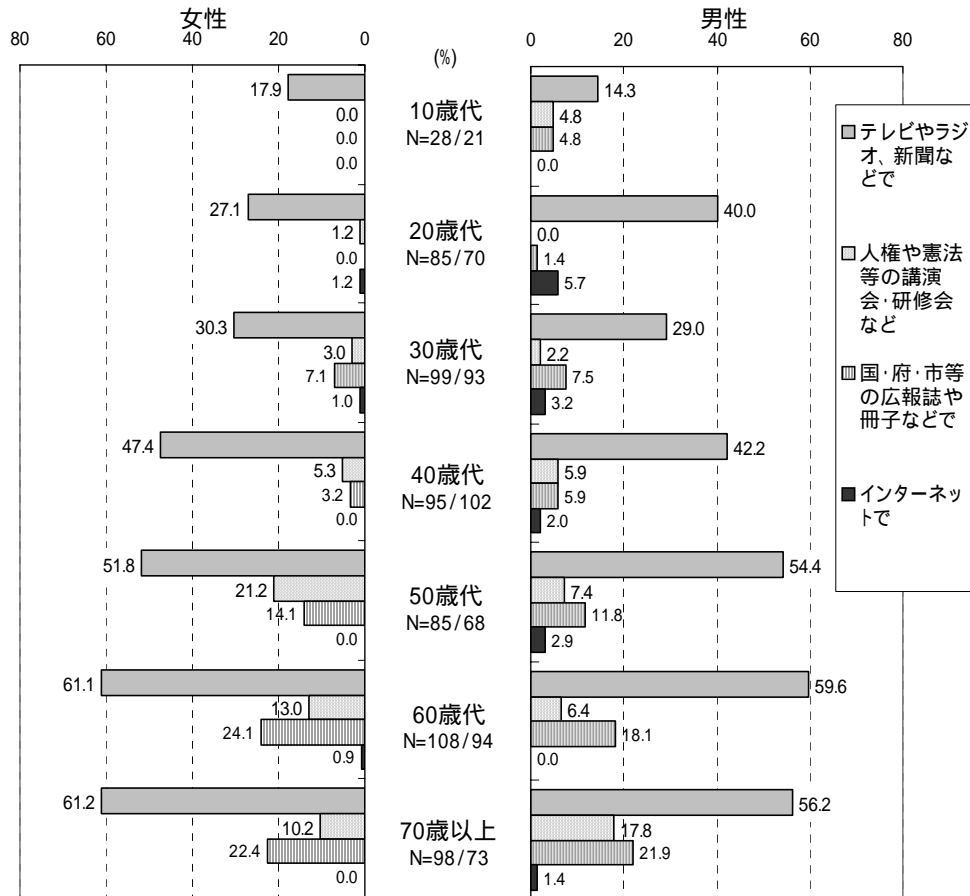
図表 - 1 - 94 「学校の授業で」



図表 - 1 - 95 「家族から」「職場で」



図表 - 1 - 96 その他の選択肢 (MA)

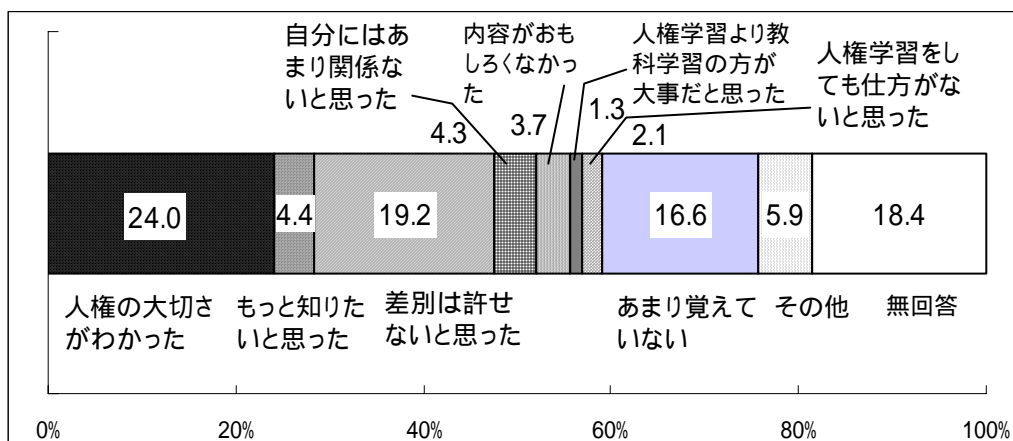


(3) 学校での人権学習の感想(問6)

< 全体的な傾向 >

学校での人権学習について主にどのような感想をもったかについては、「人権の大切さがわかった」が24.0%と最も多く、次いで「差別は許せないと思った」が19.2%、「あまり覚えていない」が16.6%となっている。「自分にはあまり関係ないと思った」「内容がおもしろくなかった」「人権学習より教科学習の方が大事だと思った」「人権学習をしても仕方がないと思った」という否定的な評価は合計して10%強である。(図表 - 1 - 97)

図表 - 1 - 97

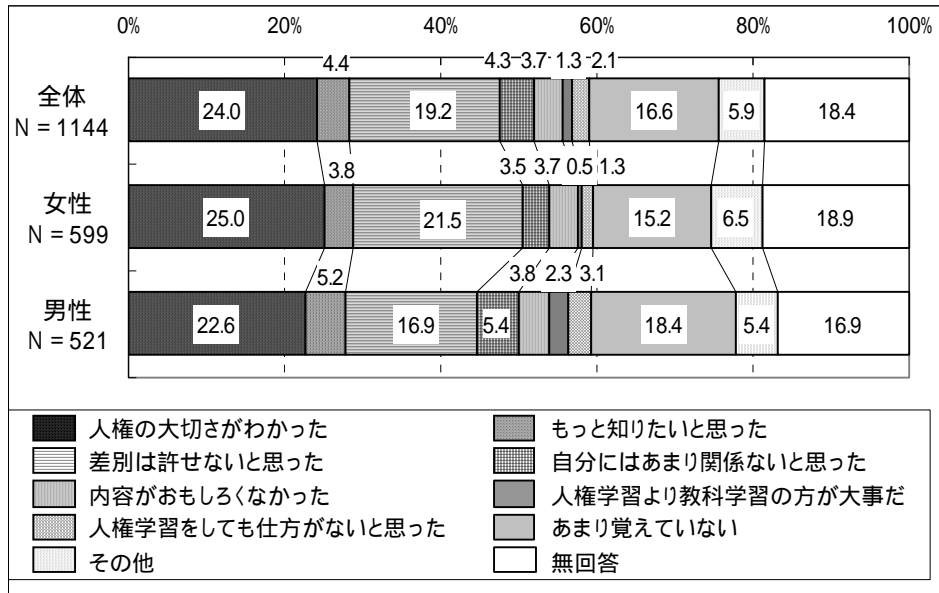


< 男女別・年代別 >

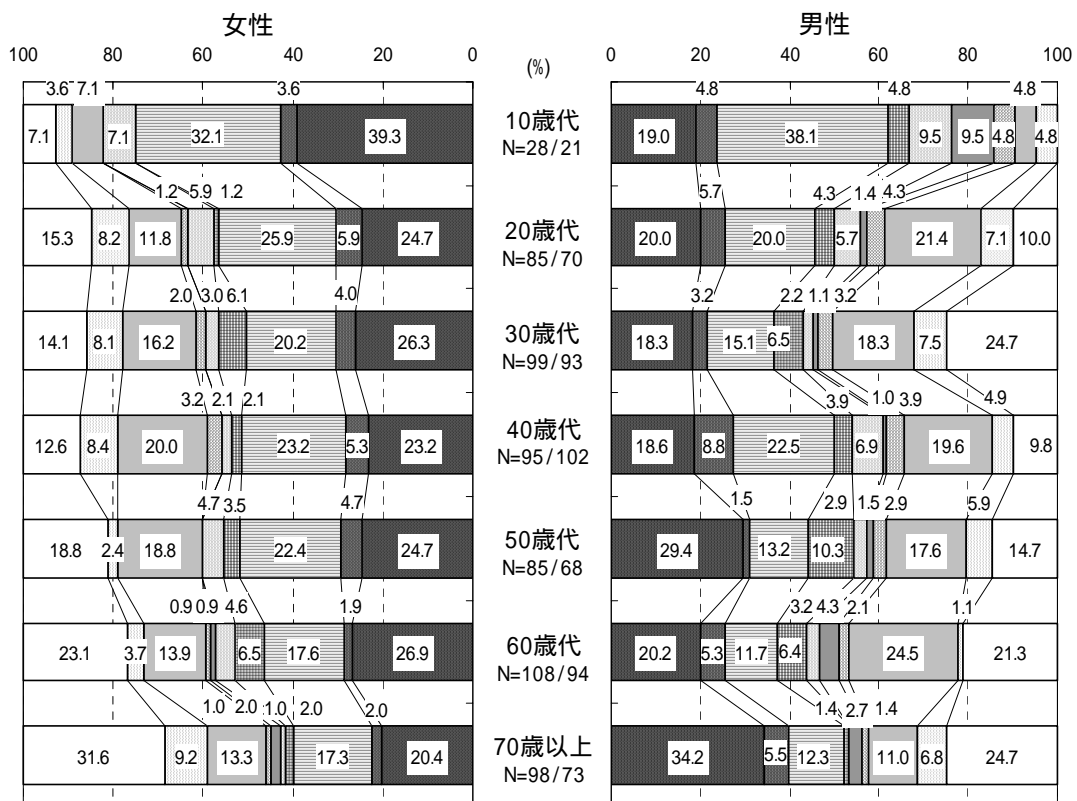
「人権の大切さがわかった」は、女性で 25.0%、男性で 22.6%となっている。「差別は許せないと思った」が女性で 21.5%、男性で 16.9%となっている。「もっと知りたいと思った」「差別は許せないと思った」をあわせると、女性は人権学習へのプラス評価が 50%超となっている。一方で、「あまり覚えていない」も女性で 15.2%、男性で 18.4%となっている。(図表 - 1 - 98)

10 歳代女性と 70 歳以上男性で「人権の大切さがわかった」の割合が 30%を超えている。男女ともに 10 歳代で「差別は許されないと思った」の割合が 30%を超えている。(図表 - 1 - 99)

図表 - 1 - 98



図表 - 1 - 99



(4) 人権学習の方法とその評価(問7)

< 全体的な傾向 >

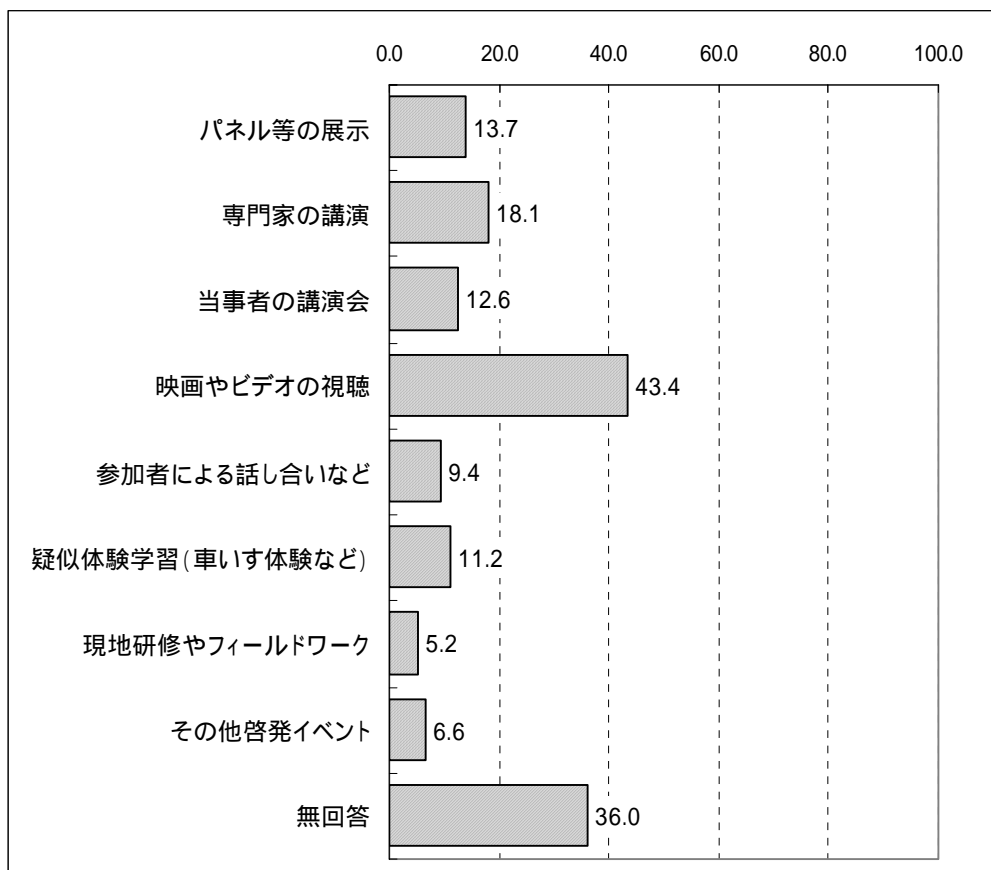
人権学習の方法としてどのようなことを経験したかをたずねたところ、最も多い学習方法は「映画やビデオの視聴」で43.4%となっている。「専門家の講演」が18.1%、「パネル等の展示」が13.7%、「当事者の講演会」が12.6%と多人数が参加できるプログラムが比較的多くなっている。「疑似体験学習」は11.2%、「参加者による話し合いなど」は9.4%である。(図表 - 1 - 100)

なお、無回答が36.0%となっている。(図表 - 1 - 100)

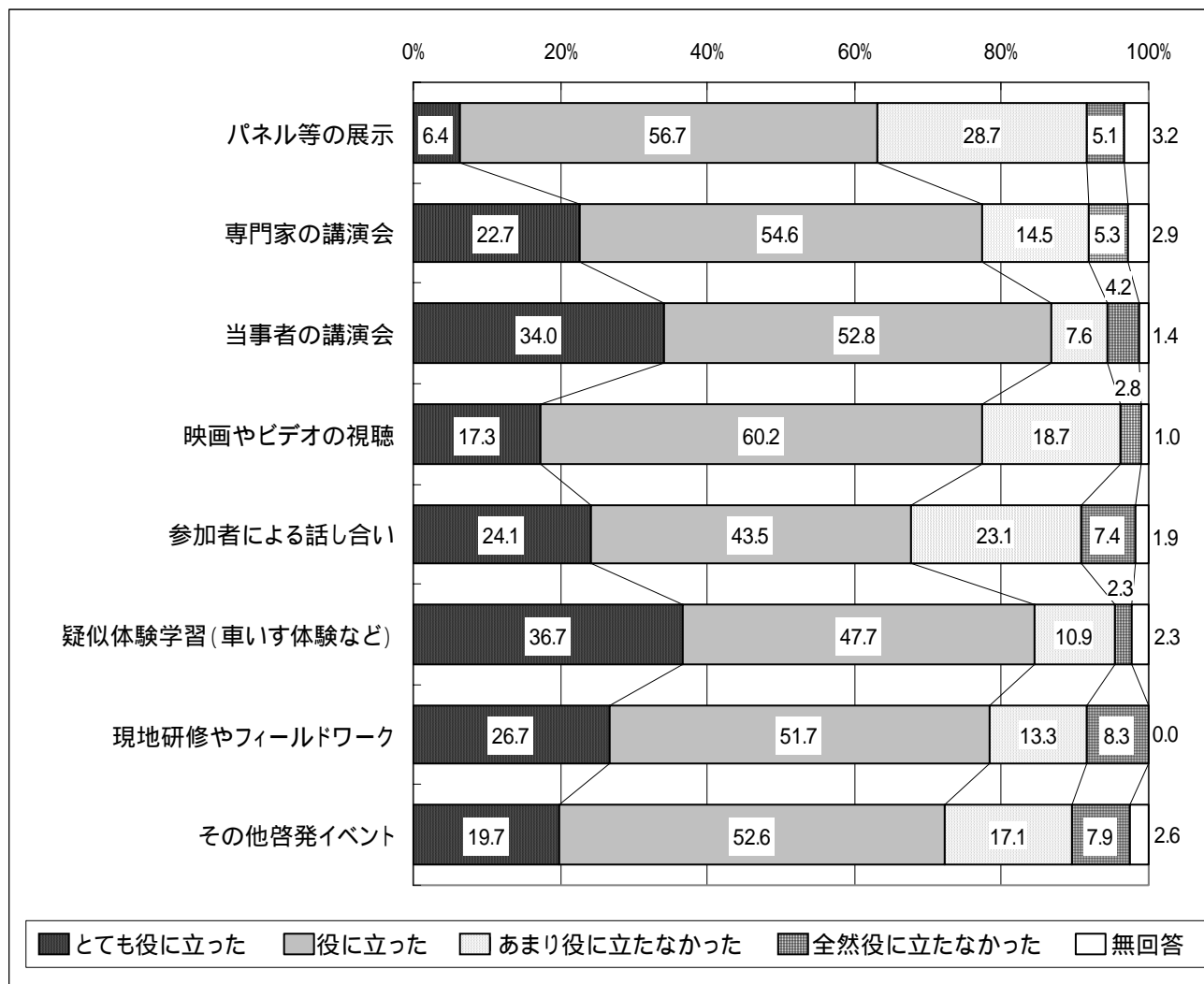
経験したそれぞれの学習方法が役に立ったかどうかについては、8つの方法いずれについても「役に立った」が最も多く、「とても役に立った」を含めたプラス評価が60%を越えている。特に「当事者の講演会」「疑似体験学習」では「とても役に立った」がそれぞれ34.0%、36.7%となっている。(図表 - 1 - 101)

図表 - 1 - 100

(MA)



図表 - 1 - 101

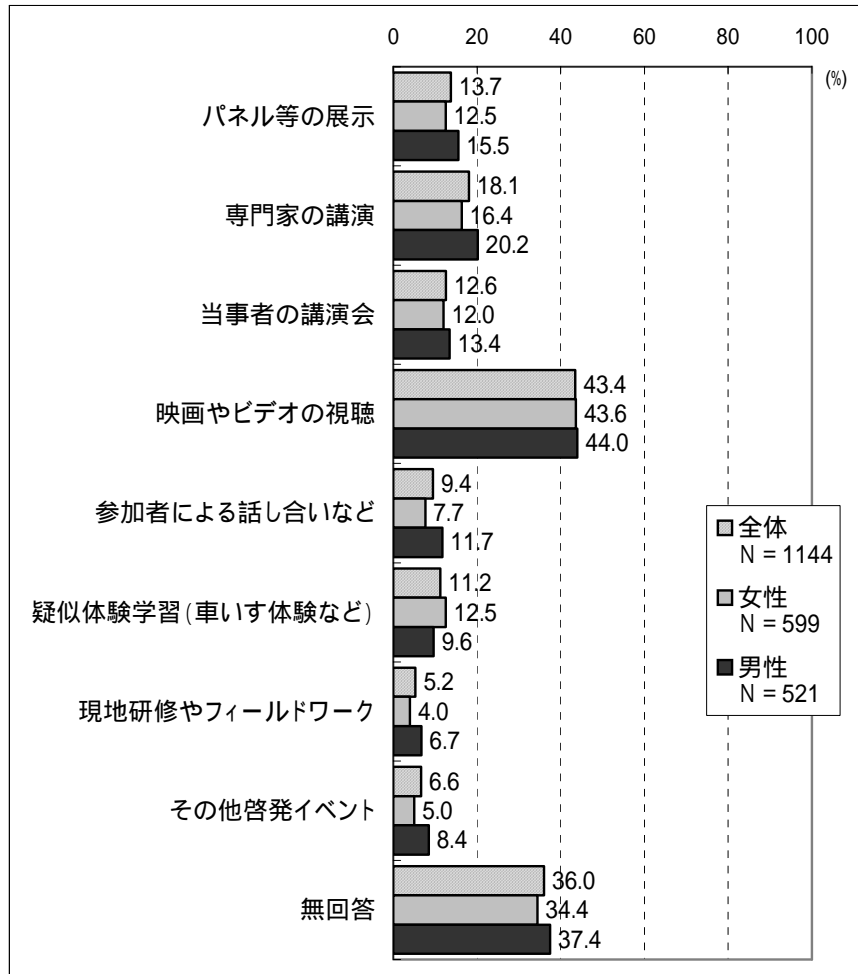


< 男女別・年代別 >

男女で大きな差はないが、男性では「パネル等の展示」「専門家の講演」「参加者による話し合いなど」「現地研修やフィールドワーク」がやや多く、女性では「疑似体験学習」がやや多い。(図表 - 1 - 102)

図表 - 1 - 102

(MA)

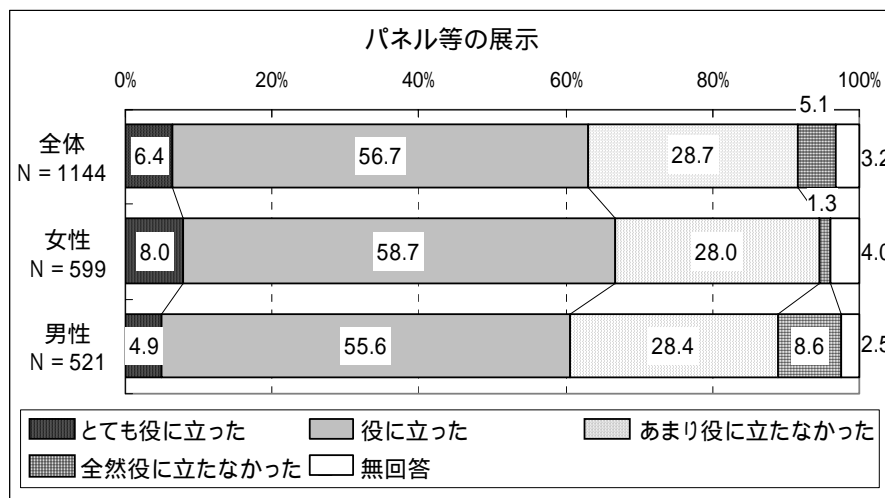


< 学習方法別傾向 >

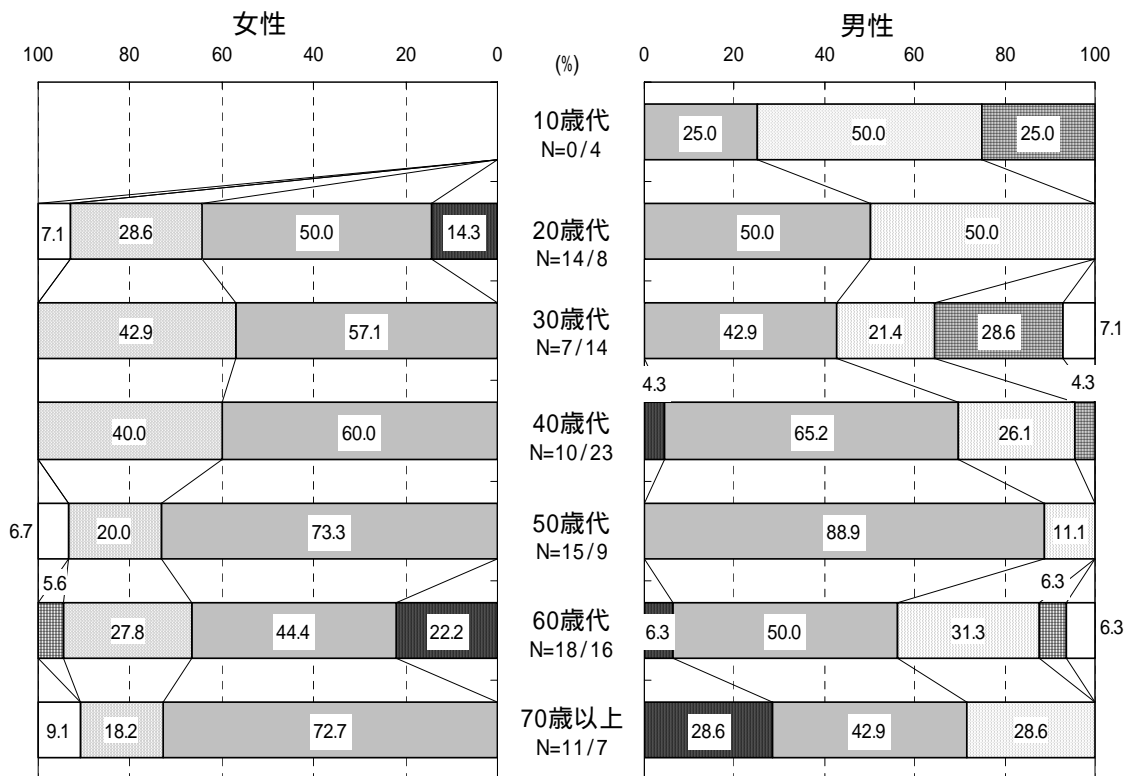
学習方法別の傾向については、経験した学習方法へのみの回答となっているため、細区分すると母数が少なくなるが、それぞれに社会環境が異なるため、同様に性別年代別に集計し、参考数値としてみることにする。

「パネル等の展示」については、「とても役に立った」という評価が最も少ない学習方法となっている。女性の20歳代、60歳代、男性の40歳代、60歳代、70歳代で、「とてもよかった」という評価がでているが、女性と男性の10歳代、20歳代で「あまり役に立たなかった」の割合がやや目立つ。(図表 - 1 - 103、104)

図表 - 1 - 103



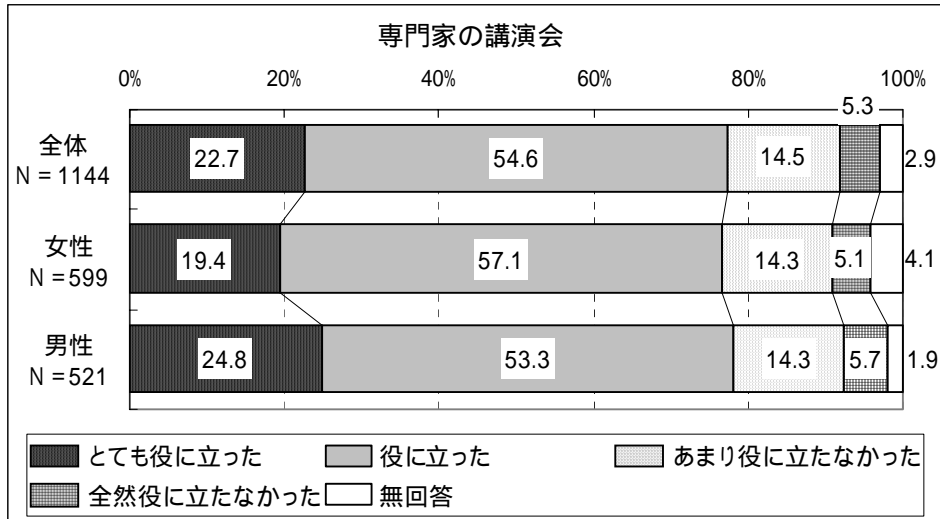
図表 - 1 - 104



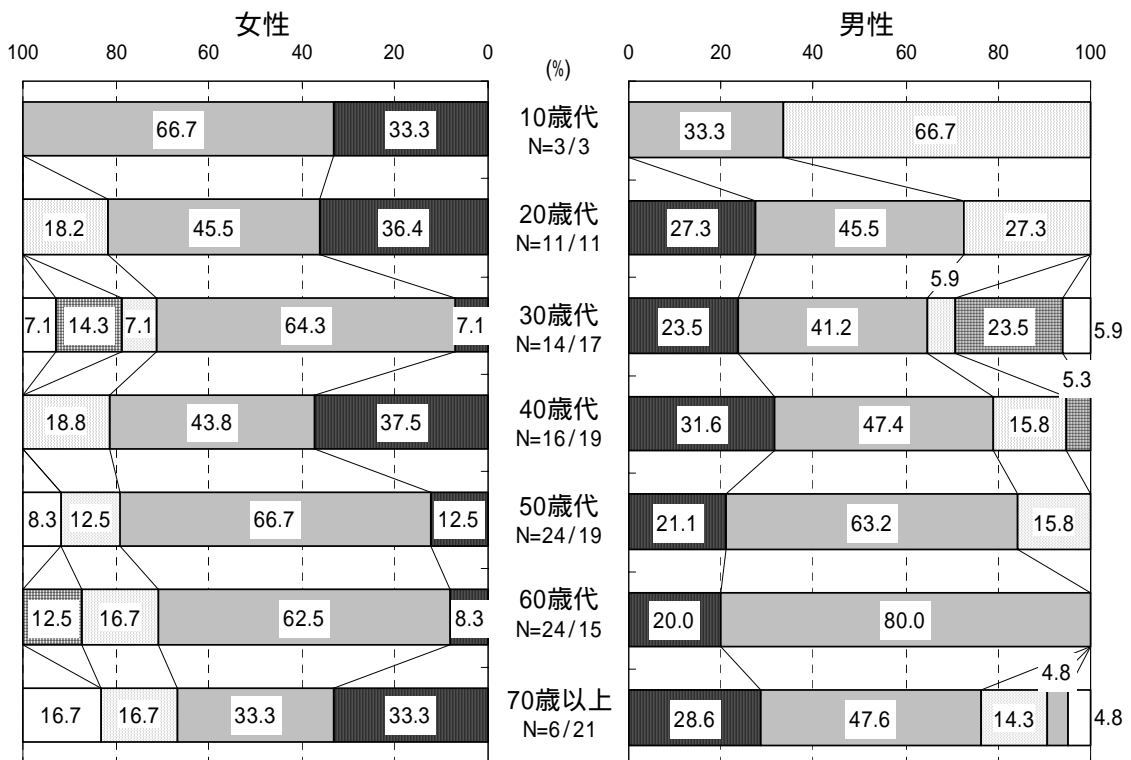
「専門家の講演会」は、女性の19.4%、男性の24.8%が「とても役に立った」としている。

女性では10歳代、20歳代で30%超が「とても役に立った」と評価をする年代もある。男性では20歳代以上で「とても役に立った」の割合が20%を超えている。一方で、10~20歳代の男性で「あまり役に立たなかった」が目立つ。(図表 - 1 - 105、106)

図表 - 1 - 105

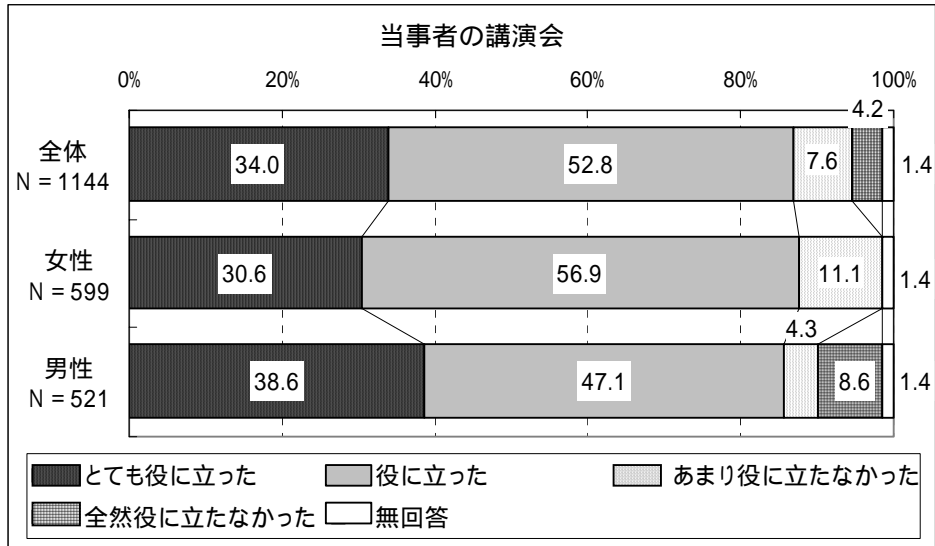


図表 - 1 - 106

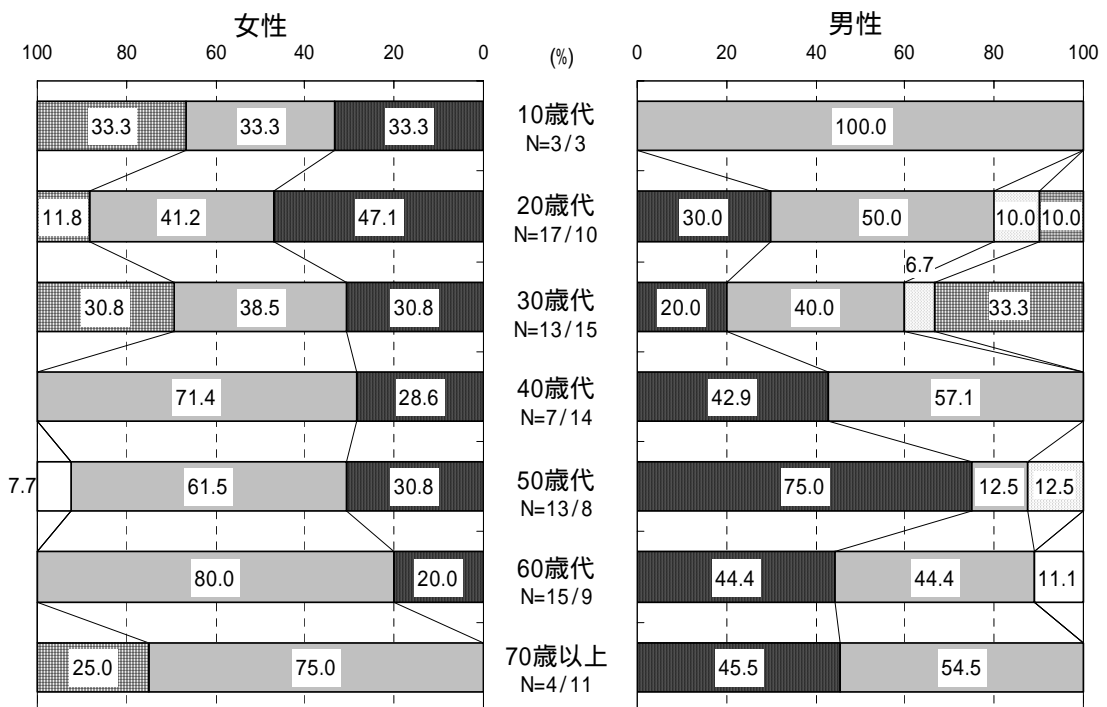


「当事者の講演会」は、女性の30.6%、男性の38.6%が「とても役に立った」としている。
 女性の20歳代、男性の40歳代以上では、「とても役に立った」が40%台以上となっている。(図表 - 1 - 107、108)

図表 - 1 - 107



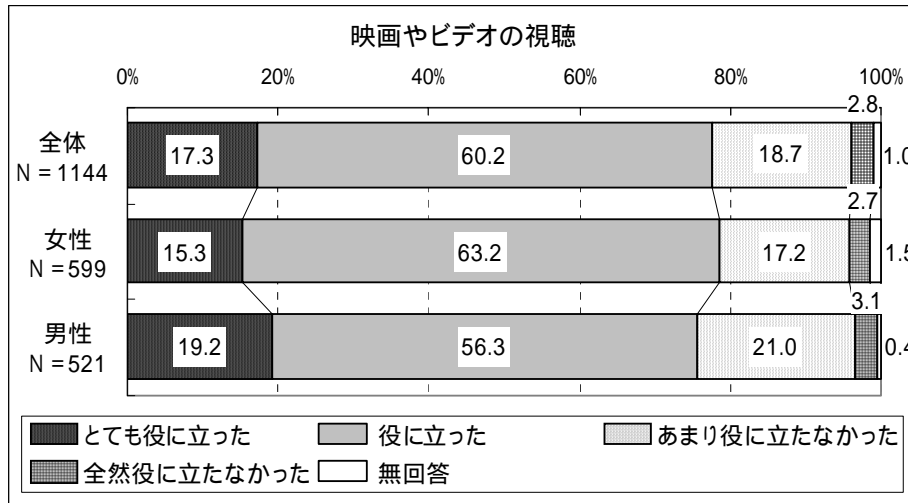
図表 - 1 - 108



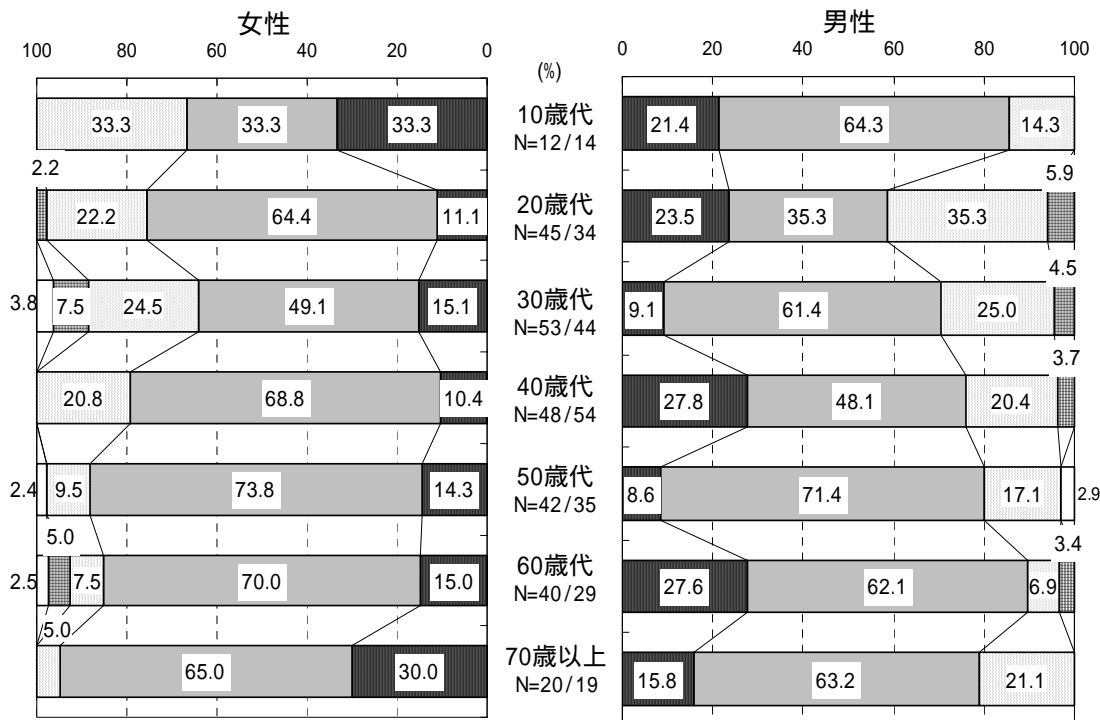
「映画やビデオの視聴」は、女性の15.3%、男性の19.2%が「とても役に立った」としている。

男女ともに10歳代で「とても役に立った」が多く、男性の20歳代、40歳代、60歳代、女性の70歳以上でも「とても役に立った」が20%を超えている。一方で、「あまり役に立たなかった」という評価の割合が、10歳代女性、20歳代男性で30%となっている。(図表 - 1 - 109、110)

図表 - 1 - 109



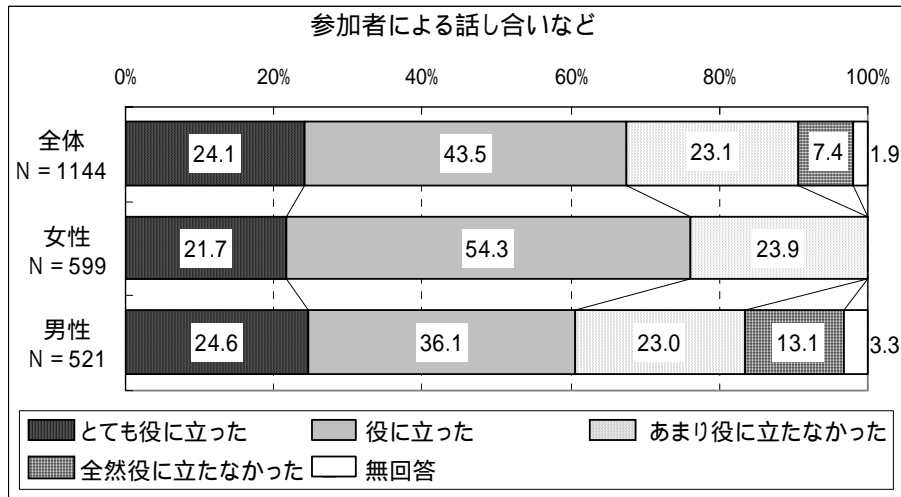
図表 - 1 - 110



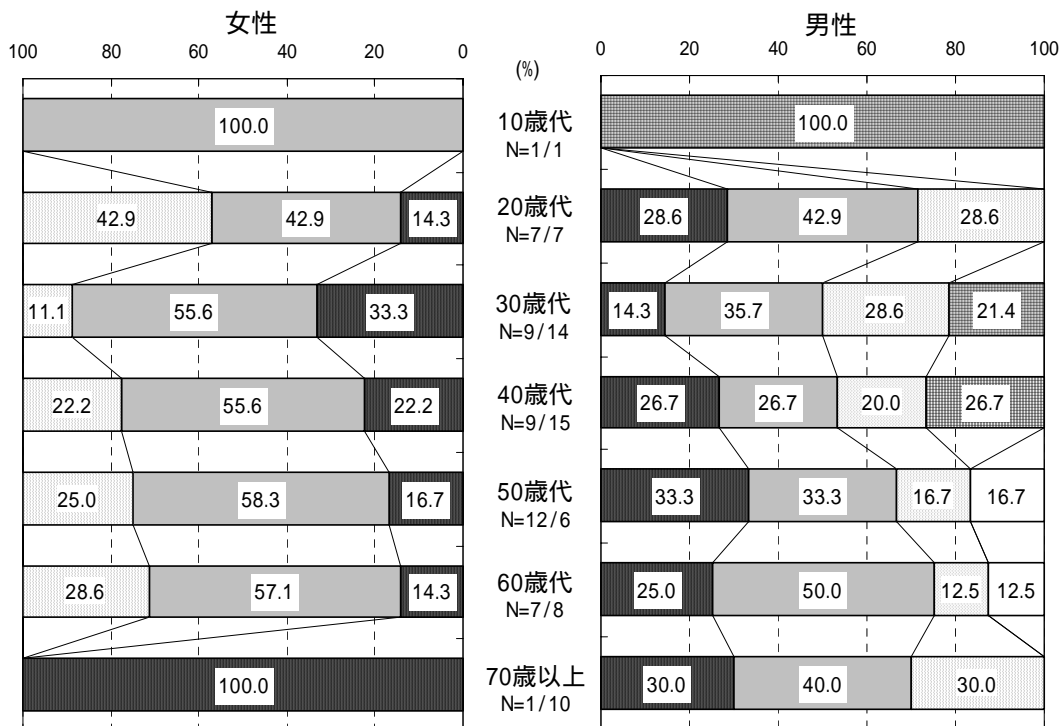
「参加者による話し合いなど」は、女性の21.7%、男性の24.6%が「とても役に立った」としている。男性では、「全然役に立たなかった」が13.1%となっている。

女性の30歳代、男性の20歳代、40～60歳代では「とても役に立った」が多くなっている。一方で、30～40歳代の男性で「全然役に立たなかった」の割合が多くなっている。(図表 - 1 - 112、113)

図表 - 1 - 111

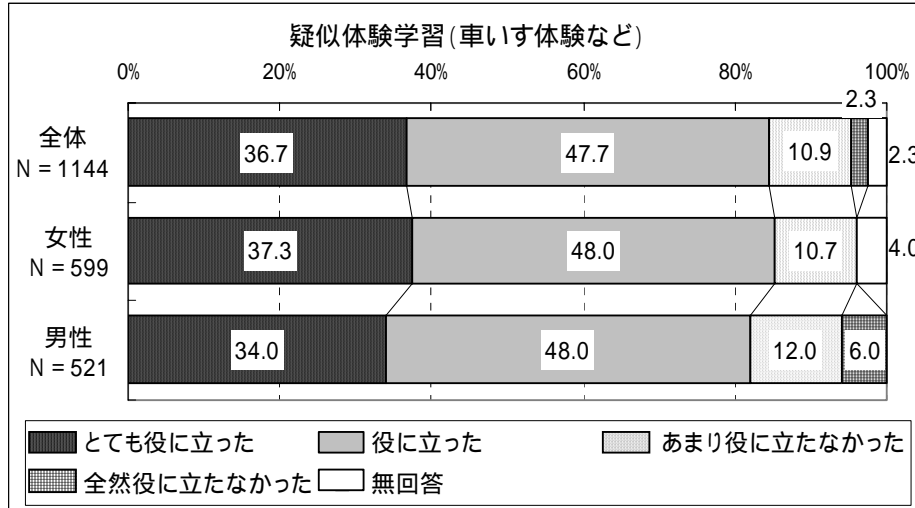


図表 - 1 - 112

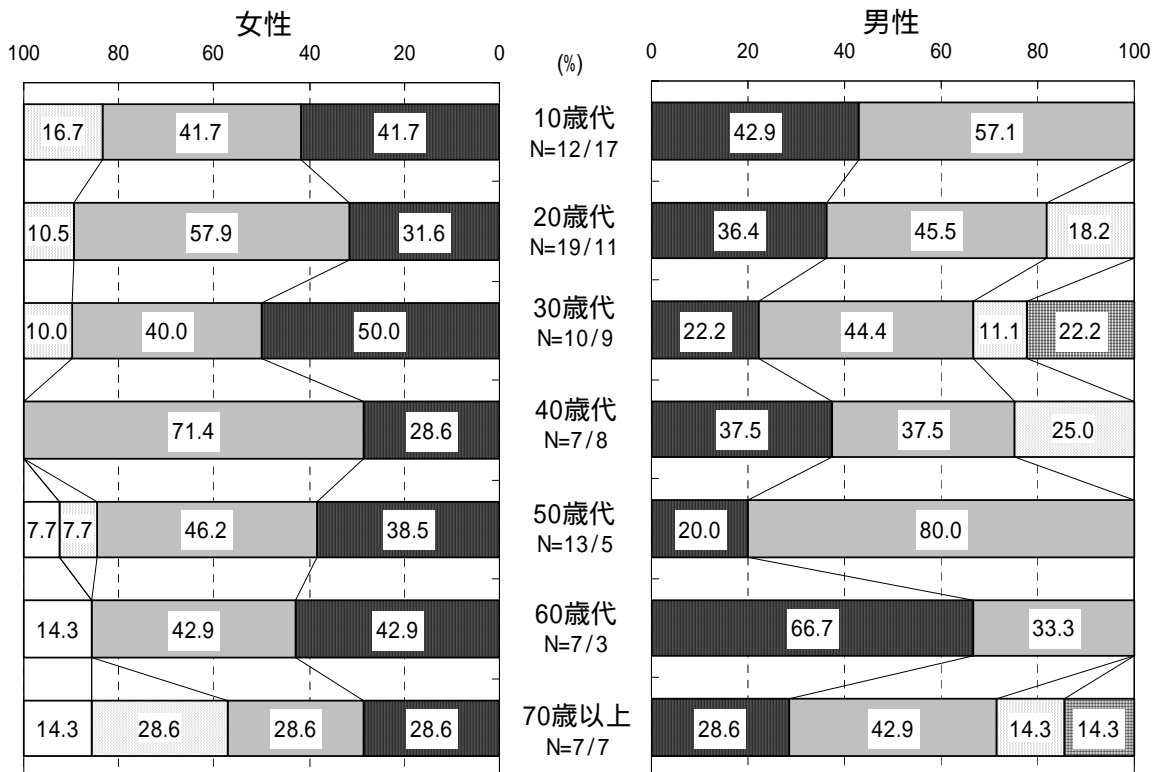


「疑似体験学習」は、「とても役に立った」が女性で 37.3%、男性で 34.0%となっている。
 30 歳代、70 歳代男性では、「あまり役に立たなかった」の割合もあるが、高い評価をする世代が多い。
 (図表 - 1 - 113、114)

図表 - 1 - 113



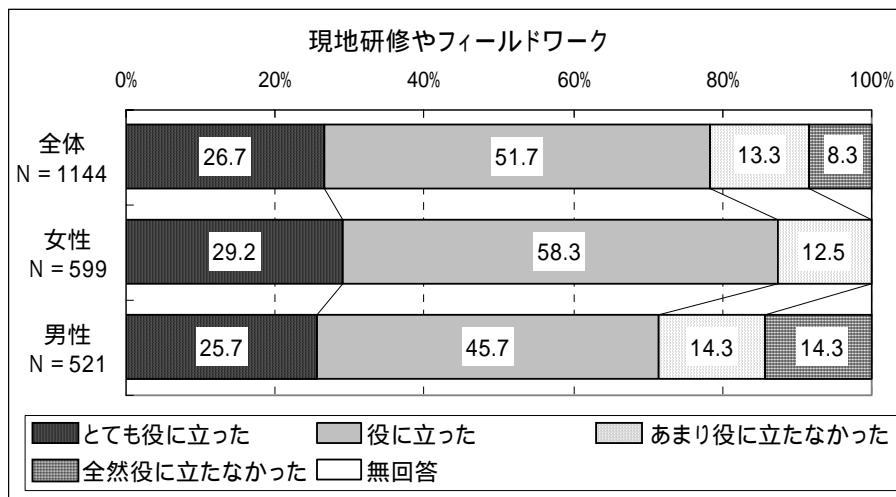
図表 - 1 - 114



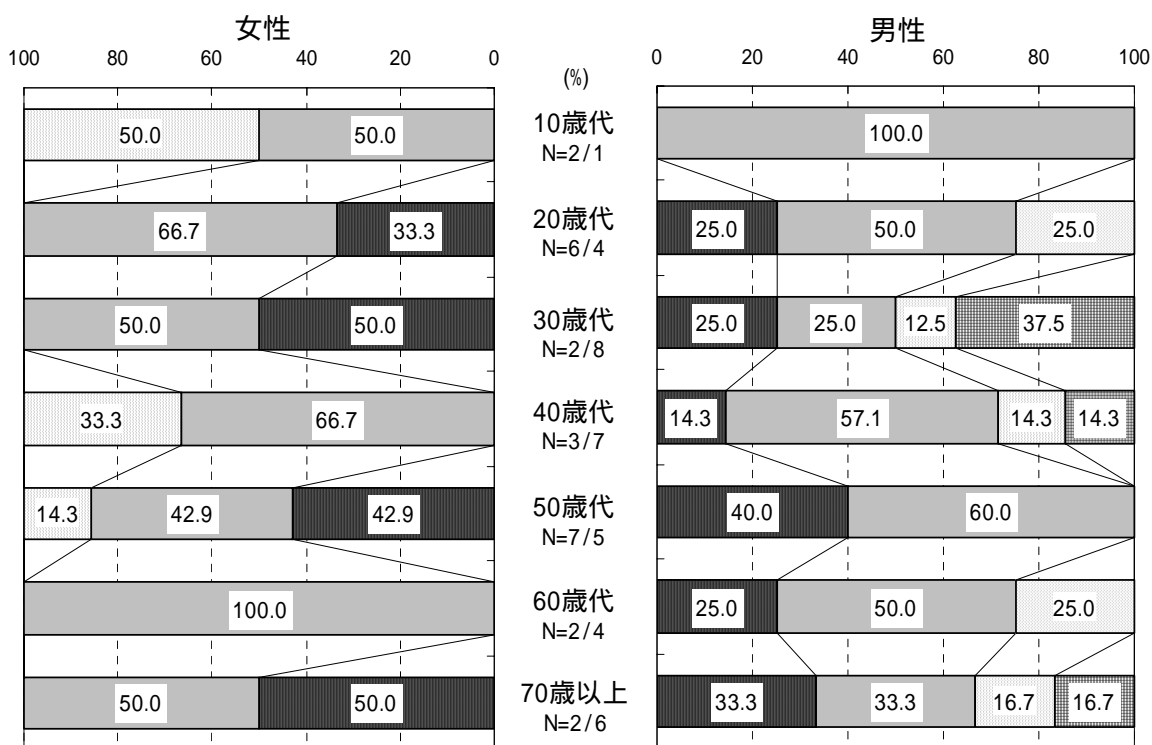
「現地研修やフィールドワーク」については、女性の29.2%、男性の25.7%が「とても役に立った」としている。

30～40歳代、70歳以上の男性では、「全然役に立たなかった」という評価もある。(図表 - 1 - 115～116)

図表 - 1 - 115

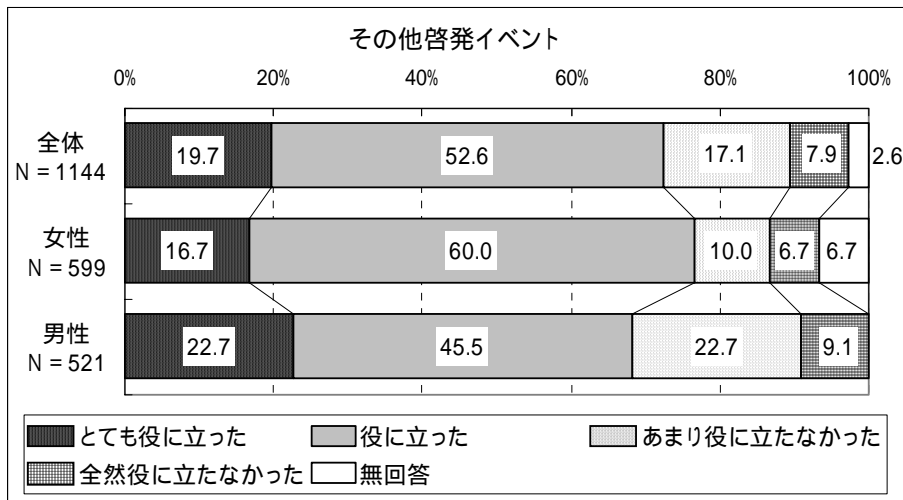


図表 - 1 - 116

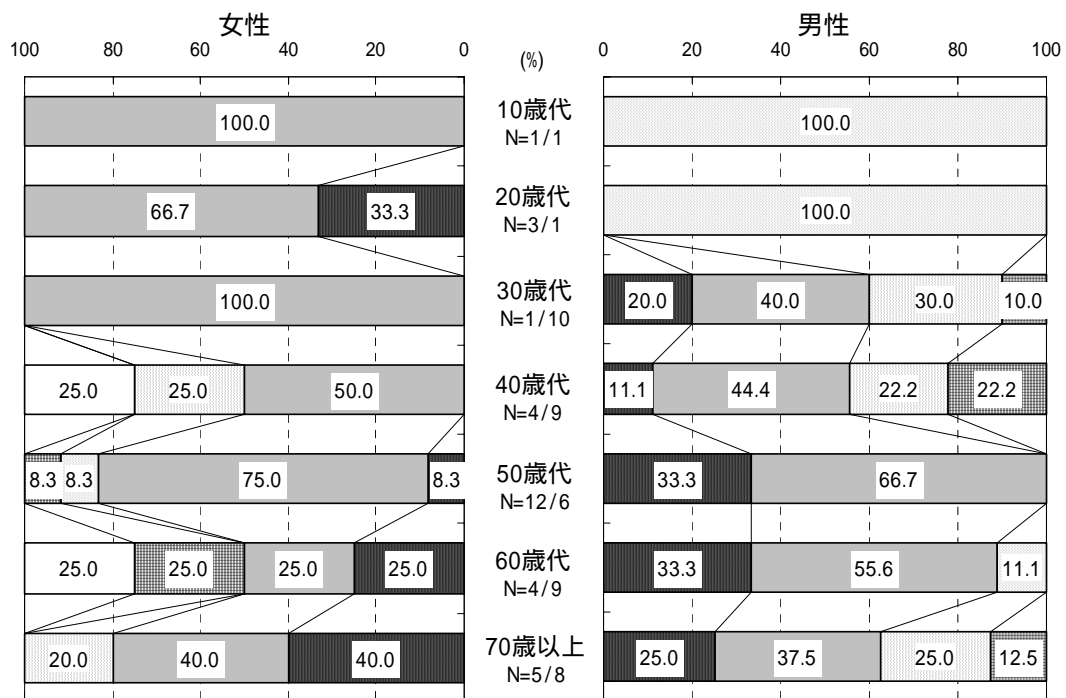


「その他の啓発イベント」は、女性の16.7%、男性の22.7%が「とても役に立った」としている。
 (図表 - 1 - 117 ~ 118)

図表 - 1 - 117



図表 - 1 - 118



< 職業別 >

「映画やビデオの視聴」「専門家の講演会」「パネル展示」「当事者の講演会」など多くの人が参加できる手法を経験している割合が多くなっている。職業別に経験した人権学習の方法をみると、「公務員・教員」については、他の職業に比べて、さまざまな学習方法を経験している。いずれかの学習方法を経験した人の中で、「学生」の46.0%「疑似体験学習」を経験している。(図表 - 1 - 119)

図表 - 1 - 119 経験した学習方法の上位3つ

	1	2	3
従業員 25 人以上の事業所の正社員 N = 153	専門家の講演 28.1%	パネル等の展示 19.6%	当事者の講演会 18.3%
従業員 25 人未満の事業所の正社員 N=38	専門家の講演 42.1%	パネル等の展示 31.6%	当事者の講演会 参加者による話し合いなど 18.4%
自営業(家族従事者を含む) N=47	専門家の講演 21.3%	パネル等の展示 19.1%	当事者の講演会 17.0%
公務員・教員 N=44	専門家の講演 54.5%	当事者の講演会 38.6%	参加者による話し合いなど 疑似体験学習 34.1%
派遣社員・契約社員・嘱託・非常勤 N=56	パネル等の展示 19.6%	当事者の講演会 16.1%	専門家の講演 参加者による話し合いなど 12.5%
アルバイトやパートタイマー N=84	専門家の講演 25.0%	パネル等の展示 23.8%	疑似体験学習 19.0%
学 生 N=63	疑似体験学習 46.0%	当事者の講演会 15.9%	パネル等の展示 14.3%
休職中 N=13	専門家の講演 当事者の講演会 30.8%		疑似体験学習 23.1%
家事専業 N=129	専門家の講演 25.6%	パネル等の展示 24.0%	当事者の講演会 18.6%